教会学校教案誌

2014.4.5.6月号

あなた方は、キリストと共に復活させられたのですから、
上にあるものを求めなさい。

コロサイの信徒への手紙３章１節

No.53

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2014年度　救済史カリキュラム案　4～6月（第53号）

―『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月6日 レント	ゲツセマネのキリスト	問24, 26, 34, 81	ー
		マタイ26:36～46	ヘブライ7:25
	私たちの救いのために死ぬほどの悲しみを忍ばれた主の祈りに感謝し、共に祈ろう。		
13日 受難週	十字架のキリスト	問24	ウ大49、ハイデ37～43
		マタイ27:45～56	マタイ27:46
	私たちに代わり、神に捨てられる苦難と死を忍ばれた主の信仰と愛に感謝しよう。		
20日 復活祭	復活されたキリスト	問24, 36	ウ大52、ハイデ45
		マタイ28:1～10	マタイ28:5, 6
	復活された勝利の主をたたえ、自分たちの勝利を確信して希望をもって歩もう。		
27日	弟子たちを慰めるキリスト	ー	ー
		ヨハネ21:1～14	マタイ28:20
	主を裏切った弟子たちのため心を砕いて慰めて下さる主イエスの深い愛を知ろう。		
5月4日	弟子たちを立ち上がらせる キリスト	問66, 67	ウ告白5:5
		ヨハネ21:15～19	ヨハネ21:17
	弟子たちを立ち上がらせるため自ら立ち上がり、信頼と使命を与える主に従おう。		
11日	弟子たちを派遣する キリスト	問10	ウ小6, 94
		マタイ28:16～20	マタイ28:20
	永遠に共におられる復活のキリストを信じ、その力ある要求に応答しよう。		
18日	キリストの証人となる	ー	ウ大2～4、ハイデ21、ジュ300～308～
		ルカ24:36～49	ルカ24:48
	預言通り復活されたキリストとその新しい約束に生きる弟子たちにならおう。		
25日	教会を建てあげる キリストと聖霊	問39, 40, 65	ウ小39, 40, 41
		ヨハネ15:11～17	ヨハネ15:26～27
	教会を建てるため十字架に赴かれた御心に従い、互いに愛し合う共同体を築こう。		
6月1日	キリストの昇天	問26	ハイデ76
		使徒言行録1:6～11	ヨハネ15:5
	地上の業を成し遂げ、天における働きのために昇られた王なるキリストを仰ごう。		
8日 聖霊降臨祭	新しいイスラエル・ 教会の出発	問34	ハイデ54、ウ大58, 83
		使徒言行録2:1～5	使徒2:4
	神と共に歩むとは、信仰共同体と歩むこと。教会なくして救いなし。主日を大切に。		
15日	聖霊によって 説教する教会	問69, 70	ウ小89～90、ハイデ84, 115
		使徒言行録2:14～36	使徒2:36
	聖霊を受けた使徒たちは、迫害を恐れず大胆に説教した。聖霊を祈り求めよう。		
22日	最初の教会の姿	問29	ウ小30～32、ウ大66～68
		使徒言行録2:37～47	使徒2:38～39
	聖霊と御言葉と祈りに導かれるとき、小さな群れも力強く歩める。基本に忠実に。		
29日	ペトロとヨハネの働き	問30	ウ小30
		使徒言行録3:1～10	使徒言行録3:6
	御名を唱える弟子たちと共にキリストが働かれる。教会の働きはキリストの働き。		

日本キリスト改革派教会中部中会　2014年4・5・6月号
教会学校教案誌　第53号

もくじ

2014年4・5・6月カリキュラム
まえがき……長谷川　潤　……4
巻頭説教……西　牧夫　……5
ジュニアサマーキャンプ2013　……長谷川はるひ　……8
　はこぶねにのろう～恵みの契約の継承～
講演　……金　起　泰　……13
　中会の職務とこんにちの課題
本誌の基本方針……相馬　伸郎　……26
　教会（日曜）学校像について
自由募金のお願い……29
副読本のご案内……30

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……31
　4月 6日……32
　4月13日……37
　4月20日……43
　4月27日……49
　5月 4日……55
　5月11日……61
　5月18日……67
　5月25日……73
　6月 1日……79
　6月 8日……85
　6月15日……91
　6月22日……97
　6月29日……103

2014年7・8・9月カリキュラム……109
2014年度年間カリキュラム　……110
執筆者よりひとこと・あとがき……112

まえがき

幼児伝道雑感

長谷川　潤

四日市教会に併設されているまきば幼稚園では、新入園児たちを迎えて新年度の歩みが始まりました。毎週月曜日が礼拝の日ですので、午前、幼稚園での礼拝が終わるまで気が抜けません。幼稚園の礼拝でお話しをするようになって8年ですが、未だに試行錯誤の連続です。何よりも110名の3歳児から5歳児にお話しをするのは至難の業で、ものすごいエネルギーが必要です。8年近く試みた中で教えられたことをあれこれ述べます。

1) 人が話を聴けるのは3分が限界だと言われます。まさに幼児はそうです。興味がないと、すぐにお隣の友だちとのおしゃべりが始まったり、ふざけ出したりで、容赦がありません。ですから、毎回、3分前後のショート・メッセージです。
2) 幼児は極めて具体的な世界に生きています。抽象的なことは分かりません。たとえば、お空がエーンエーン、泣き出した、というように。雨が降り始めたということです。
3) 3分前後のショート・メッセージですから、話しを丸暗記して臨みます。暗記を日曜日の晩から月曜日の礼拝前にかけて行います。分量はだいたい1200字です。幼児に対しては、直接語りかけることが、3分間もたせるには大事です。
4) しかし、幼児に言葉だけで語りかけるのは、それこそ至難の業です。何よりも、私自身が、イメージ豊かな言葉に乏しいのです。8年間、幼児と対話を試みる中で、少しは幼児に　通じる言葉を獲得できたかなと思っていますが、まだまだです。ですから、『チャイルドバイブル』（いのちのことば社CS成長センター）のイラストをカラーで拡大コピーして、それを画用紙集に貼り付けて、それをめくりながら語ることにしています。
5) ショート・メッセージの内容ですが、年少組には10月ぐらいに合同礼拝となるまでは、　天地創造物語、ノア物語、バベルの塔物語までを語ります。年中組・年長組には、旧約聖書物語、新約聖書物語、特にイエス・キリスト物語を隔年で行っています。一応、3年間で、聖書物語を聴くことができるようにしています。
6) 幼児に対して、説教者は、ある程度、俳優になる必要があります。つまり、ある程度大げさなジェスチャーが必要です。一人で、ダビデになったり、ゴリアトになったり、と。音響係にもなる必要があります。幼児に語りかけるには擬音がとても効果的です。

園児のご家庭の100%近くが未信者のご家庭で、卒園したらキリスト教とは関係がなくなる子どもたちですから、いろいろ工夫を凝らしても、四日市教会で、実が結ぶことがなかなか難しい状況があります。種蒔き伝道と心得て、彼らが成長して人生の難局に直面した際、どちらかの教会でイエスさまへの信仰という実が結ぶことを祈り願っています。（四日市教会牧師）

巻頭説教

天の国で一番偉い者

西　牧夫（灘教会牧師）

「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った。そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」（マタイ 18:1～5）

マタイ福音書18章の主題と構成

マタイ福音書には五つの大きな説教が置かれています。第一の5章の「山上の説教」(5:1～7:29) で始まり、第二の10章の「十二弟子の伝道派遣の説教」(10:5～11:1)、第三の13章の「天の国の譬えの説教」(13:1～53)、第四の18章の「弟子たちの共同体についての説教」(18:1～19:1)、最後に第五の24章から25章の「終末についての説教」(24:1～25:46)) で結ばれます。

18章から19章1節で語られる説教は、その中でも一番短い第四番目の説教に当たります。特に「弟子たちの共同体はどうあるべきか」という主題の下に、次のように具体的に語られます。①18章1節～5節では「天の国でいちばん偉い者」、②18章6節～9節では「躓き」、③18章10節～14節では「迷い出た羊の譬え」を通して、教会が「小さい者」に対してどのように配慮し、交わりを持つべきなのかが語られます。さらに④18章15節～20節では、主にある兄弟姉妹が罪を犯した場合、どのように教会は対処すべきか、最後に⑤18章21節～35節では「仲間を赦さない家来の譬え」を通して共同体の中心が「罪の赦し」にあることが語られます。

「天の国で、だれがいちばん偉いのか」

この「弟子たちの共同体」を主題とする説教の発端となったのが、弟子たちの次の質問からでした。18章1節です。「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った」。「そのとき」とは、主から二度に亘る受難と復活の予告を受け、実際、エルサレムへの道を歩んでいる時のことです。十字架への道の途上にあって、弟子たちの心を占めていた関心事が露わにされます。「弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った」。弟子たちは、主と共に十字架への受難の道を歩んでいるにもかかわらず、未だその意味を理解していないのです。

「子供のようにならなければ」

しかし、そのような弟子たちの問いに、主は不思議な答え方をされます。18章2節です。「そこで、イエスは一人の子どもを呼び寄せ、彼らの中に立たせ」た。現代では、「子供」は、生まれた時から既に人格を備えた一人の人間として認められています。むしろ、子供の無邪気さや素直さ、信頼深さや創造性の豊かさなどが高く評価されます。しかし当時の古代社会で

は、「子供」は未熟で、判断を下す能力のない未完成な人間であり、父親の絶対的な権威の下に教育しなければならない存在と思われていました。つまり、「子供」は、社会的には無力で、無価値な存在として低く見なされていたのです。

しかし、そのような「一人の子供」を、主は呼び寄せて、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と質問する弟子たちの中に立たせ、そして、こう宣言されるのです。「アーメン。私はあなたたちに言う。あなたたちは心を入れ替えて、この子供のようになるのでなければ、決して天の国に入ることは出来ない」(18:3)。主は弟子たちに、先ず「天の国に入る」ために、「心を入れ替える」ことを求められます。「心を入れ替える」とは、心の向かう方向を転じることです。「だれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」という、常に上に登ろうと図る権力志向、他者と比較して自分の位置をつねに優位に置こうと図る在り方を止めるのです。その向かう方向を全く逆転させて、小さく、無力で、他者に頼るしかない「子供たちのようになる」在り方へと転換しなければ、決して「神の恵みの支配」の中に入ることはできないと、主は言われるのです。

そして、「だれが、天の国でいちばん偉いのか」と質問する弟子たちに答えて言われます。「自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ」(18:4)。主はここで、「子供のようになる」ことを、「自分を低くする」ことであると言われます。社会的には無力で、無価値な存在として低く見なされている「子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ」と。

「小さき者」を中心に受け入れる共同体

では、「自分を低くする」とは、実際には、どういうことなのでしょうか。主は次のように言われます。「わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」(18:5)。自分の栄誉や名声を求め、自分を高くしようとするのではなく、自分を低くしてへりくだり、人々に軽視される「このような一人の子供」を受け入れることが求められるのです。しかし、それだけではありません。驚くべきことに、「わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」と、主は言われます。主は、価無き「このような一人の子供」に、ご自身を結び合わせて、ご自分と同一視してくださるのです。

無力で、無価値な存在として低く見なされていた「一人の子供」を、主は呼び寄せて、「だれがいちばん偉いか」と質問する弟子たちの中に立たせられました。主がそこで明らかにされるのは、〈弟子たちの共同体の中心に立っているのは、いったいだれなのか〉ということです。18章20節で、主はこう言われます。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」。主ご自身が、「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順」に歩み尽くされます(フィリピ2:6〜8)。この十字架に至るへりくだりの道を、弟子たちは、今、主イエスと共に歩んでいるのです。

神に依り頼む以外にない「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」(5:3) と、ガリラヤの山上で群衆に語り始められた主イエスの第一の説教は、その終着点として、エルサレムの都で弟子たちに語られる25章の「最後の審判」の第五の説教へと深められて行きます。「人の子」なる主イエスが、栄光の座に着かれ、真の裁き主として再び来られる世の終わりの時、この方の御前に「すべての国

の民が集められ」、一切のものに最後の決着がつけられ、すべての人に白黒がつけられるのです。主はそこでこう約束されます。「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(25:40)。

仕える共同体の秩序

「主イエス・キリストを中心とする共同体はどうあるべきか」。20章で、受難と復活の三度目の予告の直後、いよいよ十字架の待ち受けるエルサレム入城の直前に、息子のために権威の座を願うヤコブとヨハネの母に対して、主はこう言われます。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように」(20:25〜28)。主に召され、主に従う弟子とされたことの本質は、「自分を低くして」、神と人に「仕える」ことにあります。教会は、ただ「キリストの僕として仕える」ことを通して現される神の義と愛の支配の器として、「神の国」の到来に仕える器に過ぎません。

十字架の死に至るまでへりくだられたキリストを、「神は高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです」(フィリピ2:9〜10)。

ジュニアサマーキャンプ2013

はこぶねにのろう～恵みの契約の継承～

長谷川はるひ（中部中会ジュニアサマーキャンプ実行委員会、関キリスト教会会員）

中部中会では、毎年夏休みに、雀のお宿キリスト教会館で小中学生のためのキャンプを実施しています。2013年には、7月30日㈫～8月1日㈭に行いました。祝福に満ちた2泊3日を報告します。

今回のテーマは、「はこぶねにのろう～恵みの契約の継承～」。

テキストは、創世記6章9節～9章17節。

○『ノアの箱舟』の御言葉から神様からの約束（恵みの契約）を知る。

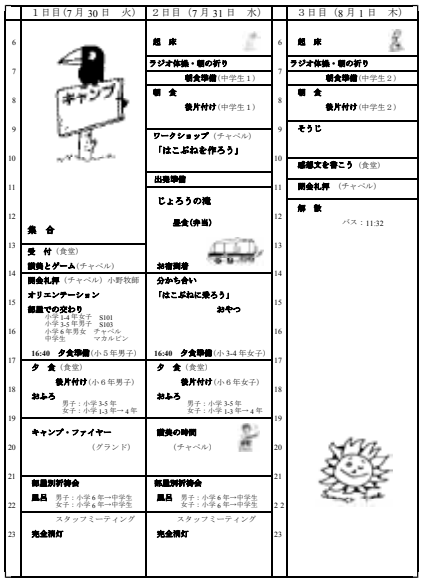
○集団生活の中で、共に学び、共に遊び、共に祈りあい、主にある家族として過ごす。

○キリスト者として、中会の仲間として、一人ひとりが、神様からの恵みの契約の中に生かされていることを体感して欲しい。

以上の目的に向けて、祈りつつ準備をしました。

参加者は小中学生40人、スタッフ・保護者は約30人。

ジュニアサマーキャンプ2013　プログラム



テキスト（創世記6章9節～9章17節）

開会礼拝	6章11～22節 箱舟にのろう
夜の部屋 別祈祷会	7章17～20節 洪水に耐え、箱舟は守られる
朝の祈り会	8章1～5節 恵みにより、雨止む
夜の部屋 別祈祷会	8章15～21節 洪水後の世界、闇から光へ 礼拝への道（祭壇）
朝の祈り会	9章5～7節 洪水後の世界、 命の保護、神の形への畏敬
閉会礼拝	9章5～7節 虹と、ノア契約

ワークショップ１　「箱舟を作ろう」

A．箱舟実測（中学科）

初日の分級で、聖書から箱舟の大きさを割り出しました。1アンマは「肘から中指の先までの長さ」なので、一人ずつ自分の長さを測り、平均を出しました。中学科13人（含む大人3人）の平均は40.92㎝。約41㎝。

箱舟は、縦300アンマ、横50アンマ、高さ30アンマなので、中学科平均約41㎝で換算し、縦123m、横20.5m、高さ12.3mとしました。

二日目午前。雀のお宿の広い敷地を利用して、実寸の箱舟の大きさを白線で描きました。

まずは、門のところで巻き尺を使って横20.5mをはかり、杭を打ちました。次に、縦123mは、畑の長さを測るひも（ホームセンターに売っていました。一巻き130m）を使って、門から宿舎の方へ測りました。ロックヒルホールを通り越し、坂を下って、栄光館の端まで達しました。なんて長いんだろうとビックリ！ そして、縦と横のバランスが、ものすごく縦長の長方形

であることにもビックリでした。それから、ひもの上をライン引きでたどって、石灰のラインを引きました。

B．11/100スケール・リアル・ミニ箱舟制作

（6年男子＋中学科男子）

木工工作の箱舟模型は、3階建てで分解できるようになっていました。子どもたちの仕事は、動物たちの部屋の仕切りを作ること。細長い板を、やすりで削って、箱舟の各階に取り付けていきます。地味な作業なのに、子どもたちの瞳はキラキラ。熟練工の親方（長老さん）の指導の下、忍耐強く細かい作業を続けました。

C．虹を作ろう（3～5年男子）

七色の折り紙を台紙に貼って、大きな虹を作りました。直径4m。折り紙は一番外の赤が84枚、内側の紫が65枚という計算。弧を描くように微妙にずらして貼っていくのが、なかなか難しい作業だったようです。ここでもニコニコ笑顔キラキラ瞳で作業が行われました。

D．動物を作ろう

（小学科女子＋中学科女子＋結局ほぼ全員？）

⑴紙工作（「一緒に遊ぶ工作絵本＊アルファベット動物」無印良品）

アルファベットにデザインされたポップな動物ができる紙工作。可愛くて、子どもたちも大人もドキドキ。たくさんの動物ができました。

⑵クレイ粘土

指の大きさくらいのカラフルな紙粘土で、小さな動物たちがたくさんできました。箱舟模型に合わせて小さく作ったのかと思いきや、紙粘土の大きさに合わせて作ったら、模型サイズに仕上がったそうです。いろいろな種類のつがいの動物たちができる中、なぜかカモノハシペリーやドラえもんやキティちゃんもできました。そして、ノアの家族8人も。

ワークショップ２　「箱舟に乗ろう」

中学科が引いた箱舟実寸の線をたどって、全員で箱舟の大きさを体験。端から端まで走ってみました。といっても、途中から藪の中に入ってしまうので、走れるのは90mくらい。全員で手をつないだけれど、箱舟の長さの3分の2くらいしか届きませんでした。「こんなに大きな箱舟に、たくさんの動物が乗ったんだね」と実感。そして、箱舟の模型を真ん中に置いて、みんなが作った動物を乗せました。

方舟と虹の記念撮影

キャンプファイア

一日目の夜はキャンプファイアを囲んで、讃美やゲームをしました。今回の目玉は「光るうちわ」。赤青緑3色ライトでキラキラ光るうちわに、子どもも大人も大はしゃぎ。

寿老の滝

二日目のお昼は、雀のお宿から車で1時間ほどの「寿老の滝」に出かけました、お弁当を食べたから水遊び。近寄るのが恐いくらいの滝に果敢に挑戦して水浴びをしたり、沢ガニを捕まえたり、冷たい水でお茶を冷やしたり。

ここ数年毎年この滝に行っていますが、子どもたちは『来年も行きたい」と楽しみにしています。

寿老の滝の記念写真

讃美の時間

二日目の夜はロックヒルホールで讃美集会。讃美リーダーを務めてくれた中2のお姉さん二人は、キャンプ前から、キャンプ用讃美のCDを吹き込んでくれました。長老さんによるオリジナル曲「ジュニアサマーキャンプのテーマ」「Happy Hapypy」「ノアの箱舟3部作」など全17曲。楽しいダンスやゲームも交え、心も体も全部を使って神様を讃美することができました。

讃美リーダーのお姉さんたちは、讃美の時間だけでなく、開会礼拝や朝の祈祷会、食事前の讃美でもみんなをリード。責任ある奉仕を喜びをもって果たしてくれて感謝です。そして、お姉さんたちの奉仕がうまくいったこと我がことのように喜んでいる下学年の子どもたちは、いずれ自分たちが讃美リーダーの役割を果たそうと、わくわくしています。

部屋別祈祷会

就寝前にお祈りシートを使って部屋別祈祷会を行います。お祈りシートは、キャンプで初めてお祈りをする子どもも、毎日お祈りしている子どもも、いっしょに祈ることができるようにと作りました。子どもたちは真剣にシートに書き込みをし、感謝やとりなしの祈りをします。共に祈り合うひとときに、とりわけ子どもの真っ直ぐな祈りにアーメンと唱和するときに、本当に豊かな御恵みを感謝します。

食事の準備と片付け

キャンプの食事は、通いのボランティアの婦人たちのご奉仕ですが、テーブルセッティングと皿洗いは子どもたちが当番で行います。雀のお宿の大きな炊事場でお皿を洗うのは、子どもたちにとって楽しみの一つ。楽しみながら、教会の中で役に立つスキルを子どもたちが身につけていることに感謝です。

最終日の掃除

三日目、部屋の荷物を片付けた後で、それぞれの分担場所を清掃します。

人数が多い学年は、たいてい食堂掃除なので、「わたしたち、毎年ここ掃除してるんだけど」と文句が出たりもします。トイレ掃除や大浴場掃除は、手間もかかって大変ですが、高学年しかできない奉仕なので、大きいお兄さんやお姉さんたちががんばってくれます。小さい子どもたちも小さい子どもたちなりに、一生懸命掃除をします。2泊3日過ごしたお宿が来たときよりもきれいになって帰るのは嬉しいものです。

おいのりシートA　２０１３年　７月３０日（火）

聖書　創世記７章１７～２０節

おいのり

よびかけ	かみさま　天のおとうさま　天の父なる神さま
かんしゃ	きょう、 ありがとうございます。
ざんげ	きょう　おかした　わたしの　つみは、 です。どうか　おゆるしください。
ねがい	こんや あした
そのた	
むすびのことば	このお祈りを、イエスさまのお名前によって、おささげいたします。　アーメン

お祈りシートB　２０１３年　７月３０日（火）

聖書　聖書　創世記７章１７～２０節

お祈り

呼びかけ
今日の感謝
聖書を読んで思ったこと
隣人のための祈り （　　）さんのためにお祈りします。
その他
結びの言葉

お祈りシート

お持ち帰り用箱舟（ペーパークラフト）

今回はお土産がつきました。1/560スケールペーパー箱舟モデル。長老さんの自作ペーパークラフトキッドです。販売できそうなくらい精巧。

木工工作の箱舟模型も大きな虹もペーパークラフト箱舟キッドも、中会内の各教会の長老さんたちの手作りで、どれもこれも玄人はだし。精魂込めたご準備に心より感謝しつつ、きっとまた、来年もすてきな教材が用意されることと期待して待っています。

ペーパークラフトの写真

御祝福の中で、大人たちが全力で準備したプログラムに、子どもたちはめいっぱい楽しんで応えてくれました。

感想文

最終日にはキャンプの感想を書きます。子どもたちの感想の中からいくつかを紹介します。

○ノアの箱舟がとてつもなく大きかったことを実感しました。

○キャンプでたのしかったことは、ノアのはこぶねにのるどうぶつをつくったことです。自分でつくったのは　パンダとトカゲをつくりました。Mちゃんはカモノハシペリーをつくってました。

○ねんどで、とらとねこと羊とはとを作りました。その動物をひもではかってつくったはこぶねにのせました。

○よくきく話だったのでよく知っていると思っていたけれど、知らないこともあったので、勉強になりました。

○小さいころから何度も聞いた話でしたが、箱舟の大きさをはかったり模型を作ったりすることで体で感じ、理解を深めることができました。

○ノアは40日間も雨がふって不安だったけど、すべてを神様にまかせたということが一番心に残りました。

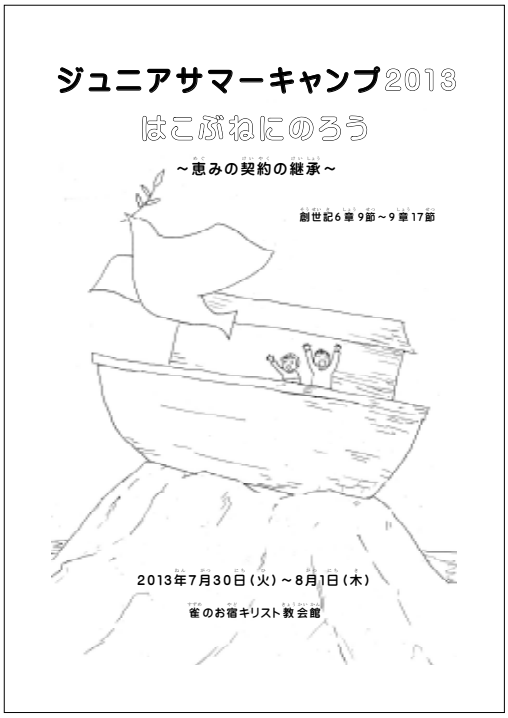
○神さまは、私たち人間や動物のことも愛してくださり、暗やみの中で不安でも神様がそばにいてくれるという事が心に残りました。

○聖書のお話を聞いて一番心に残ったのは『神様を信じていれば絶望的なときでも希望がある』ということというです。また来年もジュニアサマーキャンプに来て聖書のことを学びたいです

○みんなで遊んだり賛美したりして、楽しかったです。また、みんなにはげまされました。

○さんびの時間では、いつもあんまりおどっていない人もちゃんとおどってくれたのでうれしかったです。

○キャンプファイヤーをしたことや、じゅろうのたきにいけたことが楽しかったです。また来年もきたいです。



しおりの表紙

講演

中会の職務とこんにちの課題

エフェソ2章19〜22節

金　起　泰（犬山教会牧師）

はじめに

このように今晩も神様が善き学びの時を備えてくださって、神様に感謝します。この講演を通して、私たちの中部中会が行く道を共に探り、それによって、中会の形成、各教会が力を出し、共に成長するきっかけになりますようにと、切に祈っています。

先週に引き続き、私たちは中部中会の現状を踏まえ、私たちが本当に神様が望んでおられる中会になるために、わたしたちがこの二つの講演から学び、神様に栄光を表したいと願っています。先週は橋谷先生の講演がありました。

現在、世界宣教は、大きな変化の時代を迎えています。これまで世界宣教のために献身的に働いてきたのは、アメリカを中心にした西欧の教会でした。このような点において、アジアの教会は、西欧の教会に頭を下げて感謝するしかないかと思います。彼らの教会と宣教師の犠牲によって、日本と韓国を初め、様々なアジアの教会は、真の神様を知るようになりました。ところが今、世界宣教を巡って、西欧教会は苦しい羽目に陥っています。そこに二つの厳しい現実があります。それは宣教献金の減少と、宣教師、あるいは宣教師候補者の減少です。実際、アメリカの教会は、世界宣教に関して、5年前から50％の財政の削減を実施しています。ご存じのように、私たちと共に働いているCRCやOPCなどアメリカのミッションでは、非常に財政的に圧迫されており、難しい時代を過ごしています。今日本ではCRCの宣教師は4人しか働いていません。

西欧諸国が中心となっているある宣教団体は、その深刻性を物語ってくれます。30年前この宣教団体で働いていた宣教師は約6500人でしたが、現在は4000人しかいません。30年間で2500人の宣教師が減った事実があります。しかしより悲しいことは、多くの宣教師が、引退を控えているのに、宣教師候補者が与えられていない厳しい現実があります。さらに財政の圧迫により、宣教のプロジェクトを減らさなければならない状況に、彼らは直面しています。

さて、日本キリスト改革派教会は、142教会・伝道所があります。しかし働いている牧師は、119人しかいません。無牧の教会がそれだけあるのです。会員総数は9800名位です。その中に現在陪餐会員が5200名程、未陪餐会員が2000人程です。これは幼児洗礼を受けながらも信仰告白をしていない兄弟姉妹が多くいることを物語っています。それだけではなく、神学生の数も多くはありません。今年卒業したのが3人でした。それから来年は2人、再来年は1人しかいません。しかし今、2020年までに引退を控えている牧師は、約36名います。ですから私たちは、とても危機感を感じる状況にあります。

ところが私は、怒りの内にも憐れみを忘れない神様を固く信じる者です。私たちの侵した罪より、神様の恵みがはるかに大きい、だから私たちに罪があっても神様は充分に私たちをもう一度裁いて、そのような道に導いてくださる確信を持っています。それは言い訳ではありません。心の中で悔い改めながら、そして私たちは謙遜な心をもって共に力を合わせ歩んでいけ

ば、必ず神様は良い道を備えてくださる。そしてその道を通して、神様御自身が栄光をお受けになるとの確信でもあります。

毎回、信徒講座だけではなく、様々な集会に出席する時、兄弟姉妹たちに非常に励まされます。本当にこのようなに兄弟姉妹たちが与えられているからこそ、私たちにも希望があるかと思います。私もこの原稿を準備しながら、中会形成のために祈って励んでいる兄弟姉妹たちのことを考え、本当に励まされました。このような希望が与えられているのは、ここに皆さまが集っておられるからです。

中会とは何かについて、すでに二人の先生方が語ってくださいました。信徒研修会では袴田康裕先生、そして先週は橋谷英徳先生が講演してくださいました。私はこの二人の先生方の講演を踏まえて、少し具体的な話しを今晩はさせて頂きたいと思います。今日の講演の題を、「中会の職務とこんにちの課題」としました。つまり教会規定に基づいた中会形成と各教会の成長のために、高神教会の老会形成の歩みを紹介しながら、今日の私たちの課題を三つの観点から考えてみます。

1. コーラム・デオ（Coram Deo、神様の御前に）

参考として、現在、高神教会の教勢は、下記の通りです。

教会：1811　　老会：36

牧師：約3300名　　会員数：約48万人

これらの高神教会の信仰と成長に強い影響を及ぼしたのは、高麗神学大学院と高神大学です。また高神教会のアイデンティティは、これらの学校を除いて説明できません。

私は小さい頃からこの教会に通っていました。主の日の祈りにおいても、水曜日の祈祷会の祈り、様々な所での祈りで、いつも、牧師・長老・一般信徒が祈っても、公な礼拝においては、必ず三つの祈りを献げました。その一つが、この教会が世界宣教に対してどのような責任を持っているか。そして教会の使命が世界宣教にあることを、ずっと祈ってきました。それと共に、神学校のために祈りました。全国の高神教会の信徒は、毎週の礼拝において、共に祈りを献げました。それと共に、国家、政府の為政者のため、そして北朝鮮のことがありますので、北朝鮮の宣教のためにも、祈ってきました。この三つに関して、毎回祈りを献げました。今、30年、40年振り返ってみれば、神様がこの祈りを、そのままかなえてくださったと私は確信することができます。

ですから私たち日本キリスト改革派教会も、そのように世界宣教、神戸の神学校と東京の研修所のため、それから、政府の様々な政治家、そして為政者のために祈る必要があるかと思います。

さて、高神教会の二つの学校の教育理念をみたいと思います。まず神学校、高麗神学大学院と言いますが、三つの教育理念があります。一番目だけを記しましたが、「神様の御言葉を正しく教え説教する資質とコーラム・デオの敬虔を兼備させることによって神様の教会を立て復興させることに資することができるようにする」ということです。

そして高神大学の教育理念は、「コーラム・デオの人間像の具現」であります。

この二つの学校の教育理念から、すぐ分かるように、高神教会の教会像・信徒像は、コーラム・デオにあります。神様の教会の奉仕者である牧師と、その御言葉によって生きる信徒の資質は、コーラム・デオの敬虔に深く繋がっているとの意味です。実際、高神の信徒は、小さい頃から最も良く聞く言葉は、「コーラム・デオ」です。私もたくさん聞きながら育てられました。全国に散らばっている教会がどうやって一

つの目標に向けて歩むことができたのでしょうか。それは要石なるイエス・キリストという一つの目標に向けさせるために、教会に求められたのは、コーラム・デオの信仰と精神、すなわち神様の御前にという確実な教えです。神の御前の意識と呼ばれるコーラム・デオの信仰は、聖書の神様に基づいています。それ故に一人ひとりの信徒は、小さい頃から神様を畏れ敬う存在として育ち、自分の人生の目的を神様に栄光を現すことに合わせたのです。このようなコーラム・デオの信仰は、主日の公的礼拝だけではなく、平日の私的礼拝にも強く影響を及ぼしました。こういうわけで信徒は、教会共同体を中心にして、家庭と社会、学校、会社においても、地の塩、世の光として、励んでいくことができたのです。ですから、私たちは学生の時代、神様の御前に生きている者ですので、普通の私たちの友達と違ったのです。普通の人はカンニングだとか、悪い方法を用いました。しかし私たちは、そうした悪から離れて、過ごすことができました。小さい時から、神様の御前で私たちが過ごしています。だからこそ信徒の前で謙遜な心をもって、聖なる生き方を目指して、生きることができたのは、このようなコーラム・デオ、神様の御前に生きることができました。だからこそいつも正直に、率直に生きる訓練をできたのも、コーラム・デオの教えがあったからです。今日の御言葉で、パウロは、「キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります」（エフェソ2:21）と語っている理由も、ここにあります。教会が完全になるためには、私たち一人ひとりが、キリストにおいて一つの目標を持たなければならないと、パウロは力強く語っています。パウロは、今私たちに向かって自分の名誉を立てる高慢を捨てて、キリスト中心に一つになることの大切さに気付かせてくれます。ここに中会の役割があるのではないかと思います。

日本の改革派教会と同じように、高神教会も老会の職務が規定されています。ここには大切な12項目のことが記されています（別紙資料参照）。私たち改革派教会の場合は、22項目が規定されています。これらの項目を眺めてみると、中会の大切な役割は、キリストの体なる教会を成長させることと、深く関わっています。教会の成長のために、中会は牧師の資格と資質はもちろんのこと、長老と伝道師においても同じ関心をもって指導する必要があります。だから、日本キリスト改革派教会と高神教会の大きな違いは、高神教会の場合は長老を選出する時にも、各個教会で選出することができません。老会の承認がなければ、個々の教会が長老を立てることができません。それが少し異なる点です。長老、講堂師、伝道師まで、すべての教会の役員を、老会が責任をもって指導する、これが高神教会の願っている点です。

実際に各老会は、管轄区域教会のために、様々な活動に力を入れています。例えば、東釜山老会の場合は、次のように要約できます。第一に連合小会、連合長老会、連合婦人会、日曜学校連合会、SFC（中・高・大・青年）の指導と各地区（四つ）などの活動と報告を老会が責任を持っています。第二に、国内伝道と海外宣教です。ここには開拓教会への支援、伝道所の宣教教師の夫婦のための慰労金、農・漁村教会への支援、軍宣教、海外宣教師の支援などが含まれており、北朝鮮の支援も同じです。これらを指導しています。それから第三に、教会教師専門大学と平信徒神学院の運営があります。これらは春（3〜6月）と秋（9〜12月）に約3ヶ月ずつ実施します。こういうことに彼らは非常に力を注いでいます。日曜学校教師の訓練と、これから長老、執事となる教会の人材養成のために訓練しています。

ここでもう一つ、申し上げたいことがあります。それはキリストにある「兄弟愛」です。後程、愛について話すつもりですが、ここで兄弟

愛を話す理由は、このことがキリスト者の集いの要だからです。キリストが中心になるという一番大切なことの一つは、集まってい人々が神様に愛されている、そして愛されている者たちが互いに愛を持って献身する。愛を持って相手を尊敬する。そのようなことが実際、必要なことです。

私の同級生の話しですが、彼は東釜山老会のある教会に担任牧師として招聘されました。彼はそれまで副牧師の生活において、様々な経験をして、やがて担任牧師になろうと思って、祈りながら、いろんなことを学び、訓練を受け、準備してきました。彼の場合、海外でも訓練を受けました。それでようやく東釜山老会のある教会から招聘を受けました。それで今もその教会で働いていますが、ある日、彼が私に話してくれました。自分は副牧師の間、いろんな準備をしたが、担任牧師になるためには、もっと大切なことがあるではないか、それで半分は期待感をもって、そして半分は不安なところもあったようです。しかし感謝なことに東釜山老会の先輩牧師たちが、心配してくださいました。ある日は温泉に行き、二人が温泉でその教会の歩みについて先輩牧師が話してくれました。注意すること、もっと力を入れるべきことを話したようです。他の日には、他の先輩牧師が呼んでくださり、今度は食堂で、二人が話し合ったのです。そうすることによって、自分は戸惑いがあったが、それを乗り越えることができたとのことでした。今もその先輩牧師を尊敬し、自分を迎えてくださった熱い思いに感謝しています。こういうことを、彼は私に話してくれました。このように兄弟愛、これが老会形成において、非常に大切な事柄ではないかと思います。

東釜山老会のように、各老会は、政治規準の意義について教理の純全を守りながら、信徒の訓練を行っています。同時に老会は、改革派主義の下で、信仰と知識を増進させ、背教と不道徳を防止しています。これらのあらゆる事柄の中心に、コーラム・デオの精神と敬虔があります。このような老会の働きを通して、各教会と信徒は、神様の掟と人間の掟、神様のご判断と人間の判断の相違の理解を深めながら、より福音と共にキリスト者として造り変えられていくのです。人間と違い神様は、私たちの力によってではなく、私たち一人ひとりが、どれだけキリストに繋がっているかによって裁かれる方であることを、小さい時から、そしていつでも教えられています。

そういうことで、コーラム・デオのキリスト者は、常にイエス・キリストに導かれ、どのような環境に置かれても、その方のみを見上げるようになります。だからこそ私たちも、今晩集まっているのも、神様について話しを聴いていますが、そして私たちが散らばっていく時に、私たちは神様の御前に過ごしている、そのような存在であることを、自覚しながら過ごす者となる必要があるのです。

2. 福音の三要素：信仰・希望・愛

それから中会が、何をしているのかということは、福音の三要素（信仰・希望・愛）を実践できるように、老会が指導しています。高神教会の老会形成を考える時、見逃してはならない一つの事柄があります。それこそ「調和」です。

キリスト教の調和は、教理と実践、信仰と生活、神様への愛と隣人愛、礼拝と福音宣教などで表現できるかも知れません。パウロの手紙も大体このような仕組みになっています。先程、高神教会の二つの学校の教育理念を紹介しましたが、ここにもキリスト者としての調和が際立っています。同時に高神教団が大切にしている二つのことがあります。その一つは「信仰の正統と生活の純潔」であり、もう一つは「正しい神学、正しい教理、正しい生活」です。これらからも、キリスト者としての「調和」の大切さに気付かされます。

キリストの真の霊は、福音の正しい理解を求めています。福音の正しい理解には、少なくとも二つのことを取り上げる必要があります。まず、福音とは、イエス・キリストのことです。イエスさまは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（ヨハネ14:6）とお語りになりました。それもイエス様が中心にならないと、教会は成り立ちません。キリストから少しでも離れてしまえば私たちは道を彷徨い、ぼろぼろになり、結局命を失ってしまいます。そしてこのような福音理解は、必ず信徒を成長させます。神様の恵みによる信仰の旅路には、霊的成長が伴います。つまり福音は、私たちの信仰と成長において規準です。そういうわけで、私たちの信仰の先輩たちは、福音の三要素である信仰・希望・愛を絶え間なく強調しました。

有名なJ.I.パッカーの本は記しています(「信仰生活の三つの領域：別紙参照)。これを充分に説明する時間がありません。しかしこれに目を通して頂きたいのですが、これは私たちの信仰生活において、最も大切なことが記されています。信仰・希望・愛であり、私たちが重んじている使徒信条、主の祈り、十戒です。これが私たちの信仰と生活において最も要となる教えです。それをユダヤ人の方から、今日に至る歴史を追跡しながら、パッカーは要約しています。非常に参考になります。

これらの三つは、常に一緒に働きます。この三つの中で一つが欠けることはありません。信仰のない希望、希望のない愛、愛のない信仰などは、真理ではありません。この三つは互いに結びついています。信仰・希望・愛は、常に一緒に歩んでいます。なぜならこの三つは、同じ福音（イエス・キリストのことです)、福音という土台と源に根を張っているからです。

高神教会の各老会は、このような福音に生きるために、素直に励んでいます。老会の職務に記されているように、老会は各教会の伝道事業を指導し、霊的有益をはかっています。老会はカルヴァンを初め、改革派主義の先輩たちのように、知識のない信仰はないこと、御言葉から離れれば信仰は少しも残らないことに気付いています。聖書中心の教育と訓練に専念しています。先程紹介しました高神教会の老会が運営している教会教師専門大学と平信徒神学院は、健全な教会と健全な信徒の信仰教育のために、始まったわけです。

さて、老会内の各教会は、自分の教会の力量に合わせて、様々な教育と訓練を行っています。平日にも教会は祈りの家として、御言葉の家として用いられています。このように信徒は、祈りと共に御言葉の学びをとおして、信仰がより強くなる教会と福音のために生きることができることを念頭において、励んでいます。特に主日の夕拝は、老会内の牧師や宣教師の説教をとおして、幅広い信仰の世界に導かれています。私も小さい頃、中学生の時から大人の礼拝に参加させて頂きました。私の母教会の場合は、海外から、つまりアメリカや南アフリカ、あるいはオランダ、香港（当時は英国領でした）からたくさんの人たちが来ると、牧師は必ずそれらの人たちを招いてくださいました。そのため中学生のことからずっと、そのような人たちの話しを聴いて、学生たちは自然に世界観が広がっていきました。そのため、私の先輩、後輩も、何人かは海外で働いています。そのようなことができたのは、小さい頃からずっとこのように老会が配慮してくださったからです。今も忘れることができないのですが、その当時、母教会出身の宣教師は、台湾で働きました。そして台湾のサンギ族の兄弟姉妹たちが教会に来てくださいました。サンギ族には着物があります。本当に華やかな着物です。共に礼拝を献げ、兄弟姉妹のことを、実際に交わりながら学ぶことができました。今も同じです。夕拝になると、いろんな先生や宣教師をお招きして、話しを聴く

のです。

先日、二人の先生方が東釜山老会訪問のために韓国に行かれました。その時も同じです。午前の礼拝、午後の礼拝で、日本人の牧師を招いて説教を聞くわけです。だから信徒たちはそういうことによって、キリストにある深い愛を感じ、同じ改革派主義を持っている人々が全世界にいることを、説教をとおして知ることができるのです。

さて私たちは、秋の信徒神学講座の意義について少し考える必要があるのではないかと思います。数年前から中部中会には、危機意識が広がっていました。統計資料によりますと、昨年、中部中会は、会員総数が18名減り、現住陪餐は23名が減りました。一つの教会・伝道所の会員に匹敵し、大切な意味が込められているのではないかと思います。23名が減ったということは、一つの教会・伝道所が減ったということと一緒ではありませんが、それ位の辛さがあるのです。このことを考えると、神様の御前に畏れを感じてしまいます。中部中会の危機意識は、このような教勢の停滞、会員の減少にも原因がありますが、これと共に、先輩の教師の定年退職のことにも繋がっていくことかと思います。私たちは、3〜4年経つと、約5名の先輩牧師が引退していく予定です。このような状況の中、中部中会将来検討設計委員会が設置され、活動している所です。この委員会の主な任務は、4月の定期中会の提案文に記されているとおりです。このことは、先週も橋谷先生が触れてくださいましたので、私は特に触れることはいたしません。

しかしこれらを確認しながら、私たちは今こそ、心を一つにして、共に励まなければ、先のことはどのようになるか心配です。そのためにこの特別委員会では、長期的な事を決めることも大切ですが、まず短期的に実践できることを考えて、機構改革を念頭においていますが、このことについては先週、橋谷先生から充分に伺うことができました。

今、私たちに求められているのは、中部中会のこと、そして各教会のことを深く考えて、今の私たちの事情を確認し、委員会を中心にして、提案し、この提案によって私たちの中会が一つになり、各教会はそれに基づいて、この意味に従って、実践していくことが必要ではないかと思います。

ここで一つのことを触れさせて頂きたいと思います。それは信仰の成熟・成長のことです。義とされた私たちは、キリストにおいて義とされました。それで義とされた私たちは、聖霊によって聖化されます。このことは私たちが繰り返し考えてきたことです。だから私たちに今求められていることは、そのような信仰の成長、聖化のことです。この点に関して、カルヴァンはきちっと語ってくれます。「信仰は行いによって裏付けられなければ何もない」。信仰は聖化がなければ意味がないのです。そのため、私たちは、今後の教会が成長するために、そして信徒一人ひとりが成長するために、何が求められているのか。

それに関して、私の考えを一つ強調したいと思います。それはできる限り、信徒一人ひとりが、神様の御言葉を聴く機会を増やしていくことです。それが一番大切なことだと思います。私たちが今機構改革に関心を持っているのも同じことです。中会のことを少しずつ減らしていくことの目的の一つは、各教会の信徒一人ひとりがもっと神様の御言葉に聴く機会が与えられるように考えています。主日の礼拝と共に平日にも様々な教育と訓練が必要です。このために高神教団の各教会は、毎日の早天祈祷会、水曜の礼拝と祈祷会、金曜日の祈祷会と共に、平日には信徒の教育のために様々な教育と訓練を行っています。これらの集会の中心には、常に説教があります。そのため牧師になると、一週間の間に、幾つもの説教を準備しなければなら

ないのです。ある週は10以上の説教をしなければなりません。そのため牧師は、車の中でも説教を考え、寝る前にもずっと頭に説教を考えています。なぜならば御言葉の説教によって信徒一人ひとりが養われていくからです。そして成長することができるからです。パウロはこのように言います。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」（ローマ10:17）。そのとおりではないでしょうか。

今、中会が危機を乗り越える最も大切な方法は、主日の礼拝と平日の教育と訓練にあります。そして私はもう一つ、強調したいと思います。平日は6日間ありますが、私たちは6日間に、祈祷会以外に集会がない教会が多いのではないでしょうか。家庭集会や様々な集会を教会が作って、信徒一人ひとりができる限り、教会に来て、あるいは家庭を開放して牧師・長老を招いて、ずっと御言葉を聴く。このことによって、中会は強くなり、信徒の信仰が強くなると確信しています。

さて真の信仰は、常に希望と一緒に歩みます。希望のない信仰、信仰のない希望は、あり得ません。信仰とは、過去・現在・未来に繋がっています。希望は未来のことです。そのため、二つの役割は異なります。充分に説明する時間がありません。しかしこの二つは分離することができません。希望と信仰は常に共に歩みます。それゆえヘブライ書の著者は、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」（ヘブライ11:1）。このように信仰が未来に向かって進んでいくことができることは希望があるからです。希望がなければ、信仰は力を失います。なぜならば、信仰に必ず必要なことが忍耐です。この忍耐が、魂に働きかけるためには希望がなければなりません。そのためローマ書では「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」（ローマ5:3,4）と語ります。このように信仰と希望の間に、忍耐があります。この忍耐によって信仰が強められ、希望の助けを受けるのです。

高神教会の信徒が、主日礼拝はもちろんのこと、平日の様々な集いにも素直に参加できるのは、希望があるからです。高神教会の先輩たちは、酷い苦難を受けましたが、決して信仰は弱まりませんでした。かえって苦難を受ければ受ける程、より強い信仰者となりました。なぜならば、彼らには希望があったからです。神様の約束は、信徒の信仰と共に、希望に決定的な力となります。信徒は終末的な希望と共に、自分の生涯においても、希望を持っています。そういうわけで信徒は、礼拝と福音宣教の調和を保つことができます。信徒は神様のお約束どおりに、成し遂げてくださるとの確実な希望があるから、より強い信仰者となります。このように信仰と希望に生きるキリスト者によって教会はますます前進することができます。苦難の中にあっても、先輩たちは希望が与えられていたので、後輩たちが神様に祝福されています。

私たちが本当に、子どもたち、孫たちを愛するとすれば、今、私たちは、神様の栄光のために私たちが心低くして、神様に従わなければなりません。表現することが難しいですが、私たちの子どもたちの祝福は、私たちの信仰によります。十戒にあるとおり、私たちが神様に素直に従うことになると、幾千代にも渡る子孫に祝福を与えると約束してくださいました。このことは、高神教会のいろんな教会を見ることで、すぐに分かります。神様はその希望通りに、成し遂げてくださったことが分かるようになります。

私は中部中会を考える時、心が燃え上がります。私は決して希望を失ったことがありません。特に私が注目していることは、中部中会の各教

会の夕拝のことです。今、私たち日本キリスト改革派教会には、六つの中会があります。その中で、夕拝を献げる人が最も多い中会は、中部中会です。中部中会は、昨年の統計資料によりますと、296名です。西部中会は202名、東部中会は185名です。私たちは今、ウェストミンスター小教理問答を見ますと、私たちの主の日の用い方は、丸一日神様の教会に集まり、私たちは神様に礼拝し、主にある豊かな交わりを分かち合うに教えられています。このように小教理問答が教えていますが、これに従う教会は非常に少ないです。ところが中部中会は、六つの中会の中でも、最も強い中会です。そのため私たちはこのまま、朝拝と共に夕拝に力を入れていけば、私たちの次の世代は、必ず神様に祝福されると思います。だから私たちはもっと、夕拝に力を入れていきたいと思っています。東部と西部に関しても話したいことがあります。しかし今は関係ないことですので、省きます。

一方、信仰と希望は、常に愛と共に歩むべきです。真の信仰と希望は、愛によって促進されます。愛のない信仰、愛のない希望はあり得ません。それ故、ヤコブは、「魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです」（ヤコブ2:26）と、はっきりと語っています。私たちの魂は、信仰と希望の中で、愛によって成長します。真の信仰と希望に徹底的に影響を及ぼすのは、まさに愛です。信仰が深くなればなるほど、その人は愛の人となります。希望が大きい程、その人は愛の人となります。真の信仰と希望は、愛と結びついています。そのためパウロは「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」（コリントー13:13）と語っています。だから私たちの信仰が正しいか、私たちの希望が正しいか、それは自分が愛の人となっているか、隣の兄弟姉妹が苦しんでいる時、自分ももどかしさを感じ、隣の兄弟姉妹を心から助けてあげたい、6日の間の祈りで祈って、次の週に出会ったならば、状況を確認し慰めてあげる。そのような愛がなければ、私たちの信仰は本物ではないかも知れません。

高神教会の成長は、神様の恵み以外には説明できません。私は小さい時から教会に通っていました。その時の教会と今の教会を比べてみると、ずいぶん変わりました。南川教会が、私はまだ伺っていませんが、非常に恵まれた形で新会堂を建てることが許されたことを伺っています。しかし私が小さい頃に伺った南川教会は、小さな教会でした。私が小学生の時、南川教会が開拓されましたが、その時、私は教会に行きました。その時は、小さな教会でした。しかし神様は祝福してくださいました。これは神様の恵みでなければ、説明できません。この神様の恵みの中核は、愛です。愛によって信徒の信仰と希望が促進されます。そして教会はますます前進することができます。高神教会の愛の業を一つひとつ紹介することができないことは残念なことです。しかし、東釜山に訪れたことのある人たちは、少しでも高神教団の愛を感じてこられたかと思います。

12月2日、3日に中会の定期会がありますが、今年は特に宣教師の人選があり、東釜山老会から4名の牧師が来る予定です。そしてこの4名が来る一番大きな目的は、宣教師になる人と面談するためです。私の先輩の先生たちですが、二人で寝る時、牧会の秘密を教えてくださいと聴きます。今まで、いろんな先生方から聞いてきました。そのような所にいつも答えが出るのです。牧会者は、心を込めて信徒一人ひとりを愛することです。どのようなことがあっても、牧会者は、一人ひとりの信徒を、心から愛することです。このことを、私もずっと聴いてきました。先輩の先生方から、私も一杯の愛を頂いています。パウロは言います。「愛がなければ、無に等しい。……愛がなければ、わたしに何の

益もない」(コリント一13:2,3)。

改革派教会に、何よりも必要なことは、愛の業ではないでしょうか。政治規準第7章「教会役員の本質」第40条には、このように記されています。「(恒常的三職)教会の政治の全体は、教理・教会統治・愛の業の三つから成っている……」。私たちの教会規定は愛の業をきちんと語っています。正しい信仰と希望には、愛の業が伴います。いくら私たちが機構改革をして、様々なことを取り組み、集まって勉強会を開き、共に話し合っても、本当の意味で、私たちが愛し合うことができないと、聖書の言葉が無駄になります。それは何の益にもなりません。

中会の停滞と会員減少の原因の一つは、愛の業と関わっているのではないかと、私たちは考える必要があるのではないでしょうか。愛の業が欠けている所には、神様の御業がなかなか行われていないかもしれません。以上のように、イエス・キリストの福音には、大切な三要素、信仰・希望・愛、これがありますが、この三つは共に歩むべきです。このように私たちはまとめることができると思います。

このように信仰・希望・愛によって生きる者には、共通ことが一つあります。謙遜なキリスト者であることです。別の言葉で語りますと、品性が変わります。私たちは建前だけを変えようとする者ではなく、私たちの本音が変わります。私たちの本音が新しくされます。私たちの本音が聖霊に満たされて、私たちの本音によって、私たちの建前が輝くようになります。そのようなことです。

キリスト者の新生、この中心に、謙遜があります。

3. 謙遜なキリスト者の三つの行動:犠牲・献身・仕え

謙遜なキリスト者について考える時、ヤコブの手紙を引用して考えることができます。ヤコブは箴言 (3:34) を引用して、「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる」(ヤコブ4:6) と語り、まったく同じことをペテロも語ります (ペトロ一5:5)。ですから旧約のイスラエルと新約の教会の信徒は、周りの人たちとは違います。それは真の神様が、私たちを御言葉を通して教えてくださるからです。旧約のイスラエルの民は、二つの点で異なりました。彼らは偶像を遠ざけて、そして神様のみに仕えました。それが一点です。そして第二点は、彼らは迷信に従わず、預言者の言葉に良く聴きました。なぜならば、預言者は、神様から御言葉を受けた者ですから、預言者の御言葉を聞きながら、彼らは迷信からも離れました。イスラエルの民の特徴は、この偶像と迷信から離れて、そして神様に仕え、神様のの御言葉に良く聴き、そして自分たちの生活が変わったのです。そのため、旧約の時代も同じように、高慢な者を神様は罰せられます。そして謙遜な者については、恵みをお与えくださいます。これは新約の時代も同じです。

高慢についてはもっと話したいところです。高慢ほど神様に立ち向かう行為はありません。それゆえジョナサン・エドワーズは、「高慢は最初の罪であり、最後の罪となる。高慢はサタンの初子である」と語ります。彼の書物を読むと、高慢がどのような人であるか、何ページにわたって語られていきます。今の私たちは、この教えに耳を傾ける必要があります。高慢より罪なものはありません。特に霊的な高慢は、積極的に神様に栄光を現すことができず、神様の栄光を横取りにします。

こういうことで、高神教会の各老会は、教会の聖性と平和を妨害する言動を防止し、教会の実像を見て、正すために各教会を視察します。ですから小さい子どもたちから、キリスト者としての品性がどのようなものか、学びながら育てられます。

ですから、すでに語りましたが、信仰の聖化と生活の純潔、高神教会は今も引き続いて強調しています。ここに謙遜なキリスト者の三つの行動があるかと思います。これが犠牲・献身・仕えです。謙遜なキリスト者の言動の本質は、犠牲です。私たちはもうすぐ待降節を迎えます。待降節は、人間となられたイエスさまを向かい入れるために、私たちが備える日であります。それは私たちのために人間となった、そして私たちの罪のために十字架に架けられ、それで罪を贖ってくださった、これはまさに犠牲です。神様が人間となられた、これは犠牲です。神様が死んでくださった。これも犠牲です。同じように、私たちも犠牲が必要です。

世界的宣教団体のウェック(WEC)がありますが、その創始者のC.T.スタッドが有名な言葉を残しました。「もし、イエス・キリストが神であられて、私のために死なれたのなら、私が払いすぎる犠牲などはあり得ない。If Jesus Christ be God and died for me, then no sacrifice can be too great for me to make for Him.」と語っています。

またイギリスの有名なクリケットという運動がありますが、家も豊かで、祝福されている人です。それにもかかわらず、すべてのことを後ろに置き、アフリカ宣教のため、運動のためにたびた旅たったのです。彼の運動のためにWECの運動が始まったのです。

犠牲のない教会、犠牲のない牧会、これは本物ではありません。私にも悩みがあります。私にも躓きがあり、私にも苦しみがあります。そうだといって同じように、信徒に仕掛けることはありえないことです。そのような信徒がいたとしても、同じように神様の恵みによって変えられるように、牧師が実践しなければなりません。すべてのことを聴いています。心に痛みがあります。それにも関わらず、その信徒一人ひとりのために祈り、その信徒一人ひとりが神様の御前に正しく生きるために、自分を犠牲にしなければならないと思います。この犠牲は、必ず献身を生み出します。御言葉にも記されています。「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」(ローマ12:1)。私たちは、いけにえとして犠牲となりながら献身する。それによって教会は新しくされます。それによって中会は豊かに祝福を受けます。

イエス・キリストは、苦難された僕です。だからイエスさまこそ、私たちの模範、そして基準線ではないでしょうか。この犠牲と献身、これは必ず世界に繋がります。この仕えるということは、イエス・キリストが仕えられるために来られたのではなく、仕えるために来られたと、はっきりと御自身が語っておられます。だから私たちはキリストに倣って、キリストが仕えられるためではなく、仕えるためにこの世に来られたように、私たちも仕えられるためではなく、仕えるために教会の牧師・長老・執事、そして信徒になったということを、今一度考える必要があるのではないでしょうか。

イエス・キリストが仕えたことによく従った人物が一人いました。パウロでした。パウロは次の様に語りました。「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです」(コリント二4:5)。パウロは主人ではなく、僕でした。

だから今、私たちは、この犠牲と献身、そして仕える、この三つの私たちの行動を考えなら、これから私たちは中部中会を支えるために、そして各教会のために働くために、私たちの行動がどのようにしなければならないかをかんがえなければなりません。

最後に、語ります。いろいろな講演がありますが、私たちには特権が与えられています。そ

れはイエス・キリストがおられることです。イエス・キリストがおられるので、私たちの今の講演、そして私たちの機構改革、将来設計委員会に神様の恵みが与えられ、長期的な目標まで立てることができると思います。しかし計画を立てても、イエス・キリストが中心にならなければ、中会・教会・家庭は、意味がありません。イエス・キリストが中心にならなければ、コーラム・デオは意味がありません。イエス・キリストが中心におられるからこそ、私たちは、信仰・希望・愛に生かされるのです。それにより聖霊なる神様は、イエス・キリストに引き続き、私たちを導いてくださいます。それにより私たちは、本当の意味で謙遜なキリスト者となり、謙遜なキリスト者になる人には、かならず犠牲・献身・仕えるキリスト者に導かれるのです。その中心にイエス・キリストがおられます。これがエフェソ2章19節から22節で語られている神様の御言葉です。

お祈りいたします。

愛する神様、先週に引き続き私たちに、共に中会形成のために考える時間を与えてくださり、心より感謝いたします。どうか神様、中部中会があなたを愛し、様々な困難と難しさがありますが、それにも関わらず、聖霊のお導きによって、このように中会の形成のために、再び集まっております。どうか先週の講演と今日の講演を、神様が豊かに用いてください。このことにより、私たちがキリストにおいて一つになり、そしていつも聖霊の導きにより、私たちを造り変えてください。すべてのことが、あなたの御栄光のために、私たちを用いてください。どうか主よ、これから引退を控えている先輩の教師たちを神様が祝福してください。またこれから献身しようとする若い兄弟を、神様が祝福してください。そして私たちは、牧師同士、長老同士、執事同士、信徒同士、キリストにあって愛し合うことができますように、私たちに力をお与えください。今晩も、このように多くの兄弟姉妹が共に集まりました。私たちが共に祈りあい、励まし合い、赦し合い、そして共に力を出して、あなたの御栄光のために生きることができますように。感謝をして、イエス・キリストの御名をとおしてお祈りいたします。アーメン

別紙1　将来検討設計委員会の任務（2013年11月8日　橋谷講演より）

「中部中会が将来にわたって健全に霊的権能を行使できるよう緊急課題と懸案事項を精査し、包括的視野と現実的判断をもって組織再編や運営刷新に速やかに着手す」ること（2013年4月中部中会定期会）。

・長期的な課題と短期的な課題がある
・短期的な課題
　1. 機構改革　　2. 教師のケア　　3. 日韓協力開拓伝道の位置づけ
　4. 無牧の教会・伝道所への配慮

・委員会の三つの基本線
　1. 改革派教会、長老主義教会としての中会形成――中会の継続的課題
　2. 伝道――
　3. 福音を生きる教会――福音的共同体の姿を描き直す

別紙2　高神教会の教会政治

第12章　　老会

第89条　老会の意義

キリストの体なる教会が散らばって各教会になったので（使徒6:1～6,9:31,21:20)、互いに協議し助けて教理の純全を保存し、戒規を同一に行い、信仰と知識を増進させ、背教と不道徳を防止し、これらのために老会のような上会があるのは必要である。

第93条　老会の職務

老会の職務は次のとおりである。

1. 老会はその区域内の小会、各教会、牧師、講道師、伝道師、牧師候補者、所属機関と団体を総括する。
2. 老会は各小会から提出した建議、請願、問い合わせ、陳情に関する事柄を受け付け処理する。
3. 老会は各小会から提出した訴願、上訴、委託判決を受け付け処理する。
4. 老会は牧師候補者を告示し受け入れ、その教育、転出、戒規と講道師の転出、戒規を管理する。
5. 老会は牧師の資格を告示し、その任職、委任、解任、転入、転出、戒規に関する事柄を処理する。
6. 老会は各教会の長老の選択と任職を承諾し、長老と伝道師の資格試験を行う。
7. 老会は各小会の記録と伝道所の委員会の記録を調査し、その処理事件に合法の判定を示し、真理と戒規に関する問い合わせを解釈し答弁する。
8. 老会は教会の神聖と平和を妨害する言行を防止し、教会の実情を見て正すために各教会を視察する。
9. 老会は各教会を設立、分立、合併、廃止し小会を組織し、各教会と伝道所の牧師招聘と伝道、教会、財政、管理などそのあらゆる処理方針を指導する。
10. 老会は総会に提出する請願、建議、問い合わせ、陳情、訴願、上訴、委託判決に関する事柄を上程し、老会の状況を報告し、総会の代議員を選んで派遣し、総会の指示を実行する。
11. 老会は各教会の伝道事業を指導奨励し、各教会の霊的有益を図る。
12. 老会は各教会と傘下機関の財産問題によって事件が発生すればこれを処理する。

別紙3　信仰生活の三つの領域

ユダヤ人の宗教経験	教　育	礼　拝	実　践
会堂の三つの目的	教育の場所	祈りの場所	集いの場所
キリスト教の信仰生活	祈りの法則	信仰の法則	生き方の法則
アウグステイヌスの「教本」	信仰 (使徒信条)	希望 (主の祈り)	愛 (神の愛と隣人愛)
ベネディクト修道会議 (修道院の規則)	聖書研究	祈りの働き (神様の御業)	共同体に仕えるための労働
宗教改革者の教理問答	使徒信条解説	主の祈りの解説	十戒の解説
タナク	トーラー (イスラエルを形成するトーラー)	ケトウビーム (黙想すべきトーラー)	ネビイーム (服従すべきトーラー)
キリストの三職	預言者 (真理の語り)	祭司 (命の仲裁)	王 (法の宣言と執行)
ヨハネが提示した信徒の証拠	イエス・キリストに関する真理を信じる信仰	内面に宿られる聖霊の証拠を知る率識	神様に服従し、同僚の信徒を愛する心
パウロのテモテへの命令	あなたの教えを見回しなさい	神の国のために励みなさい	あなたの生き方を見回しなさい
パウロのテトスへの命令	正しい教理を教えなさい	永遠の生き方を見通しなさい	正しい教理に適した生き方を教えなさい
使徒言行録2章42節に言及された四つの活動	使徒の教え	パンを裂くことと祈り	相互の交わり
神学の三つの徳目	信仰	希望	愛
キリスト者の三つのアイデンティティ	真理	命	道

(ジェームズ・パッカー提供)

本誌の基本方針

教会（日曜）学校像について

相馬伸郎（本誌編集長）

1．子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ56:7、マタイ21:13）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするのですから、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

私どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招きいれ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2．分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです」。準備したもの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3．子ども礼拝式における説教の重要性
―日曜学校の目標―

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしょう。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわきまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4．説教の完成としての牧会―分級の目標―

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、より的確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずです。

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5．教会形成の一環としての日曜学校
―教師会と教師―

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているのであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6．伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渇いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさえすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria!（ただ神の栄光の為に！）

（中部中会日曜学校委員会委員、
名古屋岩の上伝道所宣教教師）

『教会学校教案誌』発行のための

自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年４月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年４月に始まり、すでに13年目に入り、第53号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円／年
送 金 先	郵便振替　伊藤治郎 00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

副読本のご案内

『主は羊飼い―中高生のための教理入門―』

価　格　800円
著　者　木下裕也
（名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師）

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的――神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問１を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました―わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことなってくるのではないでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問１を見ましょう。

問　人のおもな目的は何であるか。
答　人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーヴ教会信仰問答の問１はこうです。

問　人生の目的は何ですか。
答　神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりでです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

4　　人生の目的　5

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

4月6日　ゲツセマネのキリスト　教理説教のための聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 26章36〜46節
参照教理問答　子どもカテキズム 問24，26，34，81

ゲツセマネで祈りをささげる主イエスの姿は弟子たちの祈りの模範である。その模範の意味をよく確かめたい。ここには主イエスが十字架でお受けになる苦しみの意味が予め示されている。

悲しみを背負うキリスト

ペトロとゼベダイの子らを伴われるのは、彼らがキリストの証言者として使徒たちを代表するからであろう。他の弟子たちを残して、彼ら3人だけの前でイエスは「悲しみもだえる」姿を見せる。17:1以下では、彼らは山の上でイエスの光り輝く姿を目撃した。それとは対照的な姿であるが、これも弟子たちが記憶に留めておかなくてはならない神のメシアの姿に相違ない。主イエスが受けねばならない「杯」とは、神の怒りをあらわし（イザヤ51:17、エレミヤ49:12、等）、その悲しみは、十字架によって神の裁きを受けねばならない人の定めからくる。

祈りの模範

イエスの祈りは、自分の救いを訴えることから始まるが、「わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(39節)、「あなたの御心が行なわれますように」(42節）と、神への委任に至る。この後者の祈りは主の祈りと共通する。神への信頼と献身が、救いの力を世に顕わす。祈りの目標は、神の思いに自分の心を合わせることにある。この後、弟子たちはこのような祈りによって神の心を恵みとしていただいて、宣教の業に命を賭けることができたとパウロは随所で語っている（コリントー15:10、他)。

イエスに伴った弟子たちは、イエスと共にいて、目を覚まして祈っているよう命じられている（38節、41節)。「目を覚ましている」ことは、聖書では特別な含みがあることに注意したい。旧約では、それは見張りの務めであり、神の救いが現れるのを注意深く待ち望むイスラエルの信仰の姿勢をあらわし(イザヤ書62:6、他)、新約でも世の終わりを待ち望む教会の姿勢をあらわす(マタイ24:42以下、テサロニケ5:6節以下、他)。キリスト者の祈りは、イエスの傍らに目を覚まして留まり、罪ゆえの人の悲しみを身に負いながらも、神の憐れみによる救いに全く信頼して、望みを託す祈りである。

弟子たちは眠っていても

イエスは弟子を選んで伴われたが、祈るときには一人離れて祈られた。なぜなら、定められた「杯を飲む」務めは、主イエスが一人で負うものだからである。弟子たちは弱い。彼らは悲しみもだえながら祈るイエスの傍らで、目を覚ましていることさえできなかった。31節以下の段落では、イエスは弟子たちの躓きを予告された。「心は燃えても、肉体は弱い」(41節)。弟子たちがイエスの苦難を分け合って、全人類の罪を取り除く救いの働きに力を貸すことはできない。「眠っている。休んでいる」弟子たちの傍らで、イエスは彼らのために、一人で悲しみを背負い、神の使命を果たされる。教会はいつでもキリストの、この執り成しの祈りに支えられている。

目を覚まして祈る

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい」との主の言葉が教会を生きた信仰へと招く。主はわれわれの肉の弱さを知っている。その弱さのゆえに、主は十字架で死なれ、私たちの上に注がれる怒りの裁きを取り去られた。求められるのは信仰の「眠り」に落ち込んでしまわないこと。キリストの傍らにあって、目覚めた信仰者として、共に励まし合うことが、私たちにできる務めである。

（牧野信成）

4月6日　ゲツセマネのキリスト　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書 26章36〜46節
参照子どもカテキズム　問24，26，34，81

〔単元のねらい〕

主イエスのゲツセマネの祈りは、悲しみの中で神に向かい、神の支配に心を明け渡して、神の愛へと献身する、祈りの本質を示しています。祈ることのできない私たちの弱さを素直に認めて、しかし同時に、キリストの祈りの中に包まれている私たちの恵みを心に留めて、神の御旨に心を合わせてゆく主イエスの祈りへと励まされたいと思います。

ゲツセマネの祈り

イエスさまは逮捕されて十字架で死なれる前に、弟子たちを連れてオリーブ山に出かけました。そこに「ゲツセマネ」と呼ばれる場所があって、そこで神さまにお祈りをささげるためでした。

お祈りする場所についていったのは、３人の弟子たちだけでした。ペトロとヨハネとヤコブです。この3人の弟子たちは、いつもイエスさまの力強い姿を見ていました。たくさんの奇跡を行って、病気の人をなおしたり、湖の上を歩いて渡ったり、ある時は、山の上で真っ白な光り輝く姿をあらわされました。けれども、ゲッセマネの園でお祈りするイエスさまのお姿は、弟子たちが今まで見てきたイエスさまとは違っていました。イエスさまはとても深く悲しんで、体も震えているようでした。それは、これから逮捕されて、裁判にかけられて、鞭打たれて、十字架にかけられてしまうことをご存知だったからです。

イエスさまは罪のないお方でした。それなのに、十字架で死ななくてはならないのは、それが父なる神さまのお考えだったからです。私たちは皆、心から神さまに従うことができない罪人です。ですから、最後には誰もが罰を受けて死ななくてはなりません。けれども、神さまは罪人を救うために、特別な方法を考えておられました。それは、イエスさまをこの世に送って、私たちの代わりに罰を受けさせることでした。イエスさまが十字架にかかって死なれるのは、ですから、私たちの罪が許されるためでした。

その神さまのご計画をイエスさまはご存知でした。しかし、罪もないのに死ななくてはならないことは本当に悲しいことです。死んでしまえば、愛するみんなと別れなければなりません。また、逮捕されれば町中の人々から笑われて、馬鹿にされて、見せ物にされてしまいます。そして、十字架で死ぬということは、神さまに呪われることを意味していました。天の神さまの怒りを受けて、死ななくてはなりませんでした。でも、そんな悲しいこと辛いことをイエスさまは引き受けて、父なる神さまの御旨を果たそうとされました。そのときに、イエスさまは、お祈りをささげたのです。

イエスさまは、その悲しみを素直に神さまに打ち明けました。悲しいときには、そばに誰かがいてほしいはずです。だからイエスさまは3人の弟子たちを一緒に連れて来られました。ところが、イエスさまが悲しみながらお祈りしている間に、弟子たちはみんな眠ってしまいました。疲れていて眠かったようです。弟子たちはイエスさまのそばにいて守らなきゃ、と思っていたかもしれません。でも、眠さには勝てませんでした。イエスさまは、だから一人でお祈りしました。そして、お一人で、神さまの御心を行うために、十字架に向かう決心をしました。

イエスさまは、お祈りの中で神さまの心と一つになりました。イエスさまにとって、自分の命よりも、近くで眠ってしまっている弟子たちの命の方が大切でした。そして、力の弱い、情けない弟

子たちですけれども、そういう罪人を救うことが神さまの御心でした。間もなく、イエスさまを逮捕しに、大勢の人々がゲツセマネにやってきました。イエスさまは「立て、行こう」と眠っていた弟子たちに声をかけて、力強くその人々に向かって出発されました。

今日は、ゲツセマネで、悲しみの中で、一人でお祈りされた、イエスさまのことを心に留めておきたいと思います。それは、私たちの命を救うために、イエスさまが神さまと心を一つにするためのお祈りでした。そうしてイエスさまは、喜んで私たちのために十字架にかかってくださいました。イエスさまは、私たちのためにいつも祈っていてくださいます。復活されたイエスさまは、今も生きて、私たちのことを覚えてくださっています。私たちには力が無くて、十分なお祈りができなくても、イエスさまが私たちのために祈ってくださっているので、神さまは私たちを守っていてくださいます。

イエスさまはお弟子さんたちに、「目を覚まして、祈っていなさい」と言われました。イエスさまのお祈りがそうであったように、お祈りしていないと神さまと心が通じなくなってしまいます。お祈りしていると、神さまの心が私たちの心に伝わってきます。お祈りする中で、イエスさまのように生きよう、という力が心に湧いてきます。私たちも、弟子たちのように眠ってしまう、情けないところがあるかもしれません。それでも構いません。そこから少しずつお祈りすることが大切です。お祈りは神さまにお願いするばかりではありません。お祈りしながら、神さまの「御心」がわかります。完全にわからなくても、父なる神さまを信じることができるようになります。私たちのために、何が一番よいことかを知っているのは神さまです。それを必ずしてくれる、と信じることができるようになることが、お祈りする理由です。

上手なお祈りをしようと頑張るよりも、心の中で神さまのことを本気で思うことの方が大切です。どうお祈りしてよいかわからないときは、みんなが覚えている「主の祈り」がお手本になります。「御心のままに」と心から信じて祈るなら、神さまは、御心のままに、私たちをイエスさまのそばに置いてくださいます。そして、私たちに必要なすべてのものを備えてくださいます。

（牧野信成）

〔今週の暗唱聖句〕　ヘブライ人への手紙 7章25節

この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、
御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります。

4月6日　ゲツセマネのキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまは、私たちを救うために、「わたしの願いどおりではなく、御心のままに」とお祈りしてくださったことを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

幼稚科の中にも、自分でお祈りをすることができる子どもたちもいることでしょう。その多くは親や教会学校の先生たちからお祈りの仕方を教えてもらったのではないでしょうか。お父さん、お母さん、先生たちの真似をしながら、神さまを呼ぶ言葉を覚えていくのです。もちろん、子どもたちが、祈りの言葉の意味について一つ一つ知っているかどうかはわかりません。言われるがままに、言葉を口にしているかもしれません。子どもたちに、何も分からないままに祈らせることはよくないことだという批判があるかもしれませんが、イエスさまの弟子たちをはじめ、私たち教師やキリスト者も案外そういうところがあることに気付かされます。「主の祈り」をはじめ、よくわからないまま、イエスさまから教えていただいた言葉を、自分の祈りとして祈り続けてきたのです。内心は、「本当はこんなことお祈りしたくないんだけどな」と思いながら、イエスさまから教えていただいた祈りを祈り続けたのです。

しかし、自分の願いや考えに立ち向かってくる祈りの言葉を、苦しみながらも口にし続ける中で、ふとしたときに、「ああ、これはこういうことだったのか」と教えられる瞬間を信仰者は経験します。神さまの御心と私の心が一つになる素晴らしい経験をします。それは祈りをとおして神の言葉が聞こえてきた経験と言ってもよいのかもしれません。神さまの御心が行われるということは、自分が神さまに願うことにも増して素晴らしいことです。

幼い子どもたちも、大人が知らないところで、「神さま……」と密かにお祈りをしているかもしれません。どういうお祈りをしているのか、たいへん興味深いですが、無理にその内容について探る必要もないでしょう。子どもなりに自分の言葉でお祈りをしている中で、ゲツセマネでイエスさまがお祈りくださったように、「御心のままに」「神さまが願っていることを教えてください」という言葉を付け加えて祈ることを新たに覚えてくれたらと願います。そのようにして、祈りの中で、自然に、自分を神さまに委ねることができる姿勢へと変えられていくことでしょう。

神さまの御心が実現するというのは、私たちの思いとは違う部分がありますから、ゲツセマネでイエスさまがたいへん苦しまれたように、私たちもまた「御心のままに」と祈るとき、そこに苦しみや悲しみが伴います。しかし、そこで傍らに立って、共に執り成してくださる力強いイエスさまのお姿を見出すことができます。苦しみながら、「御心のままに」と祈る私の祈りを、イエスさまも一緒になって祈ってくださるのです。既にそこに神と心が一つになっているという出来事が生じています。その先に待っている神さまからのお答えは、十字架の救いに現わされたように、私たちの思いを超えて素晴らしものなのです。

〈祈り〉

神さまの心がよく分かるように助けてください。そのために、いつもイエスさまが、私たちのためにお祈りしてくださることを感謝します。

4月6日　ゲツセマネのキリスト　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、ご自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります」。

・「この方」とは誰でしょう。私たちを救ってくれる方です。イエス様ですね。
・「常に生きていて」 とはどういうことでしょうか。みんなは今、生きていますか。イエス様が生きているとはどういうことでしょうか。今もそしてこれからもイエス様は生きておられます。
・「執り成しておらえる」とはどういうことでしょうか。執り成すとは、例えばある人とある人の関係が悪くなった時に、その間に入って関係を元通りにすることです。イエス様は神様と私たちの間に立ってくださっています。
・「ご自分を通して」はイエス様によって。
・「神に近づく人たち」とは誰でしょう。神に近づくとは、神様にお祈りしたり、願ったり、悔い改めたりすることです。そういうことをする人たちのことです。
・「完全に救うことがおできになります。」
　完全に助けてくださいます。完全だから、心配しなくても大丈夫。イエス様によって、必ず救われることを信じることを、神様はみんなに求めています。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・今日のお話で、イエス様は私たちに何をしてくださいましたか。
→私たちが完全に救われるため、そのためにイエス様が十字架の苦しい苦しい業を果たせるように、祈っていました。
　暗唱聖句では、「人々のために執り成しておられる」というところですね。
　お弟子さんたちが寝てしまい、何もできなくても、一人だけでも祈り続けてくださいました。眠らず、辞めず、逃げ出しませんでした。

2-2. お弟子さんのことを考えよう。

・お弟子さんたちは、何ができて、何ができませんでしたか。
→お祈りする場所についていって、祈り始めることはできました。でも、祈り続けることはできなかったのです。そんなお弟子さんなのに、イエス様から嫌われることも、捨てられることもされませんでした。できない弱さを、イエス様はかわいそうに思って愛して下さったのです。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・私たちも祈り続けられないことがあるでしょう。でも、イエス様は祈れなくなる私たちのことを捨てることはなく、かわいそうに思って、愛してくださって、神様に祈ってくださっています。イエス様の愛に感謝して、私たちも祈り続けていきましょう。

3. ゲーム

しんぶんじゃんけん

新聞を広げて、上にのる。司会者とじゃんけんをして、負けたら半分にたたみ、やがて新聞の上にたてなくなってころんだら負け。

※1～3を自由に取捨選択して下さい。

4月13日　十字架のキリスト　教理説教のための聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 27章45〜56節
子どもカテキズム　問24
参照教理問答　ウェストミンスター大教理問答　問49
ハイデルベルク信仰問答　問37〜43

問24　主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答　主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられました。ですから、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

マタイによる福音書は、十字架上のイエスさまの御言葉として「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」だけを記しています。これは、詩編第22編冒頭の御言葉の引用です。詩人は、神への心からの信頼をもとに、しかしそれだけに、現実の困窮を前に、真剣に神の憐れみを訴えています。そして、最終的に詩人の心の底に神への感謝は湧きあがり、魂は満たされ、神への賛美で閉じられます。つまり、詩編第22編は神への嘆きの詩であると同時に賛美の詩でもあるわけです。その意味で、主イエスが十字架の上で、このように叫ばれたのは、詩編第22編における詩の成就であり、この究極の苦しみと不条理にもかかわらず主イエスの神信頼の歌、勝利の歌として理解できます。万が一にも、十字架の上で主イエスが一瞬でも不信仰に陥り、神を疑ったり、呪ったりすれば私たちの贖い、救いは崩れ去ってしまいます。

さてしかし、この叫びをただそれだけとして終えてしまうことはできません。むしろ、詩編第22編の冒頭の叫びをもって主イエスが叫ばれたとき、その身に何が起こっていたのか、それをまっすぐに見つめるべきです。それは、神の呪い、神の刑罰である神に見捨てられたということです。想像を絶する恐怖であり苦しみです。想像を絶するというのは、イエスさまご自身にとってのことです。罪人である人間は、神との交わりを失っているにもかかわらず、イエスさまのように真剣に悩むことがありません。さらに言えば、ここで受ける苦しみと死は、全人類が未だ味わったことのない永遠の滅びとしての死なのです。勇猛果敢に死んでいった人は、枚挙にいとまがないでしょう。むしろ、主イエスのような悲惨な「死に様」は、悟った人から見れば、二流、三流の人物との烙印をおされるかもしれません。しかし、それはまったくの見当違いです。

御子なる神でいらっしゃる主イエスと父なる神には、永遠の愛の交わりのみがありました。父なる神との交わりは一瞬でも損なわれることがありませんでした。確かに、人となられた主イエスのご生涯は、最初から苦難の道のりでしたし、遂には十字架へと赴かれたのですから、全生涯が苦難と言っても過言ではありません。しかし、それらは人間から受けたものでした。ところが今、神ご自身から苦しめられるのです。

そしてここにこそ、私どもの救いの根拠があります。私たちと同じ人となられた御子が、私たちが受けるべき神からの苦しみ、呪い、怒りのすべてを味わいつくされ、私どもに代わって捨てられたからです。そのおかげで、私たちは、赦された者、神の子、神に捨てられることの絶対にない揺るぎない者とさせていただいたのです。

〈子どもカテキズムの解説〉

ウェストミンスターのカテキズムは、主イエスの神性と人性そして低い状態と高い状態とを明確に示してその御業を描いています。その意味で、

教理としてキリストの御業を明瞭に示すことに成功しています。しかし一方で、主イエスが成し遂げられる救済の順序と意味を描くことにおいては、いかがでしょうか。子どもカテキズム問24は、小教理問答にも大教理問答にもありません。参照個所としては、キリストの死という低い状態を描き出す問49を挙げておきました。一方で、使徒信条に基づいて論述するハイデルベルク信仰問答は、上述のように十字架の意味を丁寧に描き出します（子どもカテキズム問24は、ウェストミンスター大・小教理問答を補うことを目指して著されているわけです)。主イエスの十字架の死は、「私たち罪人の身代わり」の死であること、それゆえに、このイエスさまを信じる者は、「罪赦され」るのです。これが、福音でありその頂点です。

私たちの主キリストは、全人類の罪に対する神の怒り、刑罰をご自身の全存在をもって負ってくださいました。肉体はもとより精神においても社会性（弟子たちからの裏切り、群衆や敵対者からの憎しみ）においても、なによりも魂の上にこそ神の裁きをお受けになられ、極みまで苦しみ抜いてくださいました。このお方の苦難のご生涯、とりわけ十字架の上での恐るべき苦しみは、すべて私たちを神の怒りと刑罰から解き放ち、私たちのために神の恵みと義と永遠の命を獲得してくださるためでした（ハイデルベルク問37参照)。

何故、十字架刑だったのでしょうか。申命記21章23節には、「木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである」とあります。パウロは、ガラテヤの信徒への手紙3章3節以下でそれを、このように主イエスにあてはめて解説しています。「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかけられた者は皆呪われている』と書いてあるからです」。つまり、私たちの救いのためには、他の処刑方法によるのではなく、十字架刑でなければならなかったわけです。

主は、私ども人類のため、また罪人のためにそのご栄光をお捨てになられ、私たちと同じ立場に降りてくださいました。それは、私たちの惨めさをその身に負われるためでした。罪は犯されませんでしたが、実に、どの人間よりも、苦しみや悲しみを全存在で味わってくださいました。こうして、イエスさまの理解できないいかなる苦しみも悲しみも地上にあり得ないことが明らかにされます。主イエスは、どれほど悲惨や不幸な目に遭って苦しみ、悲しむ人とも友となってくださいます。主イエスの低さ、その苦難の故に、誰でも苦しんでいる人は、主イエスの友となれるのです。

イエス・キリストの十字架における苦しみと死、それらは、すべて私たちのためのものです。私たちの死をキリスト・イエスが死なれました。私たちの苦しみを主イエスが苦しまれました。こうして、信じる私たちは、キリストと共に十字架に死に、墓に葬られてしまいます。そのことを、信じるとき、聖霊は罪の赦しの確信と喜びとを私たちに与えてくださいます。その喜びは、その人の全存在を主に捧げ、生きている時も死ぬ時も、自分が主イエス・キリストのものとされていることを無上の、唯一の慰めとすることができます。

〈子どもたちに対して〉

十字架の意味がわかる。それが、救いです。もちろん、その教理を説明されれば、誰でもわかるはずです。しかし、聖霊によらなければ本当の意味では、誰にもわかりません。だからこそ、信仰は神の賜物であり、神秘であり、尊いのです。契約の子どもたちは、確かに十字架の出来事は何度も聞いて知っていますが、案外、その深い意味を集中的に学ぶことは少ないように思います。今朝、礼拝説教も分級も、礼拝式のすべてのプログラムが十字架を指し示し、集中する日、「十字架デー」にしたいと思います。

十字架は、神の愛の極みです。十字架から、罪人を憐れむ神の至誠の愛があふれ出ています。神の犠牲を伴ったまことの愛の温かさのなかで、頑なで、冷たい石のような心も溶かされ、主イエスの思いが、子どもたちにも通じるはずです。

蛇足と思いますが、十字架の肉体的悲惨を克明に描こうとする努力は、むしろ聖霊のお働きによる信仰の告白を阻害すると思います。つまり、イエスさまへの同情だとか、人間的な感情をあおるような表現は、聖書がしているように、ストイック過ぎるくらいがちょうどよいかもしれません。

（相馬伸郎）

4月13日　十字架のキリスト　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書 27章45〜56節
子どもカテキズム　問24

〔単元のねらい〕

改革派信仰は全包括的な信仰と言われます。創造者にして主権者でいらっしゃる神とかかわりのない世界や人間の営みはないからです。すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているからです。したがって、私どもは生活のすべての領域で神の栄光をあらわすことへと方向づけられています。私どもはそれを「志」に変えて歩むのです。しかし、そのような信仰が、単なる思想やイデオロギーではなく、真心からのもの人格的なものになるためには急所があります。それが、十字架です。イエスさまがわたしのために死んでくださったこと。父なる神が私のために御子を犠牲にしてくださったこと、その事実を魂において理解するとき、信仰は生き生きとしたもの、温かなものとなります。うっかりすると、契約の子どもたちは、イエスさまの救いについて何度も聴いているからわかっていると思いやすいですが、案外、子どもたちは集中的に学ぶ機会が少ないかもしれません。説教は決定的に大切ですが、その後のマンツーマンでの牧会的対話によって十字架の恵みが深く届けられます。

わたしに代わって神に捨てられたイエスさま

今日から受難週が始まります。しかし、イエスさまのご生涯は、その最初から苦しみに満ちたものでした。そもそも神の御子が人となられるということは、天の栄光をお捨てになられ低い地上に降りてくださったということです。馬小屋で生まれたかと思えばすぐにいのちを狙われます。お父さんとお母さんは必死にエジプトまで逃げていきます。やがて、神の国を伝える公のお働きを始めて、皆から大歓迎されたかと思えばすぐに、指導者たちからいのちを狙われます。ついには、十字架につけられてしまわれたのです。まさに、苦難のご生涯でした。聖書は言います。その苦しみの全ては私たちをお救いくださるためなのです。

さて、十字架の上に架けられるまでの苦しみは、確かに大変なものでした。けれども、人間として生まれながら苦しいこと、悲しいことを重ねてきた人は、おそらくイエスさまだけではありません。皆は、ソクラテスとかシャカという人を知っていますか。イエスさまを含めて、三大聖人などと言われることがあります。このソクラテスさんもおシャカさんも、自分の死に際して、何一つ動揺することがなかったと言われています。だから、「すごい」「聖人」とほめられるわけです。しかし、イエスさまは十字架の上で、どのような叫び声を挙げられたのでしたか？

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになられたのですか」と絶叫されました。これを聞いて、「なんだか、もっと堂々と、立派に、かっこうよく死ぬことはできなかったのかな」、そんな風に考える人もいるかもしれません。

このイエスさまの叫びは、イエスさまご自身が全く予想もしていなかったことが起こってしまって、こんなはずではなかったと天のお父さまを恨んだり、文句を仰ったというわけでは、全くありません。実は、この叫びの言葉は、旧約の詩編第22編の最初の言葉です。つまり、イエスさまは、詩編第22編を引用されたということです。そして、この詩の内容は、神さまを心から信頼し、賛美し、感謝する詩なのです。つまり、イエスさまは十字架の上で、天のお父さまを信頼し続け、賛美し続けておられるということです。もし、イエスさまが一瞬でも天のお父さまを疑ったり、文句を仰ったなら、僕たち私たちは、決して救われる

ことができなかったはずです。イエスさまが罪を犯したら、私たちの救いは崩れてしまうからです。

さてしかし、同時にこの叫びは、イエスさまの本心からのものでもあることを、今朝、しっかりと学びたいと思います。イエスさまは、十字架につけられる前から苦しみを受け続けてこられました。しかし、それは、要するに人間から受けたものです。僕たち私たちも経験したこともあるはずです。病気になったり、叱られたり、いじめられたり、悲しくて涙を流したことがあるでしょう。けれども、誰一人として十字架の上でイエスさまが経験された恐ろしい出来事を経験した人はいません。それは、どんなものだったのでしょうか。死ぬこと？ 違いますね。十字架の刑罰は、どうやったら人間を一番苦しんで殺せるのかを考えたものだと言われています。でも、十字架に架けられて殺された人は、イエスさまだけではありません。あの時、イエスさまの右と左には二人の犯罪者がいて、彼らも十字架で殺されたのです。

それならなぜ、イエスさまは、あのような叫びを挙げられたのでしょうか。それは、イエスさまの十字架の死とは、まだ、人間が誰一人も経験したことのない死だったからです。人は一度生まれたら、誰でも一度死ぬわけですね。けれども、聖書はこのように教えています。人は一度死ぬだけではなくて、死んだ後に神さまの裁きを受けることが定められているのです。これを、第二の死と言ったりします。魂の滅びとか永遠の滅びとも言います。つまり、神さまが、私たちが生きているときに犯した罪に対するお怒り、刑罰を神さまの正義と聖さにもとづいて罰せられるのです。罪を犯した人は誰もが、神さまからの呪い、怒りとしての裁きを受けるのです。これこそが、死の中の死です。それは、要するに神さまに見捨てられてしまうということ。神さまの愛を受けることができないということです。自分勝手な生き方をしてついに神さまの愛を信じないままの人は、神さまでも救うことができません。それが、死んだ後に受ける神さまの裁きとしての死なのです。

イエスさまは、神さまの御子です。これまでただの一度も、イエスさまと天のお父さまがけんかしたり、関係がぎくしゃくしたことはありませんでした。ところが今、イエスさまは、僕たち私たちの罪をその肩に全部背負ってくださって、僕たち私たちにくだされるべき天のお父さまからの怒りと呪いを受けてくださったのです。つまり、本当に神さまに捨てられたのです。だから、「私のお父さま、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたのです。

いったいイエスさまは、何故、天のお父さまに見捨てられてしまわれたのでしょうか。それは、このイエスさまを信じる僕たち私たちが、決して神さまに見捨てられることはないことを示すためです。確かに僕たち私たちは体は一度死にます。しかし、イエスさまのおかげで、もう、永遠の滅び、魂の滅びを経験することはないのです。こうして、死ぬことも恐ろしいことではなくなってしまったのです。イエスさまが恐ろしい目にあってくださったからです。イエスさまが十字架で神さまからの怒りを身代わりに受けてくださったので、もう、僕たち私たちには、神さまの怒りものろいも、過ぎ去っています。もう絶対に、神さまの怒りを受けることは、あり得ないのです。

教会の屋根の上には、十字架が高く掲げられています。それは、こんな素晴らしい救いを実現されたイエスさまの恵み、父なる神さまの愛の深さ、それを、世界中の人に喜んで、感謝を込めて伝えたいからです。この十字架だけが、世界を救うこと、そして教会が救われたことを、誇らしい思いで、掲げているのです。　　（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 27章46節

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

4月13日　十字架のキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまは、私たちの罪を赦すために、身代わりとなって十字架にかかって死んでくださったことを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

子どもたちは、イエスさまの十字架についてどのように理解しているのでしょうか。今回の聖書を物語りながら、率直に尋ねてみるのもよいかもしれません。中には、はじめて十字架のことを聞く子どもたちもいるかもしれません。神の子であられるイエスさまが十字架で死んでしまったことに深い悲しみを覚える子もいるでしょう。あるいはイエスさまを十字架につけた人たちに対する怒りを覚える子どもたちもいるかもしれません。もう何十年も前になりますが、私が幼稚園だった頃、十字架のイエスさまはとても格好いいヒーローのように思っていたところがありました。子どもがヒーローごっこをして遊ぶように、イエスさまも人間の悪をすべてご自分の身に引き受けて死んでくださった。それはまさにヒーローとしての格好よさであり、そこに救いがあり、自分もそのようなヒーローになりたいとさえ思っていました。今から考えると、全然イエスさまの十字架の意味について浅はかな理解しかしていなかったことに気付かされます。しかしながら、イエスさまの十字架の光が私たちに届くとき、私たちの心には何かしらの動きが生じるのではないかと思います。その心の動きが正しいか正しくないかはわかりません。でもそういう心の動きを、まず大事にしながら、イエスさまの十字架の叫びにもう一度耳を傾けることができると思います。

イエスさまの十字架がまさにこの私のためのものであったと、告白することができるまでには、個人によって差があると思います。私は幼い頃から教会に通っていましたが、本当に分かったと言えたのは、大学生になってからです。だからと言って、幼い子どもたちに十字架の意味が分からないと決めつけることはよくないことです。

自分の幼少期を振り返ってみて、幼いなりに様々な出来事を経験しました。その度に、イエスさまの十字架の出来事を思い起こし、十字架の言葉にちゃんと聞くことができたならば、どれだけ幸いだったかと思います。「イエスさまがあなたの罪を背負って十字架の上で死んでくださった。あなたが叫ぶべき叫びを、イエスさまは十字架の上であなたの代わりに叫んでくださった。だからあなたは見捨てられることはないのだよ。神さまを恐がったり、自分を責める必要はないのだよ。イエスさまのゆえに、神さまに愛されている子どもとして生きられるのだよ……」。子どもたちも例外なくキリストの十字架の言葉を必要としています。その言葉を自分以外のところから、つまり神さまから聞きたいのです。

〈祈り〉

イエスさまは私たちを罪から救うために、十字架についてくださいました。ありがとうございます。イエスさまによって、愛され、赦されている自分を喜ぶことができますように。

4月13日　十字架のキリスト　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である」。

・この祈りは、誰が、どこで、だれに祈っている祈りでしょうか。わが神とは誰でしょうか。

→イエス様が十字架の上で、父なる神様に祈っている。わが神とは父なる神様。

・イエス様を父なる神様がお見捨てになる、とはどういうことでしょうか。例えば、神様に見捨てられた人はどうなるのでしょうか。神の裁きを受け、滅びに至ります。それは神ののろいとも言われます。

・「大声で叫ばれた」とありますが、イエス様はどうして叫ぶのでしょう。聖書で、叫ぶ、と書かれている多くの場合、その叫ぶ人は誰かに、何かを求めています。イエス様は父なる神様に何を求めているのでしょうか。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・今日のお話で、イエス様は私たちに何をして下さいましたか。イエス様は、神の力を持っておられる偉大な方です。今まで、嵐を静め、死人もよみがえられ、パンと魚を何千人分にも増やせました。イエス様は十字架から身を守る力がなかったのでしょうか。

→イエス様の力は十分にあるのに、私たちのために十字架につくことをご自分で選んだのです。それは最後まで変えませんでした。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・お弟子さんたちは何をしていましたか。

→近くで心配そうに見ているだけだったり、恐くてどこかへ逃げて出してしまったりして、イエス様のための協力は何もできませんでした。

・イエス様がなぜ十字架につくのか、お弟子さんたちはわかっていましたか。

→私たちの罪の赦しのためとはわかりませんでした。だから、イエス様のためにちゃんと祈ることもできませんでした。「十字架の業を完全に果たせるように」、とも祈れませんでした。何かをしたくても、恐くて何も手伝えませんでした。

2-3. わたしたちのことを考えよう。

・イエス様を救い主だと信じる私たちは、神様に見捨てられることはあるでしょうか。

→見捨てなければ、その証しはどこに表れているのでしょうか。それは、イエス様が私たちの代わりに見捨てられたという仕方に表れています。

・神様は、私たちを守り、イエス様も守るという仕方をしないで、大切なイエス様がひどい目にあうのは、かわいそうにかもしれません。でも、考えてみよう。とても悪いことや、ひどい犯罪をした人を、だれも怒らず、警察も捕まえないとしたら、どうなるでしょう。罰を与えなければ、悪いことをする人はどんどん増えてしまいます。神様は悪いことを放っておく神様でしょうか。そんなことはありません。神様は悪いことや罪を犯す人を懲らしめるお方です。

→神様の懲らしめがイエス様が表れています。イエス様が罪や悪の責任を全部引き受けてくれました。私たちが犯した罪をイエス様が全部引き受けてくれました。私たちの罪の重さが、神に見捨てられるという十字架の恐ろしさに表れているのです。

　そして、イエス様が罪の責任をとって神様に見捨てられることによって、私たちが神様に見捨てられないことを示してくれたのです。

・このイエス様を私たちは大切にしますか。愛しますか。そしたら、イエス様の思いを大切にしますか。何をしたらいいですか。

3. ゲーム

前週参照。

4月20日　復活されたキリスト　教理説教のための聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 28章1〜10節
子どもカテキズム　問24, 36
参照教理問答　ウェストミンスター大教理問答　問52
ハイデルベルク信仰問答　問45

問24　主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答　主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に、永遠のいのちによみがえられました。ですから、私たちは、罪赦されて神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

日曜日の朝、マグダラのマリアたちだけが、安息日が終わった明け方、待ちきれない思いで墓に駆けつけます。主イエスの復活を信じていたからです。その信仰は、まさしく私どもの模範そのものです。そして主イエスご自身も、どれほど彼女たちの存在を喜ばれたことでしょうか。

そのとき、神は墓石をわきへ転がし、墓を開きます。主からの天使は、主の復活を告げ、空っぽになっている墓の中をしっかりと確認させます。さらに、弟子たちのところに行って、この事実とガリラヤで主に会えることを告げるようにと告げます。彼女たちは、大喜びで駆けだします。しかも、復活されたイエスさまは、彼女たちの行く手に待っておられました。主の受難と死を信じて仕え続けた彼女たちを特別に祝福し、彼女たちを最初の証人として用いられるのです。

主イエスは、彼女たちに声を掛けられます。言わば、復活後の主イエスの第一声です。たった一言でした。文語訳では、「めでたし」、口語訳では「平安あれ」です。新改訳と新共同訳では、「おはよう」と訳されます。もとのギリシャ語では、「カイレテ」です。これは、「喜び」を語源にする言葉です。したがって、「リジョイス」という英訳もあります。いずれにしろ、決定的な一言が宣言されたのです。主イエスは、この一言を彼女たちに、そしてすべての人間に、信じる者たちに宣言するためにご復活のお姿をあらわされたと言ってもよいかもしれません。それが、「喜びなさい！主の平和は今あなたの上にある！」という意味が込められた挨拶です。救いと赦しと勝利の宣言です。しかもこの勝利宣言は、主の勝利の喜びよりむしろ、私たちの勝利をこそ喜んでおられるものです。「私の勝利は、すなわちあなたの勝利なのだよ。私と共に喜びなさい。私の獲得した救いの恵み、罪の赦し、永遠のいのち、体の復活の祝福のすべてを受けなさい。あなたの上に平和があるように」。このような万感の思いと恵みの事実が込められたこのカイレテの挨拶の明るい音色こそ、主の復活の朝の基調音でありキリスト者の人生です。

主イエスは、彼女たちを深く愛しておられます。ところが、主の憐れみが注がれるのは、主を見捨ててしまっただらしのない弟子たちにこそ向けられています。「どうしてもガリラヤに来なさい」。そこに込められた思いは、愛と赦しのみです。主イエスの復活は、自分を殺した者、裏切った者たちへの報復の色彩がいっさいありません。彼らの裏切りもそして「イエス殺し」の恐るべき罪も、復活の力によって乗り越えられます。地上に赦されないほどの罪は、もはやあり得ません。

ガリラヤは、弟子たちが主イエスの弟子として召された出発地点です。やり直せるということです。信仰の挫折を経験しても、主イエスの復活の力によって、立ち上がれるのです。したがって、キリストの復活は、私自身が何度でも、新しく生き返えることのできる根拠です。

〈子どもカテキズムの解説〉

ハイデルベルク信仰問答問45は、主のご復活が私どもにもたらす利益について三つを数えています。

1、復活によって死に打ち勝ち、その死によって獲得された義にあずからせて下さること。

つまり、主のご復活を信じる者には、罪が赦され、義と認められ、聖なる者とされたことが確定されたということです。父なる神は、御子を甦らせることによって、私たちの救いを揺るぎなきもの、撤回不能なもの、公的なものとして宣言してくださいました。逆に、もし復活の事実がなければ、私どもの信仰は空虚です。復活の事実は、私どもの救いの確かさそのものとなります。「キリストはまさに復活された！」と告げることは、「あなたの罪もわたしの罪も赦された！」と告げることと一つとなるのです。

2、主の復活の力によって、信じる者もまた新しいいのちに生き返らされていること。

復活は、ギリシャ語で「アナスタシス」と言い、語源は「立ち上がる、起き上がる」ことです。つまり、信じる私たちが、新しい命、神のいのちを注がれて、新しく生まれることです。それは単に再び生まれるのではありません。死が生み出すもろもろの力に勝利する人間として生き返らされるのです。したがって、復活の証人とは、単に主のご復活の目撃証人だけを意味していません。自分自身に注がれた新しいいのちを自覚して生きる者、つまりキリスト者の存在と生き方にかかってきます。

3、私たちの体の復活の確かな保証となったこと。

つまり、私たちもやがて必ず肉体の死を経験します。しかし、希望と勝利の内に死ぬことができるようになったのです。また、すべての人間は、主イエスの再臨の日、審判されるために肉体において復活させられます。信じる者は主の十字架の故に罪赦されたのですから、永遠の祝福である三一の神とキリストにある兄弟姉妹との交わりを楽しみます。したがって、主のご復活を信じるか否かで、永遠は決定してしまいます。

何の疑問も覚えずに復活を信じることのできる人は、例外でしょう。愛を込め、キリストが私たちの祝福のために救われた事実を説明しましょう。

〈子どもたちに対して〉

問36で、死後の希望について明瞭に示されています。この目標と勝利に向けて、今を熱く生きることが、子どもたちに、本当は大人たちにこそ必要です。キリスト者には、究極の決定的な勝利が保証され、約束されています。だから、今ここで与えられた人生を神のために、神の国の拡大のために教会の形成のために熱く生きることができることを、燃え上がる思いで伝えたいのです。復活を信じることは、教理条項を単に納得することではなく、へこたれないで生きることです。

主イエスはご自身の死と復活を、語られました。しかしほとんどの人々が、弟子たちですらも無視し、否定し、取り合いませんでした。しかし、復活の事実を証言した一握りの者たちによって、世界中にこの福音の事実が告知され、教会が建てられて行きました。

確かに現代の教会も、十字架と復活を信じ、これにあずかって生かされています。しかし、わが身を振り返りながら率直に申しますと、私どもは、十字架と復活の力のすごさをまだ十分に知らないのだと思います。主イエスが復活された事実を黙想するとき、私どもは勇気と希望が湧いてくるはずです。キリスト復活のメッセージは、単に、聖書にこう書いてあるとかその歴史性や信ぴょう性を弁明することでなされるものではありません。どこまでも信仰によってしか知ることができない真理です。だからこそ、復活のメッセージを語る人、証人の存在が問われます。未信者や未陪餐会員がキリスト復活を本当のことなのだと心を開いて受け入れ始めるきっかけには、復活の証人との出会いが必要なのです。それは、常に明るく元気に、やることなすこと上手く行っている人が求められているということではありません。困難と絶望せざるを得ないような壁に喘いでいる教会の現場、苦しみに悩まされる人生のただ中で、しかし、へこたれないで生きている、生かされている証人こそ必要とされ、用いられるのだと思います。子どもたちに、燃え上がる思いで主の復活の恵みを語りたいと思います。　（相馬伸郎）

4月20日　復活されたキリスト　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書 28章1〜10節
子どもカテキズム　問24，36

〔単元のねらい〕

キリスト者とは、復活の証人です。復活によって主の教会は胎動を始めます。やがて、教会は復活の教理を整えます。すばらしいことです。しかし、もしかすると現代の教会は、それに安住しているのかもしれません。子どもたちをはじめこの世は、主イエスの復活をどこで知り、見ることができるのでしょうか。それは、困難の壁にぶつかり喘いでいる教会と人生の現場で、しかし、それにへこたれずに立ち上がるキリスト者と教会の存在によってです。イエスさまは、ご自身を殺した人々や逃げ出した弟子たちに復讐するためではなく、赦しと平和を告げるため、つまり平和を造り出すために復活されました。主は、彼らを徹底的に愛し抜かれます。教会は、復活に込められた神の愛に押し出されて出発しました。復活のメッセージこそ、どんなに困難でくじけそうになっても、繰り返し教会を立ち上がらせる力です。復活の福音をしらじらしいものとさせないため、復活の証人が用いられます。

見てごらん、空っぽになった墓を

今日は、復活祭です。イエスさまは、死者の中から復活されました。主の御名を心の底から賛美いたします。

今朝は、最初の復活祭、つまり、イエスさまが復活された日曜日の朝の出来事について学んで、復活されたイエスさまを礼拝いたしましょう。十字架につけられた金曜日から三日目の日曜日の朝早く、マグダラのマリヤたちはイエスさまが葬られたお墓に駆けつけました。岩をくりぬいて造った墓の入り口には、大きな石でふたがされていました。そればかりか、番兵たちが厳重に見張っていました。ところが、マリアさんたちが墓についたとき、大きな地震が起こって、墓石は転がされてしまいました。すると、神さまから遣わされた天使が、天から降って来て、大きな墓石の上にちょこんと座りました。

天使は、復活されるイエスさまにお会いしたいと願っているマリアたちに、言います。「十字架につけられたイエスさまは、ここにはおられませんよ、前にイエスさまが仰っていたとおり、復活なさったからです。空っぽのお墓を見て確かめてごらんなさい。イエスさまは、ガリラヤであなた方を待っていてくださいます」。彼女たちは、大喜びで、お弟子さんたちに伝えに走り出しました。

ある人は言います。「私だって、復活されたイエスさまを見たなら信じるよ。でも、見ることもできないのに復活を信じるなんて、馬鹿げているよ」。でも、考えてください。マリアさんたちですらお墓の中で、どのようにイエスさまがお甦りになられたのかを見ることはできませんでした。彼女たちがイエスさまの復活を信じたのは、イエスさまの御言葉を信じ、空っぽの墓を見たからなのです。

逆に、もしも、ユダヤ教の指導者たちがそこにいて、空っぽの墓を見たとしたら、イエスさまの復活を信じたでしょうか。実は、彼らは「弟子たちが盗んだのだ」などと言って否定しました。つまり、信じようとしない人には、どうやっても信じることはできないのです。ところが、マリアたちは、すぐに、完全にわかりました。復活されたイエスさまのお姿を見なくても、イエスさまとその御言葉が確かであることは信じられるのですし、わかるのです。

皆さんも、復活されたイエスさまを見てみたいと思うこともあるでしょう。でも、残念ですがそ

れは、できません。天に戻られたからです。当たり前ですが先生も、復活されたイエスさまにお会いしたことはありません。でも、イエスさまの復活をこんなにまで信じています。何故信じることができたのでしょうか。

第一に、神さまの愛、イエスさまの愛と聖書に書いてあることを信じることができたからです。第二に、先生もまた空っぽの墓を見たからです。いえ、残念ながら先生はイスラエルに行ったことがありませんから、イエスさまのお墓を見たことはありません。けれども、空っぽの墓の代わりにはっきりと見ることができるものがあるのです。それは、何だと思いますか。先生にとっては、この岩の上教会がそれです。建物のことではありません。神さまに名前を呼ばれて集められた僕たち私たちのことです。そこには、みんながいて、大人の人たちもいて、実に、さまざまな人がいます。毎朝、ニコニコしながら迎えてくれる先生たちがいます。でも、実は、いつでも喜びや感謝に溢れた生活を送っているというわけではありません。ときに病気になったり、仕事がうまくいかなかったり、家族に心配があったり、つらいこともあります。ときには、倒れてしまうこともあります。しかし、その度に、イエスさまは立ち上がらせてくださるのです。つまり、イエスさまを信じる人は、たといノックダウンされることはあってもノックアウトされることはないということです。復活されたイエスさまが今も生きて働いて、私たちを起き上がらせ、しっかりと導いてくださるからです。

皆さんの中で、お友だちから裏切られたり、嘘を言われたりしたことのある人もいるでしょう。どんな気持ちになりましたか。恨む気持ち、仕返しをしたくなる気持ちが湧くと思います。イエスさまは、お弟子さんたちから裏切られました。ところが、復活されたイエスさまは、裏切った弟子たちにお姿を見せてあげて、赦し、癒してあげようとされます。イエスさまは、マリアさんたちの信仰を喜ばれましたが、しかし、不信仰な12人のお弟子さんたちこそ、立ち上がらせたいのです。

そのことを良く知るために、復活されたイエスさまの、勝利の第一声を聴きましょう。イエスさまは、マリアさんたちに「おはよう」と挨拶されました。

もとの言葉には、「おめでとう」という意味があります。イエスさまは、「わたしが甦ったのは、あなたも甦るためです。わたしの復活は、あなたの復活です。だから、おめでとう」と、私たちの勝利を宣言をしてくださったのです。

また、「喜びなさい」という意味もあります。「わたしが復活したからには、いつまでも悲しんでいる必要はなくなりましたよ。あなたの悲しみは、喜びに変えられるから、もう、一緒に喜んでしまおう」という意味です。

三番目には、「平和があるように」という意味もあります。「わたしは復活したのだから、わたしを裏切り、殺した人でもどんな人でも、もう、神さまには、なんのわだかまりもなくなってしまった。神さまとあなたの間には平和だけがある」という意味です。

そうです。もう、古い時代は終わりました。古い人間の生き方も終わってしまいました。何故なら、もう誰の罪も赦され、神さまの敵はいなくなって、平和が実現したからです。世界は、神の愛の勝利によって救われたからです。もう、死ぬことすら恐れる必要がなくなりました。永遠に神さまと、そして愛する仲間たちと共に生きることが定まってしまったのです。死は、天国への門となり、出発となったからです。もう、イエスさまを信じない人は、古いです。今朝、改めて信じましょう。それでも、イエスさまのご復活が良くわからないと言うお友達がいれば、何度でも、イエスさまの「おはよう」のご挨拶を聴いてください。そして、先生やこの教会をしっかりと見てください。

（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 28章5〜6節

天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。

4月20日　復活されたキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

復活してくださったイエスさまの命の確かさに、今、生かされていることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

この世界において、命あるものはやがていつか死んでしまうこと、消えてなくなってしまうことを幼いながらに知っています。大好きな家族の誰かが死んでしまったり、大切に育ててしまったペットが死んでしまったり、あるいは大事にしていたおもちゃをなくしてしまったり……。たとえ具体的に「死」という経験をしてなくても、自分にとって大切な何かを失ってしまい、それがもう二度と戻って来ることはないということを知った時の絶望感は何とも言えないものがあります。子どもも大人も皆、言葉を失ってしまうのです。

イエスさまの死もまた人々に悲しみをもたらすものでした。復活したイエスさまのことを天使から聞いた婦人たちも最初は復活の知らせを信じることができませんでした。だから、イエスさまの遺体が納められていたお墓の中を捜し続けたのです。まるで死という力を信じているかのように。死とそれがもたらす悲しみだけは、どのような力もかなわない。そう信じていたのです。

でも天使は言います。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい……」。もうお墓の中を捜し続けなくてもよいのです。お墓の中を見て悲しみや空しさを覚える必要はないのだと言います。空っぽのお墓を見て、あなたが見るのは、そこにイエスさまはおられないという事実です。つまりそこに、死も、悲しみも、恐れもないという驚きの事実です。イエスさまの復活によって、死の事実を見るときに、これまでの死に対する見方がまったく変えられるのです。遺体の置いてあった場所にイエスさまがいないということは、そこに本来ならばあるはずの絶望や悲しみがなくなってしまったということでしょう。これまで考えもしなかったことが、今、目の前で起こっている。その不安と恐れを抱えながら、婦人たちは、墓の外に出て、イエスさまの復活の知らせを伝えたのです。

私たちがこれまで信じていたことが、イエスさまの復活によって一つ一つ覆されていくということは、とても恐いことかもしれません。でもその恐れを抱えながら、神さまの言葉を信じて、墓の中から飛び出すとき、神さまの言葉を信じて歩み始めるとき、復活のイエスさまは必ずあなたと出会ってくださいます。復活のイエスさまの命に生かされることがどれほど素晴らしいことであるかを知るようになるのです。

〈祈り〉

私たちの周りには悲しいこと、辛いこと、恐いことがたくさんあります。自分が死んでいなくなってしまうことを考えるととても恐くなります。でも、イエスさまが復活してくださいました。ずっとイエスさまと一緒に生きていくことができることを感謝します。

4月20日　復活されたキリスト　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねていわれたとおり、復活なさったのだ。』」

・天使はここで何を知っていますか。そして、何をしていますか。

→天使は、かねてからいわれとおり、イエス様が復活したこと、そしてそのことをまだ分からない婦人たちに、教えています。

・「かねてからいわれたとおり」とありますが、イエス様は以前から何といっていたのでしょうか。（マタイ16:21以降、17:22以降、20:17以降。参考：マルコ、ルカの平行箇所）

→十字架につけられて殺され、三日目に復活する。

・イエス様がかねてからいわれていたことを、お弟子さんたちはわかっていましたか。

→分かっていませんでした。

・ここにはおられない。とはどういうことでしょうか。

→イエス様は死人の中にはいない。復活したということ。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・今日のお話でイエス様は何をなさいましたか。

→イエス様は復活しました。そして、イエス様は死人の中にいないということを示してくださいました。そして、イエス様は、かねてからいわれたとおりことをそのとおりしてくださいました。

・あなたは復活した人に会ったことがありますか。噂話ではなく知っている人で。

→イエス様の出来事をもとにして考えてみましょう。これまでイエス様の言われたことは全部実現しました。そして、死の力に優って、イエス様の言葉は力強いのです。

2-2. 婦人たちのことを考えよう。

・婦人たちは、イエス様がどこにいると思っていますか。

→お墓の中。死人の中。お弟子さんたちだけでなく、婦人たちも以前イエス様が言われたことがわかりませんでした。私たちも、イエス様の言っていることがわからないと、おられないところを探してしまうことがあります。

・イエス様が復活したことをどうやって理解できましたか。

→天使が、婦人たちにイエス様の言葉を思い返させたことによって理解できました。

2-3. わたしたちのことを考えよう。

・私たちはイエス様の復活を信じていますか。

　では、なぜ信じられるのですか。教会で教えてもらったから？ 牧師さんが言ったから？

→それらも大事です。でも、最初に復活を語ったお方はだれでしょうか。イエス様ですね。そしてイエス様は語った事を必ず実現された方でした。だから、第一にイエス様が言っていたということを大事にしましょう。

・イエス様が復活した事は、私たちにどんな良いことをもたらしますか。

→イエス様を本当に信じているなら私たちも同じ恵みが与えられます。復活がなければ、イエスの物語は十字架で終わりです。でも、復活されたので天で生きて働かれておられます。復活があるから、神様の言うことを、苦しい時も恐い時も従えるようにさせてくれます。苦しい時、恐い時、そこから逃げたくなることがあるでしょう。でも、復活があるから、神様の言うとおりに生きる力がもらえます。神様からの特別な力、特別な希望。それが、復活です。

3. おやつ

小さなお芋をそのままオーブンで焼いておく。
食べる前にお友達に祈ってもらう。
食べながら、分ち合いもよい。

4月27日　弟子たちを慰めるキリスト　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 21章1〜14節

1. 御言葉に従って（1〜11節）

復活された主イエスがティベリアス湖畔で、七人の弟子たちと出会ってくださる。そして、大漁の奇跡を見せてくださる。このことが、これから使徒として福音宣教の働きへと派遣されていこうとしている彼らにとって、決定的な意味をもつことになるのである。

彼らは漁のプロであったが、夜通し働いても何ひとつ収穫を得ることができなかった。しかし、主イエスは彼らに仰せになる。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」（6節）彼らがそのとおりにすると、おびただしい魚が網にかかった。

ここには、人間を漁る漁師として召され、伝道の働きにたずさわる者たちがわきまえるべき、きわめて重要な原則が示されている。教会が伝道のわざを担おうとするさいに、時代をこえて覚えられるべき真理である。すなわち、伝道のわざは主の御言葉に従ってなされることによって実を結ぶということである。

伝道の困難ということがしばしば話題となる。ともあれ、教会は自身の経験や技術を頼りにして、小手先で事に当たるべきではない。御言葉に従うとき、わたしたちは聖霊を受ける。聖霊が新しい、根源的な力を与えてくださる。そのとき、福音宣教の働きは豊かに祝福されるのである。

伝道は神のわざであり、霊の収穫は御言葉への服従の報いとして与えられる。神のわざは神ご自身において始められなければならない。人間が神に代わって主導権を握ることができるかのように考えるとき、そこでは網いっぱいの収穫を期待することはできないであろう。真に人の魂をすなどる働きを担うこともできないであろう。御言葉に従うとき、主はわたしたちとともにおられる。何事をなすにしても、それが最も重要なことなのである。

このことは伝道のわざにとどまらず、信仰者の担うあらゆるわざに妥当するであろう。信仰者の生涯は御言葉に従い、御言葉に賭ける生涯である（ただ信仰によって、御言葉に従って旅立ったアブラハムのことが思い起こされる）。地上の歩みのおりおりに御言葉に従って生きることで、主はわたしたちの生涯を豊かに祝福し、ととのえ、導いてくださる。わたしたちが自身の手の中で自分の人生を操るというのではない。神が語られ、わたしたちが信仰をもって従う。この単純素朴ないとなみが信仰者の人生に美しい軌跡を描くのである。教会も、キリスト者も、そのようにして生きるのである。

わたしたちは日々の生活において、人の言葉を優先させているだろうか。それとも神の言葉を優先させているだろうか。わたしたちが最後に聞き従うべきはこの世の、あるいはわたしたち自身の言葉ではなく、神の言葉であることを覚えたい。

2. 主がともにおられる（12〜14節）

よみがえられた主イエスは、陸に上がった弟子たちと食事をともにしてくださる。ここでわたしたちは、主の日の礼拝における聖餐の礼典を想起することができるであろう。

主イエスは、わたしは命のパンであると仰せになる。主イエスはわたしたちが生きるために、ご自身の復活の命を分け与えてくださる。主の食卓につらなる者たちは主に結ばれ、文字どおり主とひとつにされる。生ける主が聖なる食卓に臨在したもう。

それゆえ、わたしたちはもはや主はどこにおられるのかと探し回る必要はない。復活の主が、わたしたちの霊の目を開いてくださったゆえに、わたしたちにはわたしたちとともにおられる主のお姿が見えるのである。最後の晩餐の食卓にあっては、なお弟子たちの目は閉ざされていた。しかしこの朝の食卓では「弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」（12節）。

わたしたちには、復活の主を見る幸いが与えら

れている。主を見るとはどういうことか。主とともに生きることである。主の命を受け、主との生命的な交わりに生きることである。わたしたちを罪から救い、わたしたちの命を生かすために十字架に死なれ、よみがえられ、永遠に生きておられる救い主がわたしたちともにおられる。わたしたちを愛し、わたしたちを慰め、励まし、力づけ、いかなるときにもわたしたちの命を守り支えてくださる。その幸いに生かされて生きることである。

加えて、もうひとつのことがある。わたしたちは主を仰ぎ見る祝福にあずかるのみならず、兄弟たちをも霊の目をもって見ることができる。主に結ばれ、主のもとでともに生きるおたがいを、よみがえられた主イエスの光のもとで見ることができる。兄弟姉妹たちの一人一人を主イエスによって贖われ、主イエスにあって復活し、主のものとされ、主イエスに合わせられて生きる存在として見ることができる。聖なる人間として、いわば終末的なまなざしをもって見ることができるのである。

聖徒の交わりはそうしたまなざしのもとで築かれていく。そしてそこでは罪の赦しの恵みが、さらにおたがいが主にあって仕え合う兄弟愛の祝福が、現実のものとなってあらわれるのである。復活の主がともにおられることの確かな慰めが豊かに分かち合われるのである。　　（木下裕也）

4月27日　弟子たちを慰めるキリスト　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 21章1〜14節

〔単元のねらい〕

復活された主イエスがティベリアス湖畔で、七人の弟子たちと出会ってくださったことを記す箇所である。ふたつの場面が描かれる。大漁の奇跡を見せてくださった場面と、朝の食事をともにしてくださった場面である。「単元の目標」にあるように、いずれの場面においても弟子たちとともにおられ、彼らを慰めてくださる主イエスのお姿を見たい。そしてわたしたちも主にある慰めにあずかりたい。

ともにおられるイエスさま

十字架に死なれたイエスさまは、三日目に墓をやぶってよみがえられました。よみがえられたイエスさまは、弟子たちにもそのお姿をあらわしてくださいました。

よみがえられたイエスさまにお会いしたとき、弟子たちはどんなにうれしかったことでしょうか。イエスさまが十字架につけられたとき、彼らはイエスさまを見捨てて逃げてしまいました。どんなことがあってもイエスさまに従っていくと言っていたのに、怖くなって逃げてしまったのです。イエスさまを裏切った罪に打ちのめされて、彼らは生きる望みを失っていたのです。

その弟子たちに、復活のイエスさまはみずから出会ってくださいました。そしてそのお体に刻まれた十字架の傷あとを示して、これはあなたがたの罪が贖われ、赦されるためにつけられた傷なのだと、わたしはあなたがたのために死ぬほどにあなたがたを愛しているのだと、そしてわたしがよみがえったことを信じるなら、あなたがたは罪赦されて永遠に生きるのだとおっしゃったのです。これほどに喜ばしい知らせはありません。復活のイエスさまを仰いで、弟子たちはもう一度息を吹き返したのです。命の希望に満たされたのです。そして、この赦しと命の喜びを人々に語り伝えるために、これからは伝道者となって召されていくのです。

今朝の聖書の箇所には、よみがえられたイエスさまが、湖のほとりで弟子たちとふたたび出会ってくださったときのことが書かれています。彼らは漁をしていました。けれども、夜通し漁をしても何もとれませんでした。

イエスさまは彼らに近づいて言われました。舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば魚がとれる。弟子たちはイエスさまがおっしゃったとおりにしました。すると、網を引き上げることができないほどにたくさんの魚がかかったのです。

この大漁のみわざによって、これから伝道者として、人間を漁る漁師となってこの世に遣わされていこうとしている弟子たちに、イエスさまはとても大切なことを教えてくださいました。それは、福音をのべ伝える働きはイエスさまの御言葉に聞き従うときにこそ豊かに祝福されるということです。

この世に救いと命の知らせをのべ伝える。それは、神さまご自身がなしていかれるお働きです。もちろん人間もその働きに仕えます。わたしたちも福音をのべ伝えます。でも、わたしたち自身の知恵や力や計画によっては、そのわざはなし得ません。弟子たちは漁のプロでしたが、自分たちの経験やわざに頼って夜通し働いても、魚は一匹も網にかかりませんでした。イエスさまの御言葉に従って網をおろしたとき、おびただしい魚がかかったのです。

多くの魚は、御言葉に従う信仰の実りとして与えられました。わたしたちは覚えておりたいのです。わたしたちのすべてのわざは、イエスさまを信じる信仰によって意味をもち、実を結びます。

御言葉に従って生きるとき、わたしたちの命のいとなみは豊かに祝福されます。

イエスさまはわたしたちに問いかけておられます――あなたは人の言葉を優先させますか。それとも、わたしの言葉に従いますか。イエスさまの御言葉に聞き従って歩むとき、イエスさまはわたしたちとともにおられます。そして、新しい力を与えてくださいます。死に勝利してよみがえられたイエスさまに結ばれて、わたしたちも永遠の命に生かされて生きるのです。これほど心強いことはないのです。

さて、イエスさまは陸に上がった弟子たちとともに、朝の食卓を囲んでくださいます。みずからパンと魚を分け与えてくださるのです。イエスさまが、信じる者たちとともに食事をしてくださる。このことについて、わたしたちは主の日の礼拝での聖餐の食卓を思い起こすことができます。

聖餐の食卓において、イエスさまは信じる者たちにご自身の命を分け与えてくださいます。そして、なんとすばらしいことでしょうか。そこでは、もう主はどこにおられるのかと探しまわる必要はないのです。この食卓に集まる者たちには、イエスさまのお姿が見えるのです。今ここでイエスさまはわたしたちとともにおられる――そのことがわかるのです。イエスさまがわたしたちの霊の目を開いてくださるからです。

イエスさまを見る。肉の目ではなく、開かれた霊の目をもって復活のイエスさまを見る。それは、イエスさまの命を受けるということです。イエスさまとともに生きるということです。イエスさまを信じること、イエスさまを愛すること、その喜びと恵みとをあふれるほどに身に受けて生きるということです。

どんなにつらいときも、苦しいときも、悲しいときも、イエスさまがともにおられます。わたしたちを罪から救い、わたしたちの命を生かすために十字架に死なれ、よみがえられ、永遠に生きておられる救い主がともにおられます。わたしたちを愛し、わたしたちを慰め、励まし、力づけ、わたしたちとともに歩んでくださるイエスさまに結ばれて、わたしたちもおたがいに愛し合い、赦し合い、イエスさまの命を分かち合って生きることができるのです。

そのことを思うとき、わたしたちの心は喜びに満たされます。よみがえられたイエスさまを信じ、イエスさまに従って生きるとき、はかり知れない命の恵みがわたしたちに注がれるのです。イエスさまから来る確かな慰めがわたしたちの命の歩みを支えるのです。

ティベリアス湖畔の七人の弟子たちは、そのことの証人です。わたしたちの一人一人も、そのことの証人です。　（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 28章20節（b）

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

4月27日　弟子たちを慰めるキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまを信じることができるために、復活のイエスさまはいつも私たちをもてなしてくださるお方であることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

今回の御言葉の終わりの方に、こういう言葉が記されています。「弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである」（ヨハネ21:12）。読んでいて何だか嬉しくなるような、あるいはホッとするような言葉です。いや、私たち以上に、イエスさまご自身が安心しておられることでしょう。やっとここまで辿り着いたのだね。わたしのことがやっと分かったのだね。

子どもたちは、福音書に描かれている弟子たちの様子を見ながら、どのような思いを抱いているのでしょう。実際にイエスさまを見ることが弟子たちをうらやましいなと思っている子もいるかもしれません。私もペトロさんみたいにこれまで大事にしていたことを捨てて、イエスさまに従いたいなと憧れの思いを持っている子もいることでしょう。でも、子どもたちの心に残る弟子たちの姿は、格好よくて立派な姿ばかりではないでしょう。イエスさまのお語りになることやなさることを十分に理解することができず、叱られてばかりいます。イエスさまが捕まったときも、助けずに、自分だけ逃げ出しました。復活したイエスさまが目の前にいるのに、まだ疑っている。他にも色々数えてみると、多くの失敗や罪を重ねる弟子たちの姿があります。その度に、まだこの人たちはイエスさまを信じられないのか。情けないなと思う子たちもいるかもしれません。今日も箇所でも、湖の岸に立っておられるイエスさまのことが、いまだによく分かっていないようです。

その日の夜、何も獲れず疲れ果てている弟子たちに、イエスさまは語りかけます。そして、そのお言葉どおりに、もう一度網をおろしてみると、大漁の魚が網に入っていたのです。この出来事をとおしてある弟子が、私たちに語りかけてくださったお方は「主だ」ということに気付きます。まだイエスさまのことが分からない自分たちのことを叱ることなく、分かるようになるまで忍耐強く御言葉を語ってくださいます。その言葉に従うとき、イエスさまのことが分かるようになるのです。またイエスさまは漁から帰って来た弟子たちをもてなすために朝食の準備をしてくださいました。弟子たちは、イエスさまが用意し、もてなしてくださった食事を共にしたのです。その豊かなもてなしの中で、もうイエスさまについて疑い深い問いを抱く弟子たちは誰もいませんでした。

またこのことは、「漁師」という言わば日常の働きの中で、イエスさまが共にいてくださり、イエスさまのお姿が見えなくなっている弟子たちをもてなしてくださった出来事でもあります。教会の礼拝でお会いするイエスさまは、家庭や学校で起こる一つ一つの歩みの中にも共にいてくださるお方です。そのお姿はすぐには見えないかもしれません。でも、そこでイエスさまが語りかけてくださるお言葉に耳を傾けてみましょう。きっとイエスさまのことが分かるはずです。

〈祈り〉

イエスさまのことが分かるようになるために、いつも私たちのこと見ていてくださり、待っていてくださることを感謝します。

4月27日　弟子たちを慰めるキリスト　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」マタイ28:20b

・わたしとは誰でしょう。
→イエス様。
・世の終わりまで、とはいつでしょう。
→百年後か千年後か、いつかわかりません。明日かもしれません。将来、イエス様がまた来られる時が世の終わりの時、世の完成の時です。その時までずっとということです。
・「あなたがたと共にいる」とはどういう意味でしょう。
→イエス様が教えてくれた戒めや勧めなど、私たちにこうしなさいと教えたことをしようとするときに、それができるようにイエス様がいつも守り、助け、導いてくださいます。例えば、旧約聖書では、神様が共にいるということは、困難の中でももうだめだという時にも神様が救ってくれたり、圧倒的に不利な戦いにも勝利し、神様が働いていて下さいました。それはいつも、律法（神の言葉）を守るなら、神様は共にいる、ということでした。イエス様が命じたことを成そうとするとき、イエス様が支え、助け、力を与えてくださいます。共におられます。だから勇気が与えられます。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・復活したイエス様は、何をしたかったのだと思いますか。
→イエス様の言葉が本当だと、お弟子さんたちに信じさせようとなさいました。十字架につけられる前のイエス様本人がよみがえったことを教えるためです。それは、聖書がイエス様について証しいてることを伝えるためでした。イエス様は復活した後、誰にも会わないで天に昇ろうとなさらず、ちゃんと弟子たちにお会いになったのです。
・イエス様は今日の箇所で復活したことを証しするために、何をしましたか。
→網を右側に打つこと、食事を共にすること。

2-2. お弟子さんのことを考えよう。

・お弟子さんたちは、イエス様に会っても最初はわかりませんでしたが、やがて分かりました。それはどうしてですか。
→以前、イエス様がなさっていた御業、御言葉の力を経験したから。それは、イエス様が言われたとおり、網を右に下ろして大漁となったからです。もし、イエス様の言葉を優先せず、自分の言葉（もう魚はとれない）を優先させていたらイエス様が共にいると気が付かなかったことでしょう。
・お弟子さんたちはイエス様が共にいることに気付いていましたか。
→気付いていませんでした。しかし、イエス様の言うとおりにして、その言葉の力を知ったときに、共にいることに気付きました。でも、イエス様はお弟子さんたちが気付く前から共にいました。
・お弟子さんはイエス様と食事をしましたが、前回食事をしたときはいつでしたか。
→主の晩餐。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・私たちは、天におられるイエス様を見ることができませんが、共におられることをどこで知りますか。
→イエス様の言葉と共に、神様の力が表れることを通して。そして、聖餐式において、臨在してくださいます。

3. ゲーム

しんぶんじゃんけん。ただし、じゃんけんに勝ったら、たたんである新聞を一回分広げる事ができる。一番大きく開いているなら、そのまま。

5月4日　弟子たちを立ち上がらせるキリスト　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 21章15〜19節
参照教理問答　子どもカテキズム　問66，67
ウェストミンスター信仰告白 5章5節

〈ペトロの前に立ってくださる復活の主イエス〉

十字架の死から復活された主イエスは、離反を予告（マルコ14:27〜31）しながらも、主イエスが逮捕された時に、主イエスのことを三度「知らない」と語ったペトロ（同14:66〜72）の前に立ち、声をかけられる。

主なる神さまは、事前に忠告したにもかかわらず、失敗した者に対して、冷たくあしらわれることはない。主はペトロを愛し、ペトロの罪を赦して下さった。

主イエスは、シモンに対して「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」（マタイ16:18）とお語りくださり、「ペトロ」の名をお与えくださり、新約の教会の指導的立場に立たせてくださった。人の上に立ち、指導的な立場に立つ者は、他の人々より、より罪の悔い改めと、主による救いを確信しなければならず、そのために主の愛を確認することが求められた。

そのため、ペトロにとって、復活の主イエスと出会うこと、そして自らの罪を顧み、悔い改めること、主の愛を確認することは、非常に大切な作業であった。

しかしこの時、ペトロは自らの意志で、主イエスの御前に行き、罪の悔い改めを行うことはなかった。むしろ主イエスの方が、ペトロの前に立ち、声をかけてくださった。信仰とは、私たちの意志によって確立されるものではなく、主なる神さまのご計画と愛、摂理の御業が成し遂げられることにより、私たちに有効とされる。そのことが、ペトロの前に、主イエスが立ってくださることによっても示されている。

教会には、神さまを求め、喜んで教会に来ている子どもたちもいるが、家族の信仰の故に、無理に来させられている子どもたちもいる。ペトロにとって、本当の意味で、悔い改めなければならないこと、主イエスの愛を受け入れることを必要としていない中、復活の主イエスはペトロの前に立ってくださり、声をかけてくださった恵みは大きい。今、教会に来ることの意味を理解できず、救いの喜びに満たされていない子どもたちに対しても、今、主イエスが一緒にいてくださり、愛をもって声をかけてくださり、神に立ち帰る時を待ってくださっていることを伝えたい。

〈三度繰り返される主イエスの問いかけ〉

ペトロは、逮捕された主イエスのことを、三度「知らない」と否定した。完全否定である。

それに対して主イエスは「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と三度、ペトロに対して問いかけてくださった。主イエスは、ペトロの思いをすべてご存じの上で、繰り返し確認されました。ペトロはそのことを十分承知の上で、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答える。そして三度目に、ペトロは「悲しくなった」。この悲しみは、主イエスがペトロの思いを疑いつつ繰り返して問いかけられていると感じての悲しみではない。すべてをご存じの方が、繰り返し繰り返し、ペトロの心を確認し、その意志を強めてくださったのであり、ペトロ自身は、自らの犯した罪の大きさを改めて確認し、そしてその罪に対する恥じらいによって、悲しくなったのである。そしてペトロにとっては、自らの罪の大きさが示されれば、示されるほど、主イエスが無条件に受け入れてくださり、愛してくださっていることを理解することができたのであり、失敗を繰り返さない決意と献身の思いを強めるのに、必要な繰り返しであった。

そして主イエスは「わたしの小羊を飼いなさい」と三度語ってくださる。ペトロにとっては、自らの罪と向き合い、悔い改めることから、一歩進み、主イエスの弟子となること、さらには天に昇られ

る主イエスに代わって、牧者・宣教者としての使命が与えられていく。

この御言葉は、牧師や伝道者として召される者たちが、復活の主イエスと出会い、献身の心を確認することに用いられる。しかしこの御言葉は同時に、教会に集う一人一人、そして子どもたち一人一人が、主の御前に立ち、神の愛、神とのつながり、神による救いを、じっくりと確認し、神の子どもとして立つことができるように導くものである。そのために、三度の繰り返しを、ゆっくりと一言ひとこと確認するように語ることにより、子どもたちにとっても、主イエスの愛を理解できるように伝えていきたい。

〈わたしに従いなさい〉

主イエスは、ペトロの献身を確認した上で、最後に、主イエスに従うキリスト者としての歩みを示される。キリスト者として生きることは、天国における永遠の生命の希望に生きることである。しかし同時に、地上においては、ノン・クリスチャンに囲まれ、キリスト教を蔑視する人々に囲まれて生きることでもある。キリスト者として、信仰を貫くこと、神の民として、主の御言葉に従った歩みをすることは、たやすいことではない。自分の意に反して、茨の道を歩むことも求められる。

しかし、主イエスは、そのような茨の道であっても、主イエスの愛に満たされ、献身の思いを確認したペトロが、神への信仰を貫き、神の栄光をあらわす者として殉教していくことを預言してくださった。

子どもたちにとっては、日曜日になれば、クラスで自分一人だけが教会に行っている人たちも少なくない。子どもたちにとって、日曜日の朝に、お友だちと一緒に遊ぶことを断り、教会に来ることも、大きな信仰の闘いとなる。いじめの対象となるかもしれない。中学・高校になるとクラブ活動の誘惑もある。こうした一つひとつの信仰の誘惑、信仰の闘いを経験することにより、信仰が養われ、神の栄光を称える生活を行うことができることこそが、キリスト者としての喜びであることを、子どもたちに伝えたい。

主イエスは、ペトロが主イエスを裏切り、主イエスを否定したにもかかわらず、ペトロを愛し、ペトロを受け入れてくださったように、私たちが、失敗を繰り返したとしても、主イエスはいつも目の前に立っていてくださり、愛をもって受け容れてくださる。だからこそ、自分にはそんなことできないと、後ろ向きになるような子どもたちがいたとしても、愛を持って受け入れ、神の愛を伝えていきたい。　（辻　幸宏）

5月4日　　弟子たちを立ち上がらせるキリスト　説教展開例

テキスト　　ヨハネによる福音書 21章15〜19節
子どもカテキズム　問66，67
　　ウェストミンスター信仰告白 5章5節

〔単元のねらい〕

罪を犯したペトロに対して、主イエスは前に立ち受け容れてくださった。私たちにとって、毎週教会に来ている子どもたちであっても理解できないことがあり、どのように接したら良いのかわからないときもあるかと思う。しかし、主イエスは、ペトロのことをすべてご存じであるように、子どもたちのこともすべて知っておられる。悪いことをしたことも、毎日の生活もである。その上で、主は、愛をもって、一人一人を覚え、声をかけてくださり、受け入れてくださっている。

その上で、主イエスは、罪の悔い改めと献身の思いを言葉にしたペトロに対して、キリスト者として信仰を貫くことの厳しさをお語りになった。日本においてキリスト者として信仰を貫くことは、簡単なことではない。しかし信仰にこそ、喜びがあり、神の祝福があることを伝え、キリスト者として生きる決断を語りかけていきたい。

目の前に立って下さるイエスさま

みんなは、悪いことをしてしまったりしたとき、後から、「あの人とは会いたくないな」と思ったことはありませんか？　悪いことをしたから、怒られるかもしれません。嫌われるかもしれません。絶交だと言われるかもしれません。その場にいたくなくて、逃げ出したいと思ってしまうこともあるかもしれません。

実は、ペトロさんも、そうでした。他の弟子たちは、十字架に架かって死なれたイエスさまが、復活されたことを、心から喜んでいました。ペトロさんも嬉しかったに違いありません。一緒に食事をとってくださったことが、嬉しくて嬉しくて仕方がありません。しかし、ペトロさんは、イエスさまと目と目を合わせることができなかったと思います。自分がとんでもない罪を犯したことを知っていたからです。

イエスさまは、逮捕されて十字架に架けられる前の夜、ペトロさんに、「あなたは今晩、鶏が鳴くまでに、わたしのことを知らないと三度言う」とお語りになったのです。ペトロさんは、「そんなこと決してありません」とイエスさまの忠告を否定しましたが、実際に、イエスさまが逮捕され、裁判にかけられている状況を見ると、自分も逮捕されるのではないかと怖くなり、「あなたもイエスの仲間ではないか」と問われたとき、「イエスさまのことなど知らない」と答えてしまったのです。それも一度や二度ではなく、三度もです。「絶対にそんなことありません」と語ったのと同じです。逮捕され、裁判にかけられていたイエスさまも、ペトロさんがそのように答えているのを、遠くから見ていたことでしょう。ですから、ペトロさんは自分が語ったことを否定することもできません。

ですから、イエスさまが十字架の死から復活され、一緒にご飯を食べることができるのは、とっても嬉しいけれども、しかしイエスさまの前に行き、喜びを分かち合うことなどできないでいました。

しかし、そんなペトロさんの前に、イエスさまが来てくださり、声をかけてくださったのです。ペトロさんは嬉しい反面、隠れたかったことでしょう。ペトロさんは、イエスさまは何を語られるのだろうか？　怒られるのだろうか？　そのようなことを考えたかもしれません。しかしイエスさまがペトロさんに語られた言葉は「ヨハネの子シ

モン(ペトロさんのこと)、この人たち以上にわたしを愛しているか」ということでした。復活を遂げられたイエスさまは、神さまだから、ペトロさんの行ったことばりか、心の中で考えていることもすべて知っていました。それも、一度ではなく、二度目、三度目もイエスさまは、ペトロに繰り返して問いかけられました。ペトロさんは最初、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えましたが、三度目になると、悲しくなりました。「イエスさま、なんでわかってくれないんだ」という思いではありません。イエスさまが、これだけ自分のことを愛していてくださっているにもかかわらず、自分はイエスさまに対して何を行ったのだ、と自分の行った罪がどれほど大きいものであったのかが、わかったのです。

主なる神さま、そしてイエスさまは、罪を犯したからといって、怒ったり、破門したりはしません。なおも愛をもって受け容れてくださり、罪を赦してくださいます。だからこそ、ペトロさんは、自分は大きな罪を犯したから、もう決して罪を犯さないようにしよう、どんなことがあっても、イエスさまを信じて、イエスさまを証しして生きていこうと思ったのではないでしょうか。

今、イエスさまは、ここにいる皆さんに対しても、「あなたはわたしを愛していますか」と問いかけてくださっています。一度ならず、二度、三度、繰り返し繰り返し語りかけてくださっています。いつもイエスさまは、皆さんと一緒にいてくださいます。先生は皆さんが、学校や家でどのような生活をしているか知りませんが、イエスさまは、みんな知っておられます。悪いことを行ったこと、隠れた所でいたずらしたこと、他人には知られたくないこともあるでしょう。イエスさまは、みんな知っています。それでも、イエスさまは、ここにいる一人ひとりの名前を呼び、「わたしはあなたを愛している」とお語りくださっています。だからこそペトロさんのように「わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます」と告白していきたいと思います。

しかし、イエスさまは、ペトロさんが「あなたを愛しています」と語られたとき、さらに「わたしの羊を飼いなさい」と語られました。今までは、イエスさまのことを信じて、イエスさまの命じられることを守っていれば良かったのです。しかし、イエスさまは、これから天の昇って行かれ、地上からはいなくなります。その時にこそ、あなたが教会を導きなさいと、イエスさまは命令されたのです。イエスさまを信じるとは、イエスさまが愛してくださっているから、喜んで私たちもイエスさまを信じることだけに留まりません。イエスさまに愛されている人は、キリスト教会において、とっても大切な人です。みんながそろうからこそ、教会になるのです。誰一人欠けても成り立ちません。だからこそ、みなさんも、イエスさまを信じること、教会の一員になることを、神さまは求めておられます。

正直言って、クリスチャンになれば、何でも楽しいわけではありません。日曜日には、何で自分だけ教会に行かなければならないのだろう、と思うこともあるでしょう。神社やお寺で参拝を行わなかったりすれば、不思議に思われることがあるかもしれません。自分だけ格好が悪いと思ってしまうかもしれません。イエスさまは、ペトロさんに対して、クリスチャンであると、行きたくない所に連れて行かれることもあるよ、嫌なことをやらされることもあるよ、とお語りになっています。クリスチャンであることは、辛い時もあるかもしれません。しかし、あなたがクリスチャンであることを、イエスさまは喜んでくださいます。そしてとっても素晴らしいことです。だからこそ、皆さんも、今も目の前にいて、見守っていてくださるイエスさまを神さまとして信じ、喜んでクリスチャンとして、歩んでいっていきたいと思います。

(辻　幸宏)

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 21章17節

「主よ、あなたは何もかもご存じです。
わたしがあなたを愛していることを、
あなたはよく知っておられます。」

5月4日　　弟子たちを立ち上がらせるキリスト　　幼稚科

〈ねらい〉

復活のイエスさまからの愛の呼び掛けを聞いて、こんな私でもイエスさまを好きになってよいのだということを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

「イエスさまがいちばん」という子ども賛美歌があるのをご存知でしょうか。その一部を紹介します。

どんなに　さびしいときにも
どんなに　かなしいときにも
イエスさまがいちばん
イエスさまがいちばん！
たとえそれが　どんなばあいでも
イエスさまがいちばん
イエスさまがいちばん！（なあぜ？）
だって　イエスさまは　かみさまだもの
だって　イエスさまは　かみさまだもの

私たちがどのような状況に置かれていても「イエスさまがいちばん」と賛美するのです。寂しい時、悲しい時、泣きたい時、叫びたい時、いじめられる時、苦しめられる時、お腹が空いた時、貧しい時、どんな時でも「イエスさまがいちばん」と子どもたちが神さまを賛美することができれば、こんなに素晴らしいことはないのではないでしょうか。信仰について、子どもたちに色々と語り伝える言葉を教師たちは持っていることでしょう。でも結局のところ、子どもたちが心から「イエスさまがいちばん」「イエスさまがいちばん大好き」と言ってくれたらそれでよいのではないかなと思うのです。

今回の箇所は、復活のイエスさまとペトロの「愛の対話」と呼ばれる箇所です。ペトロは、イエスさまを裏切ってしまったという罪の中で、なお苦しんでいました。イエスさまから「わたしを愛しているか」と問われても、「はい、誰よりも私はイエスさまを愛しています」などと自信を持って言うことなど到底できませんでした。イエスさまに対する自分の愛が如何に貧しく、また罪深いものであるのかを十字架の出来事をとおして思い知らされたからです。でもペトロはイエスさまのことが大好きでした。自分の口では「大好きです」と言えないけれども、自分のイエスさまに対する愛は弱いのだけれども、イエスさまがそんな私の思いをすべて知っていてくださるということに全てを委ねたのです。そして、ペトロは「わたしの羊を飼いなさい」というイエスさまの言葉を繰り返して聞くなかで、こんな私でもイエスさまは愛していてくださるのだ。赦していてくださるのだということを知ったのです。

私たちは自分のことをそれなりに深く知っています。自分がどういう性格で、どういう人間であるのかを。自分がいかに惨めで、また残酷な人間であるのかということも知っていることでしょう。だから、イエスさまを愛するに相応しくないのではないかと思っている子どもたちがいるかもしれません。本当はイエスさまを愛したいのに愛することができない自分の愛の貧しさや矛盾を覚えています。しかし、それでもイエスさまはあなたを受け入れてくださっているという、新しい自分の姿をここで見つけることができたら幸いです。

〈祈り〉

神さまを悲しませてしまうことの多い私ですが、それでもイエスさまのことが大好きです。もっとイエスさまのことが大好きになれますように、これからも神さまの大きな愛を教えてください。

5月4日　　弟子たちを立ち上がらせるキリスト　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」(ヨハネ21:17)

・あなた、とは誰で、わたしは誰ですか。

→あなたはイエス様。わたしはペトロ。

・以前ペトロが3回語った事は何ですか。

→3回イエス様を知らないと言った。

・今回イエス様はペトロに3回何と尋ねましたか。

→「私を愛しているか」。

・今日の暗唱聖句のペトロの答えは、何回目に尋ねられた時の答えですか。

→3回目。

2. 説教を分かち合おう。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・イエス様はペトロに、「三度知らないと言われてとても傷ついたよ。どうしてそんなこと言ったの？」と聞かなかったのはどうしてでしょう。

→三度知らないとペトロが言ってしまう弱さを、イエス様はすでにご存じだったからです。そしてペトロは自分の弱さを、イエス様がすでにご存じであったことを知りました。

・聖書では、「愛する」という言葉は「従う」とか「仕える」という意味を含むことがあります。イエス様の語った、「あなたは私を愛しているか」を、「あなたは私に従うか」に置き換えて読み直してみましょう。

2-2. ペトロのことを考えよう。

・復活したイエス様のことを3回知らないといったのはついこのあいだの話でした。イエス様に会った時はどんな気持ちになったでしょうか。

→復活なさったことの驚きと嬉しさ、そして3回知らないと言った罪悪感。

・ペトロがイエス様とお話しできたのは、どちらから話しかけたからですか。

→イエス様。イエス様が歩み寄って下さいました。

・「あなたはわたしを愛しているか（わたしに従うか)」と聞かれた時、ペトロはどんな気持ちになったと思いますか。

→従えなかったことを悔い改めようという思いと、これから従おうという決心。そして、もう罪を犯さず、どんなときもイエス様を信じて、証ししていこうという思い。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・ペトロは、イエス様に「まぁ、無理もないさ、気にするな。いいよいいよ」と罪を気にしないようには言われず、「もうお前はダメだ。バカじゃないか」と裁かれることも言われませんでした。ペトロが言われたように、「あなたは私を愛しているか（従うか)」と、私たちが同じようにイエス様に言われたらどう思いますか。

→イエス様に罪を赦してもらえた感謝と、従いたいという気持ち。

・今日のお話から、イエス様はクリスチャンをどうなさろうとしていますか。

→クリスチャンが自分の弱さのためにイエス様に大きな罪を犯しても、イエス様はペトロを励ましたように、クリスチャンがイエス様に従えるように励ましてくださるということ。

・ペトロは自分の罪を恥じてイエス様の前から逃げましたか？

→逃げませんでした。イエス様と向き合って語り続けました。私たちも、罪のために恥ずかしくてイエス様から離れていくのではなく、一緒にいようとするなら必ず罪は赦され、イエス様に従えるように励まされます。

3. おやつ

小さなお芋をそのままオーブンで焼いておく。食べる前にお友だちに祈ってもらう。

5月11日　弟子たちを派遣するキリスト　教理説教のための聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 28章16〜20節
参照教理問答　子どもカテキズム　問10
ウェストミンスター小教理問答　問6，94

〈聖書テキストの解説と黙想〉

①大宣教命令

マタイによる福音書の最後の段落は「大宣教命令」とよばれる箇所である。キリスト教会はイエス・キリストの昇天から2000年以上にわたって宣教活動をしてきた。キリスト教会が宣教(伝道)を行うのは自らが救われた恵みを人々に伝えたいという内的な動機に基づくことはもちろんであるが、その一方でイエス・キリストの厳粛なご命令であることを忘れてはならない。命令というと重く感じるかもしれないが、「すべての民をわたし(キリスト）の弟子に」(19節）することはキリストの願いである。弟子になるための具体的な方法として、洗礼を授けることをキリストは定めたもうた。その洗礼は、父と子と聖霊の名によって授けられる。この三者（三位格）による神の存在形態を教会では長い間、三位一体と呼んできた。聖書によって啓示されている神様は三位一体の神である。そして、三位一体なる神はご自身において交わりを持っている。言い方を変えるならば、神は決して孤独ではないのである。父・子・聖霊なる神は交わりを持っておられ、人間に対しても交わりを求めておられる。洗礼を受け、弟子になるということは一方的な上下関係に入れられるのではなくて、神様との交わりに入れられるということにほかならない。こうして、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」というキリストの約束が現実のものとなる。このように、大宣教命令とは、ただ一方的に神を信じるように人々に伝えなさいという扇動ではなく、父と子と聖霊なる神の交わりの中に入りなさいという恵みの招きなのである。そして、交わりに入れられたものは聖霊がキリストによって送られたように、この世界へと派遣される。使徒言行録は、いうなれば聖霊によって派遣された弟子たちの物語であり、その物語は今現在も教会の物語として紡ぎだされている。

②聖書解説

〇16節

16節によれば、11人の弟子たちは復活の主に会うためにガリラヤに集合していた。これは、主イエス自ら最後の晩餐の後に弟子たちに向かって「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」（マタ26:32）と予告していたことを受けてのことであろう。そして、ガリラヤの山に登った。山はマタイ福音書において重要な言葉である。イエス・キリストがご自身の権威(7:29)によって教えた説教は山の上からなされたものであった。また人々を癒し、四千人に食べ物を与えたのも山の上からであった（15:29)。栄光の姿に変貌されたのもまた山の上であった（17:1)。このように、主イエスは山の上からご自身の栄光をあらわされた。山は一つのしるしである。そして、主イエスは天に昇られる前にまたしても山の上から弟子たちに語りかけた。それは、山上の説教のように、弟子たちに与えられた主イエスからの権威ある教えであった。主なる神は、モーセにシナイ山から契約の書（十戒）を授けた（出19:3)。どうように、キリストもまた弟子たちに神の約束を授けたのである。

〇17節

不思議なことに、山にまできてそして実際に復活のキリストと面会してひれ伏して(礼拝して)いるのに疑うものがいたという。もちろん11人の弟子たち全員が疑っていたと考えることはできないが弟子たちの中に疑いの心を持っていた者がいたことは間違いない。疑うとは、「2つ」という意味の言葉であり、心が半信半疑の状態のこと。生前自らの復活について弟子たちに3回にわたり予告してきたが、そうした弟子たちでさえ復活を信じることは容易ではない。

○18節

疑う弟子たちもいたが、そのような弟子たちに主イエスご自身が近づいてくださった。疑いの中にいたとしても、キリストがいつも近づいてくださり、助けてくださる（マタ14:22～33参照）。疑うとは、キリストを完全に信じることができないことである。これは、キリストと距離があるということ。その距離を埋めることができるのはキリストがこちらに近づいてくださり、手を差し伸べてくださるからである（14:31）。キリストは疑う弟子の近くによってくださり、厳かに宣言なさる。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」。天と地とはヘブライ的表現である。2つの極端を並べて、一つの概念をしめす（天と地、善と悪など）。天と地という言葉であらわすのは全世界ということであろう。天と地という言い方はマタイ福音書では16:18以下及び18:18に登場する。権能は力であり、ことがらを実現させる力である。主イエスは権威あるものとして教えた(7:29)。律法学者やファリサイ派がいわば律法の権威にしばられていたのに対して、キリストはご自身の権威で人々に教えたのである。そして、主イエスは地上で罪を赦す権威を持つ（9:6）。キリストの権威の上に建てられた教会は陰府の力(死)も対抗できない。このように、マタイ福音書はイエス・キリストというお方が、天と地の一切の権能を持っているお方であると証ししている。それはご自身の権威で教え、罪を赦し、死に打ち勝つ力である。

○19節

「すべての民」とは諸国民のこと。全世界の権能をお持ちのイエス・キリストから、全世界に派遣されるのである。「父と子と聖霊の名による洗礼」の意味については本稿①を参照されたい。この文言は新約聖書中においてこの箇所しか見られない言い方である。プロテスタントでは、礼典とよばれる儀式を洗礼と聖餐の2つに定めた。洗礼の制定句としてもこの箇所は重要である。

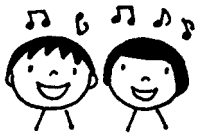
○20節

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という句に注目する。マタイ福音書においては冒頭の1章23節で「神は我々とともにおられる」すなわち「インマヌエル」の誕生が予告されている。さらに、キリストはご自身の名によって集まる時には共におられると約束してくださり(18:20)、そして最後に世の終わりまでキリストが共にいてくださると語られた。こうしたインマヌエルの出来事が、神との交わりに生かされるときに起こるのである。

〈子どもたちに対して〉

教会学校に集う子どもたちの多くはクリスチャンホームの子弟として育っていると思われる。そうした子どもたちにとって、神様がいるということは当たり前のことかもしれない。しかし、幼児洗礼を授けられ、教会において育てられているということは父・子・聖霊なるお方との交わりに入れられていることを忘れてはならない。このお方との交わりに生かされ、世界へと派遣されていく。それが、キリストの弟子としての使命である。

（小宮山裕一）



5月11日　弟子たちを派遣するキリスト　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書 28章16〜20節
子どもカテキズム　問10

〔単元のねらい〕

いわゆる大宣教命令の箇所であり、マタイによる福音書の締めくくりの箇所である。弟子たちは復活のキリストにまみえ、聖霊をうけ、世界へと散らばった。これは罪の赦しのためにこの世界にキリストが派遣されたこと、救いの実現のために聖霊が派遣されたことに通じるものである。キリスト者はこの世界に派遣される。それは狭い意味での伝道をするためではない。この世界においてキリストの証人として世の終わりにいたるまで歩むのだ。子どもたちには、そうした派遣意識の根底にあるいつも共にいるキリストというメッセージを心に刻んでもらいたい。

いつも共にいてくださるイエス様

今日は、復活されたイエス様のお話しをしたいと思います。

イエス様は、十字架につけられて3日後に復活しました。新しい肉体をもって、再びお弟子さんたちの前にあらわれたのです。お墓のそばで2人の女性の前に現れ、部屋の中に現れてくださったのです。そして、40日間お弟子さんたちと過ごしました。そして、最後にイエス様はお弟子さんたちをガリラヤに集めて、とても大切な約束をお弟子さんたちにあたえたのです。そして、イエス様は天に昇られました。実は、イエス様は前もってはっきりとガリラヤでお弟子さんたちに会うことをお語りになっていたのです。「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」(26:32)。さらに、復活なさったとき、み使いによっても同じことが告げられています。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」(28:7)。

お弟子さんたちは約束を信じて、ガリラヤの山に登ります。そして、復活されたイエス様が目の前に来てくださったのです！　お弟子さんたちの反応はどうでしょうか。3つの反応があると思います。復活したイエス様と会うことができたという喜びの反応。本当にこのお方が復活したイエス様だろうかという疑いの反応。そして、イエス様の弟子だという理由で人々から迫害されないだろうか、という不安に思う反応。この3つです。それぞれのお弟子さんたちが、心の中で、喜びや不安を持っていたのです。お弟子さん達が不安に思っていたのも無理はありません。エルサレムに入られてから、逮捕、逃亡、裁判、十字架という死刑、そして復活と、短い間にさまざまなことが起こっていたからです。頭の中は混乱していたでしょうし、生きた心地がしなかったのではないでしょうか。そのようなお弟子さんたちに、イエス様はご自分から近づいてくださったのです。

イエス様は、お弟子さんたちに最後のメッセージを語ります。そのメッセージはお弟子さんたちの心をうれしくさせました。そしてお弟子さんたちの心を温かくするものです。それは、イエス様が「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とお語りになったからです。この言葉をどこかで聞いたことがないでしょうか。それはクリスマスの時のお話です。「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」(マタイ1:23)。聖書は最初から、イエス様がこの地上に来てくださったのは神様がいつも私たちと共にいてくださるということのしるしだと伝えています。人間は神様から離れてしまうこともある。しかし、神様は決して

信じるものから離れることがない。いつも共にいる。これが神様からの約束です。

さて、お弟子さんたちこのイエス様の言葉を受けてあちこちに出かけていってイエス様のことを宣べ伝えました。それは、使徒言行録を読むと、お弟子さんたちが大変な目に遭いながらも一生懸命イエス様を伝えていたことがわかります。お弟子さんたちはイエス様のことを知らないといったり、イエス様の言葉をちゃんと理解できなかったり、決して完璧なお弟子さんではありませんでした。そんなお弟子さんたちが、あちこちに出かけていっていろんな人からいじわるをされてもあきらめることなくイエス様を伝えたということは驚くべきことです。どうしてお弟子さんたちはそんなにかわってしまったのでしょうか。それは、イエス様が復活してくださり、いつも一緒にいるという約束を心から信じたからです。だからこそ、イエス様のことを大胆に宣べ伝えることができたのです。そして、実際に、イエス様はお弟子さんたちに必要な助けをいつもくださったのです。

私たちは実際にこの目でイエス様を見たわけでも、イエス様から直接に御言葉を頂いたわけでもありません。しかし、いつもイエス様が一緒にいてくださるという約束は今を生きる私たちにとっても重要です。イエス様は、天に昇られて、そして聖霊なる神様を私たちに送ってくださいました。

聖霊は私たちといつも一緒にいてくださり、イエス様と一人一人をつなげてくださるお方です。このお方が助け主として私たちに与えられています。

お弟子さんたちが力強くイエス様を証ししたように、この聖霊なる神様にあってイエス様の約束は実現したのです。そして、聖霊なる神様の力によって私たちもまたキリストの弟子として歩むことができるのです。

イエス様は天と地の一切の力をもっているお方です。このお方がいつも私たちと一緒にいてくれる。この約束を心から信じましょう。そしてお弟子さんたちがイエス様から遣わされたように、学校や友だちのところに、遣わされたいと思います。

（小宮山裕一）

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 28章20節

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

5月11日　弟子たちを派遣するキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまは、いつも私と共にいてくださるお方であることを知る。

〈展開例〉

「神さまはあなたと共にいる」という言葉は、教会の中でよく聞く言葉の一つです。また、「私と共にいてください」というふうにお祈りの言葉にしている人も多いことでしょう。大きくなるにつれて、大人たちから「このくらい一人でやりなさい」「甘えるな」と厳しい言葉をかけられることがありますが、そのような中で「あなたはひとりぼっちではないよ。イエスさまがいつも一緒だよ」と聞くと、「自分は見捨てられていないのだ」「一緒に手を取って歩んでくださる方がいるのだ」と思って安心することができるのです。

このとき、弟子たちは皆、イエスさまの復活を信じることができていたわけではありませんでした。復活したイエスさまにお会いし、ひれ伏して、礼拝を捧げながらも、なお「疑う者もいた」というのです。でもそういう弟子たちのもとに、ここでもイエスさまご自身の方から「近寄って来て」くださったのです。かつて弟子のひとりペトロは、ガリラヤ湖の上で、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」とイエスさまから叱られました。「安心してわたしのもとに来なさい」というイエスさまの言葉を信じて湖の上を歩いて渡り切ることができなかったのです（マタイ14:22〜33）。イエスさまの招きの声を聞いて、イエスさまのもとに向かうその道の中で、様々なことが起こります。ペトロが湖の上で、強い風が気になって沈みそうになったように、私たちも自分を支配しようとする大きな力が気になって溺れそうになるのです。どれだけイエスさまの恵みを知っても、なかなか自分の足でイエスさまのところに行くことができない自分にがっかりすることも少なくないでしょう。

でも、そんな私たちに手を伸ばしてくださる方がいます。近寄って声を掛けてくださる方がいます。それがイエスさまです。私がイエスさまのところに行けなくても、イエスさまの方から私のところへ近づいてくださる。だから私たちはイエスさまと共にいることができるのです。そしてイエスさまは宣言されます。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」と。「神さまがお造りになったこの世界の中でいちばん力を持っているのはわたしだ」とそうおっしゃるのです。

私たちが生きている世界には色んな力や権威があり、その下で生きています。自分のコンプレックスや悩み、あるいは神さまのことがなかなか信じられないという思いなども、私たちを支配する力の一つでしょう。でも、この世のどんな力も、自分の中にあるどんな力も、罪も死も、イエスさまの力に勝つことはできません。

この復活のイエスさまの力に支えられて、歩むことができます。その中で疑うことがあるかもしれません。でもがっかりしないでください。こんな自分では、きっとイエスさまに叱られるから、「もう教会なんか行かない」なんて言わないでください。信じられなければ、信じられないままでよいのです。疑ってもよいのです。その自分の心のままで、「教会で会おう」と招いてくださるイエスさまのもとに来てください。そうやって、イエスさまの招きの声を聞き続ける時に、「イエスさまは共にいる」ということが分かります。それも教会に行く日曜日だけではなくて、学校や家での生活の中にも、イエスさまが共にいてくださることを知るようになるのです。

〈祈り〉

どのようなときも、イエスさまが共にいて、助けてくださることを感謝します。これからも、神さまの声を聞き続けることができますように導いてください。

5月11日　弟子たちを派遣するキリスト　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」マタイ28:20b

・4月27日の分級展開例の「1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう」参照。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・イエス様は天に昇りました。天に昇ったということは死んだということですか？

→イエス様は生きたまま、天に昇られました。今も天において生きて働かれておられます。

・イエス様が天に昇る前にお弟子さんたちに最後に命じたことは何ですか。

→すべての民をイエス様に従う弟子とすること。そのために、父と子と聖霊の名によって洗礼をさずけ、お弟子さんたちに命じていたことをすべて守るように教えること。

・イエス様が地上にいる間にお弟子さんたちに命じておいたことは何がありましたか。

・イエス様は、「世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」と言ったのは、大丈夫だよ、と言っているんですね。じゃあ、何が大丈夫だよといっているんでしょうか。

→それは、世界へ出て行ってイエス様をお伝えすることです。そのことを、「すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに……教えなさい」と言っているんですね。そうできるようにイエス様は、「大丈夫だよ、わたしがついているよ」と教えてくださっています。

・先生は幼稚園の頃、スイミング教室で、足の届かない深いところに、一人ずつとびこまないといけない時がありました。先生がプールの中から「ちゃんと助けるから大丈夫」といってくれたので、恐かったけど勇気をもらって思い切って飛び込みました。足はつかないけども、ちゃんと水から引き上げもらいました。繰り返して飛び込む内に、「ちゃんと助けてくれる」という信頼感がどんどん強くなっていきました。

　みんなは、どうでしょう。自分では恐いと思ったけれどそばにいた大人や友達だちが助けてくれたことはありますか。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・お弟子さんたちは、すべての民を自分の弟子ではなくイエス様の弟子にしなさい、と言われました。この違いは、どんなところに表れますか。

→自分の言葉を伝えるか。イエス様の言葉を伝えるか。

・イエス様が天に昇られてしまいましたが、その後、お弟子さんたちはイエス様の力強い働きを経験しました。それは何ですか。

→イエス様が送られた聖霊が注がれて、イエス様の御業を力強く語ることができるようにされました。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・イエス様のことを誰かにお伝えしたくても、不安になることがあるかもしれない。どうしたらいいだろうか。

→お弟子さんたちのように、私たちも聖霊に満たされるように祈りましょう。聖霊は、イエス様がなさったことや教えてくださったことを私たちも力強く語れるように励ましてくださいます。

・イエス様は私たちと共にいるのですか。

→イエス様は、送られた聖霊を通して私たちと共におられます。イエス様の力が聖霊を通して私たちに注がれるのです。だから聖霊の導きを求めて祈りましょう。聖霊はイエス様の言葉を思い出させてくださいますし、その意味が分かるように助けてくださいます。

3. ゲーム

100円均一のダーツ。点数の付け方を大人はちゃんと勉強してきちんと教えて上げる。

5月18日　キリストの証人となる　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 24章36〜49節
参照教理問答　ウェストミンスター大教理問答　問2〜5（特に問4）
ハイデルベルク信仰問答　問21
ジュネーブ教会信仰問答　問300〜308（特に問303）

〈聖書テキストの解説と黙想〉

36節「こういうことを話していると」の主語は弟子たち。話していた内容は、直前の32〜35節に記されている。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」、「本当に主は復活して、シモンに現れた」、「道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった」という人の話を聞いて話し合っていたのだが、その彼らの真ん中にイエスご自身が立たれると、「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」（37節）。人は、聖書の説き明かしを聞いて心が燃える体験をした人の話、復活の主が現れてくださった人の話を、自分の救いと関係なく聞いているときには、生きておられるイエス・キリストに直接現れられると、恐れおののいてしまうものだ、ということに気づかされる。

イエス・キリストは「わたしの手や足を見なさい」（39節）、「手と足をお見せになった」（40節）、「彼らの前で（彼らの目の前で）食べられた」（43節）とあるように、生きた人間としてのリアリティをもつ姿を、弟子たちの目の前に示された。イエス・キリストは、私たちが主とそのようにリアルに出会うことを望んでおられる。

同時代に生きていない私たちには、イエス・キリストはどのようにご自身をリアルに現してくださるのだろうか。それが44節に書かれている。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」とは、「わたしのことは旧約聖書に全て記されているから、読んで悟りなさい」との促しであることは、45節で、イエス・キリストが「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」くださっていることからわかってくる。

48節に「あなたがたはこれらのことの証人となる」とあるが、私たちがキリストの証人となりうるのは、弟子たちのように目撃したからではなく、旧約聖書に書かれているイスラエルの救いがイエス・キリストにおいて全て成し遂げられたということを、心開かれてはっきりと知ることによる。イスラエルの救いが記されている旧約聖書を、自分の物語として読むことによって、私たちは一人一人、自分たちの罪深さを知り、悔い改めへと導かれ、イエス・キリストにおいて成し遂げられた救いの道を示される。47節の「罪の赦しを得させる悔い改め」という言い回しは3:3でも出てきており、ルカ福音書が初めから終わりまで「罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝えようとして書かれたことがわかる。

旧約聖書を読んで理解することは、自力ではできない。そのために49節でキリストは聖霊を送るという約束をくださった。49節は原文を見ると、「見よ、わたしが送る」と書きだされている。そしてそれに対比させるようにして「あなたがたは都にとどまっていなさい」となっている。13〜35節に出てくる二人の弟子は、イエス・キリストが死んでしまったので、都エルサレムを離れて、故郷であるエマオに戻ろうとしていたのではないかと言われている。そのように、エルサレムを離れようとしていた弟子たちに対して、「都にとどまっていなさい」と言われている。弟子たちは、この先、生まれ故郷に戻って、元のように生きるのではなく、キリストの証人として「あらゆる国」に遣わされようとしているからである。

「あなたがたに平和があるように」（36節）という言葉から始まった復活のイエス・キリストとの「出会い」は、弟子たちの心を、「恐れおののき」（37節）から「喜び」（41節）を通り越して、「大喜び」（52節）の状態に変えた。イエス・キリストに旧約聖書を示されて、リアルにイエス・キリ

ストに出会うと、このような喜びにあふれさせていただけて、平和のうちに歩むことがゆるされる。ここでイザヤ書55章の全体を開いて読んでいただきたい。そうすれば、「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに赦してくださる。（中略）わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている。（中略）わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。あなたたちは喜び祝いながら出で立ち、平和のうちに導かれて行く」と書かれていることが、弟子たちの姿、ひいては私たち自身の姿に重なってくることがわかるだろう。

このように私たちは、「聖書に書かれていることは本当だ」ということを証しするように召されているのである。こののち弟子たちは、約束されていた聖霊をいただいて、大胆にイエス・キリストを証ししはじめる。そのときに旧約聖書にもとづいて語っていることを無視してはならない。

〈参照教理問答について〉

ハイデルベルク信仰問答問21は次のとおり。

問21　まことの信仰とは何ですか。

答　それは、神が御言葉において
わたしたちに啓示されたことすべてを
わたしが真実であると確信する、
その確かな認識のことだけでなく、
福音を通して聖霊がわたしのうちに起こしてくださる、
心からの信頼のことでもあります。
それによって、他の人々のみならずこのわたしにも、
罪の赦しと永遠の義と救いとが神から与えられるのです。
それは全く恵みにより、ただキリストの功績によるものです。

ジュネーブ教会信仰問答では、「信仰者の交わりの中で救いの教理が説き明かされる集い」で御言葉が聴かれること（問答304）、「彼ら（牧師）の口を通して」（問答307）ということが記されている。礼拝の場で聖書の説き明かしを聴くことの重要性が確認されていることは、大変興味深い。

〈子どもたちに対して〉

たとえ子どもであっても、聖霊なる神は、その心に働きかけて、罪を自覚させ、悔い改めへと導かれる。イエス・キリストを救い主として受け入れさせてくださる（私は7歳の時にそれを経験している）。

また聖霊なる神は、啓明の光を子どもにも与えてくださり、それまで何度となく聞いてきた聖書の話の本当の意味（奥義）を知らせてくださる（私は14歳の時からそれを経験している）。そのときの気持ちはまさに、「聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」（ルカ24:32）とあるとおりだった。

契約の子は、明確な回心の体験を持たないまま成長するかのように言われており、実際そのように感じている人が多いようだが、私に関して言えば、7歳の時だけでなく、信仰告白後しばらく経って30代のときに、ペトロが泣き崩れるように、「主を裏切ってしまった」と激しく涙する体験を与えられたし、また、長い信仰生活の歩みを経て、70歳を超えてから、涙の体験を与えられた方をも知っている。だから、契約の子であるかないかにかかわらず、人は必ず、涙の体験を持ってイエス・キリストに出会うことになっていると思う。

大人になってから信仰を持った人には理解し難いことかもしれないが、子どもの信仰・子ども自身とキリストの関係は存在している。

子どもたちには、字が読めるようになる前から、旧新約にわたる聖書の物語を何度も聞いてほしいし、また、自分でも読んでほしいと思う。子どものときほど、悪いことをして叱られる、ということがあると思うが、そのなかでイエス・キリストの眼差しを感じ、赦しを体験してほしいと思う。中学になると、日曜学校から離れるケースが多いと思うが、10代の時にこそ、聖書の本当の意味が知らされるので、教会に通い続けてほしいと思う。それらの営みの中に聖霊なる神が働かれて、子どもたちは、立派なキリストの証人になっていく。

（赤石めぐみ）

5月18日　キリストの証人となる　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 24章36〜49節

〔単元のねらい〕

次の3点を子どもたちに伝えたい。

・復活して今も生きておられるイエス・キリストは、私たち一人一人に、はっきりと出会ってくださるということ。

・そのためには、聖書（とりわけ旧約聖書）にイエスさまのことが書かれているのを読んで知ることが大切だということ。それを知るには、聖霊の助けが必要であること。また、礼拝の場での説き明かしを聞く必要があること。

・「キリストの証人となる」とは、イエスさまについて、また自分の救いについて、聖書に書いてあることは本当だ、ということを人に伝えること。

メシア（キリスト）について、聖書に書いてあることは本当です

エマオから帰ってきた二人の弟子や、エルサレムに残っていた11人の弟子たちが、イエスさまが復活なさって自分たちに現れてくださった、ということを話し合っていました。イエスさまは、十字架の上で死んでしまわれ、お墓に葬られたのに、イエスさまが現れたって、どういうことなのかなぁ、すぐに見えなくなっちゃったけど、ほんとうに生きていらっしゃるのかなぁ、と、弟子たちはよくわからなくて、話し合っていました。

そうやって話し合っているときに、イエスさまが本当にそこの場所に現れられました。急に真ん中に立たれたからでしょうか、弟子たちは、イエスさまのことについて話し合っていたのに、本当にイエスさまが現れると、驚いて、恐ろしくなってしまいました。

怖がっている弟子たちに、イエスさまは、「わたしの手や足を見なさい」とおっしゃって、見せてくださいました。「何か食べ物はあるか」とおっしゃって、差し出された焼き魚を、みんなが見ている前で食べられました。このようなイエスさまの姿を見て、弟子たちはみんな、本当にイエスさまは復活して、生きておられるんだ、ということがよくわかりました。

イエスさまは、ご自分が弟子たちの前に姿を現したときに、弟子たちが怖がった理由を知っていました。弟子たちは、イエスさまがおっしゃった言葉がわからないと、すぐ議論（話し合い）をするのです。イエスさまはもうずっと前に、「わたしは必ず多くの苦しみを受け、殺され、三日目に復活する」と弟子たちに話してくださっていました。でも、弟子たちは何度聞いても、そのことがわかりませんでした。本当にそのことが起こったその日、イエスさまが現れてくださったこのときも、弟子たちは話し合っていましたね。イエスさまの言葉は本当だ、必ずその通りになる、ということを、弟子たちはちゃんと信じていなかったので、本当にイエスさまが生きて現れられたとき、怖くなってしまったのです。

今みんなも、ここで聖書のお話を聞いています。イエスさまが急にみんなの真ん中に立たれたらどうでしょう？　びっくりするかな？　うれしいかな？

イエスさまは、弟子たちに、ちゃんと聖書を読むように、と教えられました。44節に「モーセの律法と預言者の書と詩編」とあるのは、旧約聖書のことです。「旧約聖書には、わたしのことが書いてあるんですよ。そして、わたしについて旧約聖書に書いてある事柄は必ずすべて実現するんですよ」と言われました。新約聖書にイエスさまのことが書いてあるのはわかりますが、旧約聖書

のどこにイエスさまのことが書いてあるのか、わかりますか？　それは、イエスさまが弟子たちに教えてくださったように、私たちも、イエスさまのように聖書を知っている人から教わらなければなりません。だから、礼拝の場で、牧師先生が聖書の説き明かしをしてくださるのを聞く必要があります。また、自分でも、旧約聖書を何回も何回も読んでみてください。そうすると、神さまがどれだけご自分の民を愛して、救おうとされているか、また預言者たちがどれほど、その救い主（メシア）を待ち望んでいるかがわかってきます。そして、イエスさまこそが、神さまが遣わそうとしている救い主、預言者たちが待ち望んでいた救い主だったんだ、ということがわかってきます。

小さいときには、神さまが世界を造られた物語、ノアの箱舟の物語、アブラハムの物語、イサクやヤコブ、ヨセフの物語、出エジプトの物語、ギデオンのお話、サムソンのお話、ダビデ王のお話、ソロモン王のお話、エリヤやエリシャの物語、ダニエルの物語……というふうに、別々の物語がいっぱい入った本のような気がするかもしれません。初めはそれでよいのです。一つひとつの物語をよく覚えていてください。そのなかで神さまがその人たちとどんな約束をされたか、覚えていてください。やがて、小学校6年生くらいになって歴史を習い始めたら、全部のお話がつながっていることがわかってきます。また、聖霊なる神さまがみんなの心に働きかけてくださって、聖書の意味がもっと深くわかって、旧約聖書に書いてある事柄全部がイエスさまとつながっていることがわかるようになります。「ああ、そういうことだったのか！」という発見をたくさんできるようになりますから、「その話はもう何度も聞いたからいいや」などと思わないで、大きくなっても、教会に来て聖書のお話を聞くことをやめないでください。

イエスさまが、旧約聖書の中で神さまが約束されていた救い主、預言者たちが待ち望んでいた救い主だ、ということがみんなにわかってくる頃、イエスさまは、必ず、弟子たちにご自分の手や足や魚を食べるところをお見せになったのと同じような実感を、私たち一人一人に味わわせてくださいます。イエスさまの手や足には十字架につけられたときの釘の跡があったはずです。それを見せられたら、みんなはどう思うでしょう？　その釘の跡は、みんなの罪の身代わりになって十字架にかかってくださったから残ってしまった釘跡です。それを知ったら、みんなはきっと、「あぁ、イエスさま、ごめんなさい」と思うでしょう。

弟子たちもそうでした。弟子たちはイエスさまが十字架にかけられるとき、みんなイエスさまを見捨てて逃げてしまいましたから、「ごめんなさい」と言いたかったのでした。よみがえって弟子たちの前に現れてくださったとき、イエスさまは、弟子たちのことを責めませんでした。そうではなくて、「あなたがたに平和があるように」と言ってくださいました。「あなたは赦されていますよ。だから安心していいんですよ」と言ってくださったのです。「悪いことをしてしまったなぁ」と思っているときに、こうやって赦してもらえると、本当にほっとします。イエスさまは、私たち一人一人に、この赦しを与えてくださいます。イエスさまがこのように赦してくださることを信じた人は、安心して、元気いっぱいに生きていくことができるのです。

みんなは、聖書を読んでこのことを知ります。そして、イエスさまについて、また、自分の救いについて、聖書に書いてあることは本当ですよ、ということを、お友だちや家族の人にも伝えたくなると思います。ぜひそうしてください。

聖霊なる神さまが、小さい時から、みんなの心に働きかけてこられます。教会に行こうという気持ちにさせて、聖書に書いてあることがわかるようにしてくださいます。みんなの心の目を開いて、イエスさまの手足の釘跡が見えるようにしてくださいます。教会の皆の前で「イエスさまをわたしの救い主と信じます」と告白することができるようにしてくださいます。他の人にイエスさまのことを伝えるときに、言うべき言葉を教えてくださいます。聖霊なる神さまの働きかけがあるかどうか、いつも気にしてみてください。（赤石めぐみ）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 24章48節

あなたがたはこれらのことの証人となる。

5月18日　キリストの証人となる　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまは、私たちの心を開いてくださり、聖書が語ることが分かるようにしてくださることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

ここでイエスさまがしてくださったことは何でしょうか。「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた」（ルカ14:45）とあるように、私たちの「心の目」を開いてくださり、聖書のことがよく分かるようにしてくださるということです。「肉の目」ではなく、「心の目」で聖書を見て、聞いていくことが求められています。

しかも、私たちが心を開くことができるのは、自分の力ではなく、神さまご自身が開いてくださるのです。だからこそ「神さま、私の心の目を開いてください」「イエスさまのことが分かるようにしてください」という祈りの言葉を、幼い頃から覚えることができたら幸いです。教会学校で、聖句はよく暗唱しますが、「主の祈り」を除いてあまり「祈りの言葉」を教えて、それを覚え、一緒に祈るということがあまりないのではないかと自分自身のことを含めて反省しています。神さまとの交わりに生かされている私たちにとって、御言葉を聞くことと共に、私たちもまた神さまに語りかけ、対話をしていくことなしに健やかな信仰を歩んでいくことはできません。そのような意味で、今日の箇所は、神さまに祈り、語りかけるべき大切な言葉がここにも示されているのではないでしょうか。「私の心の目を開いてください！」。

また、私たちが神さまと対話するということは、神さまにお会いするということでもあります。いったいどうしたらイエスさまにお会いすることができるのでしょうか。子どもたちの中には、直接イエスさまのお姿を見てみたい。そのような仕方でイエスさまにお会いしたいと願っている子もいることでしょう。でも、イエスさまに出会うというのは、直接自分の目でイエスさまを見ることではありません。イエスさまの弟子たちを含め、地上でイエスさまを見た人がすぐに信じられたわけではないのです。それどころか十字架につけてしまいました。イエスさまを裏切って逃げて行った人も多くいました。だから、直接イエスさまを見ることが、イエスさまに出会ったことや信じることができることに必ずしもつながるわけではないのです。

そもそも、今、イエスさまを信じている人たちは誰も直接イエスさまを見た人はいないのです。でも、ずっと教会はイエスさまを信じてきました。これはとても不思議なことです。「見ないのに信じる者は幸い」（ヨハネ20:29）とイエスさまがトマスに語られたように、２千年の間ずっと教会の人たちはイエスさまがお語りになった幸いの中に招かれ続けてきました。

教会学校の教師たちも、この幸いの中に招かれたのです。そして今度は、子どもたちを、イエスさまを信じる幸いの中に招く務めに召されているのです。時に心に疑いを持ったり、悲しみに心が閉ざされたこともあることでしょう。それゆえに、聖書を読めなくなったり、教会に通うのがしんどくなったこともあるでしょう。でも、その度に、イエスさまが私のところに来てくださり、平和を宣言してくださいました。心の目を開いて、イエスさまのことが、今よりももっと分かるようにしてくださいました。そのように、主の恵みを証言しつつ、あなたも私のようにイエスさまとお会いすることができると約束することができるのではないでしょうか。

〈祈り〉

私の心の目を開いてください。そして聖書に書いているイエスさまのことがよく分かるように導いてください。

5月18日　キリストの証人となる　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「あなたがたはこれらのことの証人となる。」ルカ24:48

・「あなたがた」とは誰でしょう。

→お弟子さんたち。

・証人とはなんでしょう。

→事実を証明する人。

・「これらのことの証人となる。」という意味は何ですか。

→イエス様について、「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」という出来事を目撃し、宣べ伝える人になるということ。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・復活したイエス様はご自分が復活したことを、お弟子さんたちにどういう方法で理解させようとしましたか。

→実際に現われ、お弟子さんたちの真ん中に立って見せました。さらに、お話をし、手や足を見せ、焼いた魚を食べて見せました。

・イエス様は、ご自分のことが書かれている本を何度も説明しました。その本はなんですか。

→旧約聖書。みんなが待ち望んでいたメシアがご自分だとわかってもらうために、何度もお話しをしてきました。

・イエス様は、誰がイエス様の証人になる、と言いましたか。

→「あなたがた」と言いました。どこかの誰かだけが、ではなく、イエス様は、今お話しを聞いているみんながキリストの証人となることを望んでいます。

・イエス様は聖書の言葉が本当だということを、どのようにして教えてくださいますか。

→イエス様の言葉を守ろうとするときに、聖霊によって守る力が与えられ、また聖霊の力が豊かに注がれることによって教えられます。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・復活したイエス様を見たときお弟子さんたちは何を思ったでしょう。

→亡霊を見ているように思った。

・亡霊を見ているようだったということは、復活を信じることができたのですか。

→まだ死んだままのイエス様を考えていました。

・お弟子さんたちは、イエス様が復活したことを受け入れることができても、なんで復活できたのかは最初はわかりませんでした。分かるようになった理由はなんですか。

→旧約聖書を通してイエス様のことが書かれていることを教えられて、気が付いたから（46節以降）。

・お弟子さんたちは、旧約聖書からイエス様が救い主だとわかったとき理解したとき、イエス様のこれまでの働きが何のためだとわかったのですか。

→罪から救い出すための働きであること。

2-3. わたしたちのことを考えよう。

・イエス様はお弟子さんたちをキリストの証人にしたように、聖書を読んでイエス様を信じるみんながキリストの証人になれるだけの恵みをくださっていますし、これからも与えてくださいます。そして将来、みんなはイエス様に直接お会いします。イエス様は、私たちが良く証しをしたかどうかご存じです。わたしたちの周りに、証しできる人は、どんな人がいますか。一人一人をあげてみましょう。

　そしてその人にお伝えできるようにみんなでお互いのために祈り合いましょう。

3. ゲーム

UNOやトランプ。一番負けた人は、罰ゲームで、勝った人たちのいいところを、一つずつほめなければいけない。

5月25日　教会を建てあげるキリストと聖霊　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 15章11〜17節
参照教理問答　子どもカテキズム　問 39，40，65
ウェストミンスター小教理問答　問39，40，41

〈聖書テキストの解説と黙想〉

この箇所は、直前の「ぶどうの木」の話と一連のものとして書かれている。主イエスがまことのぶどうの木で、父なる神が農夫（1節）、そして私たちは枝である（4節）。ぶどうの枝は木を離れては、実を結ぶことができない（4節）。しかし、木に繋がっていれば、豊かに実を結ぶ（5節）。この譬えによって、主イエスと繋がっていることの重要性が記される。繋がっているなら、「望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。」（7節）と言われている。主は弟子たちをこよなく愛してこられた。そして、その主の愛にとどまるように言われている（9節）。主の「愛にとどまっている」ことは、実際に「主イエスの掟を守ること」であると言われている（10節）。主イエスが父なる神の掟をことごとく守られたように。

11節 主が13章から始まる一連の告別説教を話されたのは、主の喜びが私たちの内にあり、私たちの喜びが完全に満たされるようになるためである（11節）。実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる（2節）。私たちは、主イエスの内にとどまっていなくては、実を結ぶことはできない（4節）。どのようにしたらとどまることになるのだろうか。主イエスの掟を守るなら、主の愛にとどまっていることになる（10節）と言われている。

12節 わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。 主イエスの掟とは、主が私たちを愛されたように、互いに愛し合うことである（12節）。主イエスへの愛は、互いに愛し合うことによって実証されるのである。しかも「わたしがあなたがたを愛したように」とは、十字架に掛かり、私たちの罪の身代わりに死んでくださった主のように、愛しなさいということである。

13節 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。 主イエスは、これからご自分が多くの者たちの為に十字架の上で死なれることを、念頭において話しておられる。主イエスは弟子たち、そして私たちのために命を捨てて下さった。これ以上大きな愛はないと述べられる。主は最高の模範を示して下さっているのである。主は私たち相互の間にも、ご自身の愛の性格と同じものを、求めておられる。とてもできそうになくとも、主がそのように互いに愛し合うことを求めておられ、それが主の御心であることを覚え、愛を願い求め、相互に愛することに励むべきなのである。

14節 主イエスはこの弟子たちのことを、もはや僕とは呼ばずに「友」と呼ぶと言われる。旧約においてはアブラハム、モーセ、預言者や他の敬虔な人たちだけが「神の友」と呼ばれている。新約においては、そのような言い方はここだけである。

15節 主が弟子たちを「友」と呼ばれたことは、主ご自身の主権においてなされたものである。主イエスが、父なる神様から聞いたことを全て、弟子たちに知らせられたから、と記されている。僕は命じられたことをするが、主人の心を何も知らない。しかし友人は友の心を良く知っているものである。主イエスが、父から聞かれたことを全て啓示されたので、弟子たちは、神の御心を知る者とされたのである。私たちは、弟子たちを通して伝えられた御言葉を通して、弟子たちと同じように、神様を知る者とされた。神を啓示なさった御子イエス・キリストにより、私たちは、神がどのようなお方であるかを知る者とされた。聖書の言葉を通して、神様が何を喜ばれるか、何を望んでおられるか、何を目的としておられるかを、私たちも知る者とされた。

それゆえ、この一連の御言葉を自分たちへの呼びかけとして受け取る。この弟子への命令は私た

ちへの命令でもあるのである。それゆえ私たちも、主の命令に、自由と喜びを持って従う者とされたい。

16節 あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。

「主が選んでくださった」との慰めに満ちた言葉。他でもない「主が」御自身の主権をもって選んでくださっている。それは、私たちが「出かけて行って」「実を結び」「その実が残るように」なるためであるとある。内省的になって自分の信仰の純粋性を求めるのではなく、出て行くことが目的とされている。出て行って実を結ぶこと、そして、その実が残るためである。広い意味で、神様の栄光のためになされる私たちの生き方全体が、私たちの結ぶ実でもある。しかし、狭い意味での伝道によって刈り取られる実、即ち、信じて救われる人たちが視野に入っていることは間違いない(マタイ28:19～20)。いずれにせよ、私たちの結ぶ実が「残ること」を主は想定されている。主はまた**「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」**とも語られる。主は、従おうとする私たちの祈りを聞いてくださるのである。主イエスは今日も、熱心にとりなしてくださっている。

17節 互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。12節で語られたことが繰り返される。「互いに愛し合う」ということは、主を信じる者の生き方の中心的なことなのだ。主の愛に導かれる時にのみ、私たちは友をぶどうの木である主イエスに結び付け、彼らに主イエスの賜物を分かち合う者になることができる。私たちも、主イエスご自身に繋がりつつ、主の愛に根ざして、初めて、互いに愛することができるようにされる。教会においては、主の愛に根ざした信仰者相互の愛が、互いを結び付け、教会を形成し、力付けるのである。私たち教会共同体がなすべき大切な主からの命令が、他でもない、「互いに愛し合うこと」なのである。教会共同体が互いに愛し合い、主にとどまりつつ、出て行くとき、必ず実を結ぶ。永遠に残る実を結ぶ。主が御自身の助けによって、伝道を進展させてくださるからである。

生まれながらの私たちには、互いに愛し合うことは、自分の力だけではできない。しかし、主が父なる神様のもとから、助け主を遣わしてくださる(26節)。このお方は真理の霊であられ、主イエス様について証しをなさる(26節)。この聖霊の助けと、力強い導きによって、私たちも神に従うことができるようにされるのである。

弟子たちは聖霊によって強められ、命を掛けて主の証人として歩み、教会が誕生した。そしてやがて新約聖書が記された。主イエスを信じる私たちも、聖霊の導きによって助けられ、力付けられ、教会の一員として生きる。主の命令に従うために、熱心に悔い改め、古い自分を捨てて生きる。それは、主の命令でもある。聖霊に導かれ、助けられて、教会において、互いに愛し合い、主の命令を守る。それが主イエス様の愛にとどまる生き方である。主の愛にとどまり、主の掟を守る者は、実を結ぶ者とされるのである。　(袴田清子)

5月25日　教会を建てあげるキリストと聖霊　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 15章11〜17節
子どもカテキズム　問65

〔単元のねらい〕
教会を建てるために十字架に赴かれた御心に従い、互いに愛し合う共同体を築こう。

互いに愛し合いなさい

主イエス様は、十字架にお掛かりになられる前に、弟子たちに特別に説教をなさいました。その中でイエス様は「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。」と話されました。

イエス様がぶどうの木で、父なる神様が農夫であられるのです。弟子たちはイエス様というぶどうの木の枝なのです。枝は木に繋がっていなければ、実を実らせることはできません。ましてや、木から離れると、実を結ぶことはできません。枝は、木から離れるとやがて枯れてしまいます。

このお話を用いて、イエス様は、弟子たちが主であるご自身に、繋がっていることの大切さをお話しになりました。

人がイエス様に繋がっており、イエス様もその人に繋がっていてくださるなら、その人は豊かに実を結ぶのです。弟子たちは、イエス様を離れては、何もできないからです（5節）。

イエス様は、「わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」（7節）。とも言われました。人がイエス様に従って豊かに実を結び、弟子となるなら、父なる神様が栄光をお受けになるのです（8節）。

主は、父なる神様が、イエス様を愛されたように、私たちを愛されてきたと言われます。そして主の愛にとどまりなさいと言われます（9節）。主イエス様は、父なる神様の掟を完全に守り通し、父なる神様の愛にとどまっておられました。弟子たちも、主イエス様の掟を守るなら、その愛にとどまっていることになると言われました（10節）。

イエス様の掟を守ることと、イエス様の愛にとどまることは、同じなのです。

イエス様の掟とは、どのような掟なのでしょうか。12節には「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」と記されています。十戒も神様からの掟です。しかしそれと共に、イエス様を信じる者同士が、「互いに愛し合う」ということが、イエス様の掟だと言われているのです。

そして、13節では、「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と言われました。つまり、イエス様ご自身が、まず、一番大きな愛を示されたことが述べられているのです。イエス様が示された最高の愛は、私たちの罪の身代わりに十字架にお掛かりになられることでした。イエス様は最高の愛で、私たちを愛し、最後までその愛を貫き通してくださったのです。そして、このイエス様の愛を模範として、互いに愛し合いなさい、と命じられているのです。その命令を行うなら、私の「友」だと言われています（14節）。

イエス様は、ご自身を愛する一人一人を愛しておられます。だから、私たちも、イエス様の愛しておられる一人一人を大切に思い、イエス様の愛によって、互いに愛し合うことを、願っておられるのです。

そんな愛は到底無理だ、と思う人がいるかもしれません。しかし、そのように愛し合うことが、イエス様の友となることなのです。自分にはできないなと思っても、主イエス様の御心を重んじ、神様の求められる愛を追い求め、お互いに愛し合うことに励まなくてはなりません。

15節でイエス様は、「もはや、わたしはあなた

がたを僕とは呼ばない。……わたしはあなたがたを友と呼ぶ」とおっしゃっています。神様に「友」と呼ばれた人は、旧約聖書に出てくるアブラハムや預言者たちだけでした。そのような人たちに対してと同じように、主イエス様は弟子たちに対して「友」と呼んでおられるのです。

それは、神の子であられるイエス様ご自身が、父なる神様からお聞きになったことを全て、弟子たちに教えられたからです（15節）。奴隷や使用人は、主人の心を知らずに、命じられたことをする者にすぎません。しかし、主イエス様は、父なる神様からお聞きになった、全てのことを、弟子たちにお知らせになりました。神様の心の内を打ち明けられたのです。それ故、弟子たちのことを「友」と呼ぶ、と言われるのです。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」。主イエス様は、弟子たちを主権的に選ばれました。それは、弟子たちが出かけて行って、実を結び、その実が残るようになさるためだと記されています（16節）。自分の聖さだけを、ひたすら求めるような生き方ではなく、「出かけて行って」「実を結び」「その実が残るように」なることを、主は目指しておられるのです。

「実」とはなんでしょうか。私たちが、イエス様の栄光のためになす全てのことは、実です。しかし、それだけではなく、実とは、弟子たちがイエス様の教えと救いの御業を語ることで、「信じる人達」のことも指しています。イエス様はマタイ28章の19〜20節において、命令なさいました。「行って、全ての民をわたしの弟子にしなさい」。イエス様を信じていない人たちがイエス様のことを知り、弟子として従うことを、神様は望んでおられます。

そして、その使命のために「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、あなたがたを任命したのである」と言われています。

それから、再び同じ命令を繰り返されます。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」（17節）。

教会において、仲間割れや、喧嘩が起こることがあります。罪人の集まりでは、避けられないことです。しかし、主イエス様は「互いに愛し合いなさい」と命じておられます。

一度仲たがいした人とは、とうてい仲直りできないと思うかもしれません。もう二度と話をしたくない、と思うかも知れません。確かに生まれながらの私たちには、互いを愛し合うことは難しいことであります。私たちは、イエス様のように、罪人のために犠牲になるような愛は、とても持ち合わせていないかもしれません。しかし、神様は罪人である私たちの為に、実際に独り子であるイエス様をささげてくださいました。そしてイエス様は実際に、父なる神様の御心に従い、十字架で私たちの罪の為に死んでくださったのです。

神は愛であられるので、互いに愛し合いなさい、と命じられ、その掟を守るなら、主イエス様の愛の中にとどまっていることになる、と言われるのです。

愛の無い私たちには、助け主が与えられています。聖霊なる神様の助けによって、イエス様の御心を確信させられ、助けられ、力を与えられ、勇気を与えられて、愛することができるように、祈り求めましょう。　（袴田清子）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 15章26〜27節

わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、
父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。
あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

5月25日　教会を建てあげるキリストと聖霊　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまにつながることによって、互いに愛し合いながら生きられるのだということを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

「互いに愛し合いなさい」と命じられたイエスさまのお言葉を、子どもなりに理解するとどうなるのでしょうか。ひとことで言い表わすことはとても難しいことですが、仮に「喧嘩をすることなく仲良くする」というふうに考えてみましょう。一緒に生きる人たちと仲良くし、相手を思いやることは大事なことです。ただ、このことは何も教会共同体の中だけではなく、幼稚園や保育園、学校や家庭の中でも教えられています。でも聖書が教える愛は一般的に教えられていることではありません。聖書が語る愛の特徴は、「イエスさま」とつながることによって生まれる実りであるということです。

子どもたちは、小さいなりに、誰かと一緒に生きていくことの大変さをよく知っています。愛することの難しさ、憎しみの虜になっている自分の惨めさを知っています。しかし、愛に生きられない自分の罪を知りながら、それに打ち勝つことができず、欲望のままに友だちに暴言を吐いたり、手を出してしまったりするのです。小さければ小さいほど自分の欲を制御できない弱さをも抱えていることでしょう。何度言われても、学校や親から教えてもらうように、皆と仲良くすることができません。仲良くしていても、実際は仲の良い振りをしているだけで、内心「あんなやつ！」と怒りに駆られながら生活している子どもたちもいることでしょう。

でもそういう私たち大人や子どもを、イエスさまは選んでくださいました（ヨハネ15:16）。私がおりこうさんだからではありません。喧嘩をしないからではありません。私がどういう人間であるかないかにかかわらず、イエスさまは私を救うために選び出してくださいました。

そしてイエスさまは私たちのことを「友」と呼んでくださるのです。私がイエスさまを愛することができなくても、イエスさまは私のことを最後まで愛してくださいます。その大きな愛を十字架の上で示してくださったのです。十字架に示された大きな愛によって、私たちの罪は覆われ、赦されました。このイエスさまにつながっているのですから、私たちは必ず豊かな実を結びます（ヨハネ15:2）。それも小さな実ではなく、豊かな実を結ぶのです。イエスさまの愛を知るまでは決してできなかった本当の愛に生きられるようになるのです。

毎週、教会に来て礼拝を捧げるのは、今日も、私はイエスさまとつながっているんだ。イエスさまに愛されている人間なんだ。こんな私でも愛に生きられるんだという恵みを繰り返し聞くためなのです。

〈祈り〉

イエスさまとつながって歩めることを感謝いたします。イエスさまが私を愛してくださったように、私も色んな人たちのことを愛することができますように。

5月25日　教会を建てあげるキリストと聖霊　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めから私と一緒にいたのだから、証しをするのである。」ヨハネ15:26～27

・聖霊とはどなたでしょう。

→三位一体の神様です。イエス様が天に昇った後お弟子さんたちに降った神の霊です。人の霊ではありません。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・イエス様が送ってくださった聖霊によらなければ、お弟子さんたちは、イエス様の新しい掟を守ることはできません。イエス様がくださった新しい掟はなんですか。

→「互いに愛し合いなさい」。

・「互いに愛し合いなさい。」とはどういう意味ですか。自分の言葉で言い直してみよう。

→お互いを大切にする。お互いのことを思いやったり、理解したりする。相手のことを自分の事洋に大切にする。イエス様がお弟子さんたちを愛してくださったように愛する。etc

・イエス様からみて、お弟子さんたちはどんな人だったでしょうか。優れた人？　信仰深い人？　立派な人？　言うことを良く聞く人？ イエス様の言うことをよく理解する人？

→お弟子さんたちはイエス様に呼ばれて従っていた人たちですが、優れた人でもなく、信仰深くもなく、立派でもなく、言うことを守れなかったり、イエス様の言っていることを理解できなかったりしました。

・イエス様から、お弟子さんたちはどのように思われていたのでしょう。

→この人から何からもらえる、とか、この人のおかげで、自分の評判は良くなるとか、自分は偉くなれる、とは思っていませんでした。でも、この人たちを愛することが、父なる神様の喜ぶことだと知っておられました。

・お弟子さんのどんなところをイエス様は愛したのでしょうか。

→愛すべきところがあったから愛したのではありません。イエス様が一方的に愛してくださったのです。だから、互いに愛し合いなさいとは、愛する点がある人だけが愛されるのではなくて、どんな人でも互いに愛し合うべきだということなのです。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・お弟子さんたちは、誰が一番偉いかとか、どうしたら人生を成功できるかということばかりを考えていました。でも友のために自分の命を捨てることが最も大きな愛だと聞いたとき、どんな気持ちがしたでしょうか。

→友のために自分の命を捨てたくないけど、神様はそういうことを願っているのなら、しないといけないのかなあ、と驚きと不戸惑い、など。

・友のために自分の命を捨てることが最も大きな愛だと言れた後、お弟子さんはイエス様に何と言われて励まされましたか。

→あなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに教えたから。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・私たちの周りにいる人で大切にしたいと思えない人はいますか。あるいは、誰かが自分を大切にしてくれないという人はいますか。

→まず、私たちがイエス様につながってイエス様の愛をしっかりうけとめましょう。そして、私たちが互いに愛し合えるように、聖霊を豊かに注いでくださるように、お互いに祈り合いましょう。

3. ゲーム

UNOやトランプ。一番負けた人は、罰ゲームで、勝った人たちのいいところを、一つずつほめなければいけない。

6月1日　キリストの昇天　教理説教のための聖書黙想

テキスト　使徒言行録 1章6〜11節
参照教理問答　子どもカテキズム　問26
ハイデルベルク信仰問答　問46〜49，問76

〈聖書テキストの解説と黙想〉

ルカによる福音書は、復活のイエスが、弟子たちに証人となるために聖霊を送ることを約束し、そのためにエルサレムに留まるようにと勧め、そして昇天していかれる場面を描いて閉じられる(24:44〜53)。

使徒言行録は、この部分を更に詳細に描くことから始まる。復活させられたイエスは、40日の間弟子たちの前に現れ、神の国について教え、聖霊が与えられることを約束し続ける（1:3〜5)。

その上で、イエスの昇天が描かれる（6〜11)。しかしここで描かれるのは、単に天に昇っていかれるイエスだけではない。

最初に描かれるのは、復活のイエスにお目にかかり、直接の教えを受け続けている、使徒たちを代表とする弟子たちの無理解である。彼（彼女）らはなお、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねるのである(6)。「大喜びで……神をほめたたえていた」(ルカ24:52）状態にいたるまでには、イエスの導きが必要だったのである。

十字架の死を打ち破る復活の力が、どのような形を取るのか。それは、今ユダヤ民族となっている神の民イスラエルの、国家としての再興という形を取るのではないか。

しかしイエスは、この弟子たちの問いを退けられる。弟子たちが見つめているのは、今という時と今を生きる自分たちであったが、イエスが見つめておられるのは、父が権威を持って定められた時と、そこに生きる壮大な神の民なのである（7, 8)。

使徒たちを代表とする弟子たち(すなわち教会)に委ねられるのは、聖霊を与えられて、十字架と復活の主、イエス様の証人となり、神のご計画に仕える者として生きる権威である（9)。

イエスは、使徒たちを代表とする弟子たち（すなわち教会）の無理解を退けられ、確かな約束を与えて、天に昇っていかれたのである。

しかもこの聖書テキストには、天に昇っていかれるイエスについて、「白い服を着た二人の人」が現れて証人となる。もちろん、この「白い服を着た二人の人」とは、復活のイエス様を指し示したあの二人である（ルカ24:4)。

この天からの証人は、天に昇っていくイエスを見つめ続ける教会に向けて、明確な宣言を行う。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(11節)。

前提として確認しておかなければならないが、復活のイエスとは、十字架の御傷をお持ちのイエスである。イエスは復活の後、弟子たちに現れた時、「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ」と言われた（ルカ24:39)。これは、亡霊だと考えていた弟子たちに、生きていることを指し示すためだけに言われた言葉ではない（参照ヨハネ20:24〜29)。

そのことを踏まえた上で、この約束には、3つの重要なポイントがある。第一に、イエスは、聖霊を与えてくださることによって、私たちの心の内に住まわれる。私たちが信仰の目をもって仰ぎ見る、あの十字架と復活のイエス様ご自身が、「またおいでになる」のである。そして、聖霊によって私たちの内に住まわれるイエスは、私たちを清め、いよいよ御自分とひとつにしてくださるという仕方でお働きになり、私たちを御自分に引き寄せてくださる。

第二に、聖霊において共にいてくださるイエスは、確かに天におられるお方でもあるのである。「あなたがたから離れて天に上げられたイエス」と言われている通りである。そして、天におられるイエスもまた、十字架の御傷をお持ちのイエス

なのである。天に昇られたイエスは、父なる神の右に座して、王として即位し、裁き主となられた。しかしその裁き主であるお方が、私たちのために十字架で裁かれたイエスであって、しかもなお十字架の御傷を指し示しながら、父なる神様に執り成しの祈りを続けておられるのである。これ以上に深い、私たちの日々の生活への慰め、また残る罪との戦いへの励ましはない。

第三に、天に昇っていかれたイエスは、聖霊によって、私たちと共にいてくださるだけではなく、再び決定的においでくださるお方でもある。聖霊を与えられて復活のイエスの証人とされた教会による福音の告知によって、神の国は進展する。そしてやがて「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期」が来て、神の国が完成するとき、イエスは再びおいでになる。再臨の約束である。私たちはその日、イエスが復活なさったように、それぞれに背負ってきた十字架の傷を持ったまま、復活するのである。

今日の説教では、特に11節で語られている約束の第一と第二の点に絞って、福音を語りたい。

〈カテキズムの解説と黙想〉

今回の聖書箇所の黙想のために、子どもカテキズムでは、問26を取り上げた。この後半部分で、天に昇られたイエスが、今も「御父の右に座して」(すなわち王として)、「私たちのために執り成しの祈りをささげていてくださ」ることが教えられる。

しかし何よりも、イエス様が天に昇られたことが、私たちにとってどのような益があるかを、味わい深い信仰の言葉で言いあらわしているのは、ハイデルベルク信仰問答の問46から問49、分けても問49である。

問49が言いあらわすのは、3つのことである。第一に、天におられるイエスが、御父の面前で私たちの弁護者となっていてくださること（子どもカテキズム問26と同じ)。第二に、十字架の御傷をお持ちの復活のイエスが天におられることは、私たちの復活の確かな保証であること。第三に、天におられるイエスは、聖霊を注いで、私たちを御自分のもとへと絶えず引き寄せてくださること。

特に、第二点と第三点を黙想するときには、主の晩餐について信仰を告白する問76をも、合わせて読みたい。主の晩餐のお恵みは、「キリストのうちにも、わたしたちのうちにも住んでおられる聖霊によって、その祝福された御体といよいよ一つにされてゆく、ということです」と言われる。

「一つにされてゆく」とは、霊的な意味でだけ言われるのではない。「それは、この方が天におられ、わたしたちは地にいるにもかかわらず、わたしたちがこの方の肉の肉、骨の骨となり」とあるように、私たちの魂も体もすべてが、天におられるイエスとひとつとされていくことなのである。

天に昇られたイエスは、聖霊を注いで、私たちと今既にひとつとなっていてくださる。そしていよいよひとつとなってくださる。私たちのために執り成し、私たちの心をご自分へと向けさせ、それぞれの十字架を背負ってイエス様に従う私たちをご自分の復活と栄光の御姿へと造り変えることで、ひとつとし続けてくださるのである。

〈子どもたちへ〉

弟子たちは、「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた」(10節)。復活のイエス様が天に昇っていかれる。そのお話を語り出すだけで、子どもたちもやはり「天を見つめる」ことになるだろう。

日曜学校教師である私たちに委ねられているのは、天からの二人の証人と心を合わせてイエスが天に昇っていかれたことの意味を語りかけることである。

そのとき子どもたちは、天におられるイエスが、十字架の御傷を指し示しながら、どのようにこの私のために父なる神の御前で祈っておられるかを知ることになるだろう。聖霊によって共にいてくださるイエスが、ご自分と更にひとつにするために、今どのようにこの私のために働いておられるかを、知ることになるだろう。

それは一言で言えば、天におられるイエスが、その力強い御手をもって、私たちをご自分の肉の肉、骨の骨として愛し守って、更に天におられるご自分の御許に引き上げていてくださる、ということである。

（安田直人）

6月1日　　キリストの昇天　　説教展開例

テキスト　　使徒言行録 1章6〜11節
子どもカテキズム　問26

〔単元のねらい〕

十字架に死なれ、復活なさったイエスさまは、天に昇っていかれた。このイエスさまの「昇天」の出来事を見つめた弟子たちは、「イエスが離れ去って行かれる」と感じ、「天を見つめていた」。そのとき、天からの証人二人が現れて、イエスさまが天に昇っていかれたことの意味を説き明かした。この説き明かしに従って、天におられるイエスさまのお働きを、子どもたちと共に見つめて慰めを得たい。

イエスさまは天で何をしておられるの？

イエスさまは、私たちの罪を背負って、父なる神さまの刑罰をその身に引き受けられて、十字架に死んでくださいました。

十字架に身代わりになって死んでくださったほどの、私たちへの愛。迷子の一匹の羊を探し回るほどの、父なる神さまの御心を実現したその愛。そのイエスさまの愛を見つめて、父なる神様は、大きな力を振われました。

イエスさまを墓からよみがえらせられたのです。死んだ人が生き返ったのでありません。神さまの御怒りを受けて滅んだ滅びの中に、神さまを愛し、隣人を愛して生きる、本当の神さまの子どもとしての新しいお命が生まれたのです。

イエスさまを信じると、イエスさまはご自分と私たちを、ひとつに結び付けてくださいます。イエスさまが、こう教えてくださったのを覚えていますか。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」。ぶどうの木と、その枝。ひとつに、しっかりつながっていて、ぶどうの木であるイエスさまの何もかもが、枝である私たちの中に満ち溢れるんですね。

ですからイエスさまを信じると、罪はぜんぶ赦されます。もう罰は終わったからです。イエスさまの十字架の御傷を見ると、そのことが良くわかります。

ですからイエスさまを信じると、私たちはイエスさまと同じ、神さまの子どもとなります。イエスさまの復活のお命、本当の神さまの子どもとしての新しいお命が、私たちの内に流れるようになるからです。

そのように私たちのために十字架に死なれ、私たちのために復活させられたイエスさまは、復活なさったあとには、どうなさったのでしょうか。

今日読んだ聖書に書いてあったとおりです。イエスさまは、弟子たちと40日の間共に過ごされましたが、そのあとで、最後の約束をお語りくださいました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」。

この約束を語り終えられると、イエスさまは、天に上げられた、と書いてあります。天に上げられる。そのとき一緒にいた弟子たちからは、離れ去っていかれたのです。そのときの様子が、このように語られています。「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった」。

私たちの生きているこの地上から、天に昇っていかれる。それは、空高く飛んでいかれたとか、雲の上の宇宙にいってしまわれたという意味ではありません。私たちは、「天のお父さま」とか「天にいらっしゃいます父なる神さま」とお呼びして、お祈りを始めます。天とは、父なる神さまのおられるところですね。

イエスさまが天に上げられる。それは、十字架

と復活という、私たちが罪赦されて、神さまの子どもとして生きるために必要なすべてのことを成し遂げられて、父なる神さまの元に帰っていかれた、ということです。

イエスさまは、私たちから離れ去ってしまわれたのではありません。イエスさまが、天に上げられたとき、あの復活のときにも現れた、天からの二人の御使いが、弟子たちに現れて、こう教えてくれました。

「イエスさまは、あなたがたから離れ去ってしまわれたのではありません。イエスさまは、あなたがたが一緒に過ごした復活のお姿のままで、またおいでになられますよ」。

そうです。イエスさまは、天におられますが、またおいでくださったのです。イエスさまは約束のとおり、天から、父なる神さまと一緒に、私たちの心に聖霊を住み込ませてくださいました。そして聖霊は、イエスさまの霊ですから、聖霊が住み込むということは、イエスさまが住み込んでくださっているのと同じです。

すべてを成し遂げて天におられるイエスさまが、いつでも私たちと一緒にいてくださる。あの十字架の御傷をお持ちのまま、復活の御体をお見せくださって、罪赦されて、神さまの子どもとなって生きる喜びを教えてくださったイエスさまが、いつも私たちと一緒にいてくださる。何と嬉しいことでしょう。

それだけではありません。私たちの心の中に住み込んでいてくださるイエスさまは、やはり、天にもおられるのです。それは、いつも父なる神さまと一緒におられる、ということです。

イエスさまは、父なる神さまの御前で、何をしておられるのでしょうか。イエスさまは、聖霊によって、私たち一人一人の心に住み込んでくださっているので、私たちのすべてをご存じです。

きっとイエスさまは、私たちがしてしまったあの悪いこと、私たちが言ってしまったあのいけない言葉、心の底にしまいこんでいるあの憎しみ、そういうことだけではなくて、すべてをご存じなのです。とても複雑なからみあっていること、私たちには解きほぐせないこと、私たちにはわからないような罪。

そしてイエスさまは、ご存じのすべてのことについて、いつも一緒におられる父なる神さまに、執り成してくださるのです。

「天のお父さま。どうか、私を見てください。この十字架の傷を見てください。今、地上に生きているあの子どもたちのために、十字架に苦しみを受けて、滅びの死を死んだ、私の魂と体を見てください。あの子どもたちの罪への刑罰は、すべて終わっています。あの子どもたちは、十字架に死んで、復活した私とひとつなのです。今、あの子どもたちは、神さまの子どもとなっています。どうか、あの子どもたちの罪ではなく、私とひとつとなっているあの子どもたちの、神さまの子どもとしての命を見てください」。イエスさまは、毎日、そのように執り成してくださっているのです。

そしてイエスさまは、父なる神さまに執り成してくださるだけではなくて、聖霊によって私たちの心に住み込んで、私たちの魂と体も、新しくしてくださいます。

ぶどうの木に、枝がしっかりと結び付いてひとつとなっているように、元気がなくなって葉っぱがしおれたり、ぶどうの実がならないようなことがないように、イエスさまは、いつもご自分の命を注ぎ込んでくださるのです。

そうすると、私たちは、イエスさまとひとつにされていますが、いよいよひとつにされていきます。ぶどうの枝が、ぶどうの木の一部分として、しっかりと太くなっていくように、イエスさまといよいよひとつにされていくのです。イエスさまに似た者へと変えられていくのです。

イエスさまは、天におられ、私たちは地にいますが、イエスさまと私たちは、聖霊によって結び合わされています。そしてイエスさまは、いつも愛してやまない私たちが、ご自分ともっとひとつになるように働き続けていてくださるのです。私たちはイエスさまのものです。　　（安田直人）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 15章5節前半

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

6月1日　キリストの昇天　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまは、天で今も私たちのために生きて働いておられるお方であることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

復活したイエスさまは、ある日、弟子たちの目の前で天に昇って行かれました。天高く昇っていかれ、段々とイエスさまのお姿が小さくなっていきます。そして、やがて雲に覆われて見えなくなってしまうのです。そのような光景を想像しながら、やはりある寂しさというのが生じてきます。

イエスさまとお別れして、もう会うことができないのだと……。

そのような悲しげな思いで天を見上げている私たちに白い服を着た二人の人が語りかけます。「なぜ天を見上げて立っているのか……」と。イエスさまのおはなしをずっと聞きながら、どうしてイエスさまは私たちの前にあらわれてくださらないのだろう。どこかに行ってしまわれたのだろうか。もうお会いすることはできないのだろうか。素朴な疑問をどうしても抱いてしまいます。もしからしたら、イエスさまは昔の人で、もう死んでしまったのだと誤って理解している子どもたちもいるかもしれません。

でも、イエスさまは、今も天において生きておられるのです。天とは、空の上や宇宙のことではありません。だから飛行機に乗ってもイエスさまに会うことはできません。天とは神さまがおられるところです。そしてその場所を私たちの目では見ることはできないのです。でも、聖霊をとおしてイエスさまが生きておられること、イエスさまが私と一緒におられることが分かるように導いてくださいます。

そして、天におられるイエスさまは、何もしておられないわけではありません。もうわたしの仕事は全部終わったのだと言って、天に帰って行かれたわけではないのです。いつも私たちのことを心に留めてくださっているのです。地上におられたとき、弟子たちや病気の人や貧しい人や罪人たちのことをご覧になって、手を差し伸べてくださったように、天においても同じように私たちのために働いてくださっているのです。いつも私たちのために、この世界のためにお祈りをしてくださっているのです。

だから、天を見て、寂しいなと思うのではなくて、やがて必ず来てくださるイエスさまのことを信じて、希望をもって歩んでいきましょう。元気になれないときもあるかもしれません。お友だちと喧嘩して嫌な思いをしたり、反対に嫌な思いをさせてしまって心が苦しくなることもあるかもしれません。でも、イエスさまがお祈りしてくださいます。「どうか私の十字架のゆえにお赦しください。この子が元気になることができるように助けてください」と。だから、この世界で生きていけるのです。

イエスさまが今日も天にいてくださいます。今日も皆のことを心配していてくださいます。イエスさまに「ありがとう」と感謝をして歩んでいきましょう。

〈祈り〉

天におられるイエスさま、今日も私のために神さまにお祈りしてくださってありがとうございます。こらからもずっとイエスさまを信じて歩むことができるように力を与えてください。

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」ヨハネ15:5前半

・イエス様の時代にはぶどうの木がまわりによくありました。このたとえで、どうしてお弟子さんがぶどうの木でなく、イエス様がぶどうの木なのでしょうか。

→お弟子さんたちがイエス様に繋がっていなくてはならないから。イエス様が実を実らせる栄養のもとだからです。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・イエス様が天に昇られたのはなぜですか。

→地上でイエス様がする働きが全部おわったからです。し残しはありません。

・地上でのイエス様の働きは何ですか。

→私たちが救われるために必要な働きです。それは、十字架と復活でした。

・十字架が終わったということは、どういうことですか。

→イエス様を信じる人の罪に対する罰が終わったということ。

・イエス様が天に昇らずに、地上でお弟子さんたちと一緒にいて、さらに聖霊を遣わしてくだされば いいと思いませんか。

→聖霊はイエス様が天から遣わしてくださいます。だから、イエス様が天に昇る必要がありました。聖霊が遣わされた後の時代を聖霊の時代といわれます。

・イエス様は地上の働きを終えて、もう働いておられず、休んでいるのでしょうか。

→地上の働きが終えたら、次に、天での働きをなさっています。天で父なる神様と一緒にいて、ご自分の十字架の業を果たしたから、クリスチャンの罪を赦しくれるように、と父なる神様に働きかけてくださいます。父なる神様はイエス様の願うことを何でも聞き入れてくださいます。イエス様は天で今も働いておられるのです。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・イエス様が天へ上られ、姿が見えなくなったとき、また寂しい思いになったかもしれません。でも、お弟子さんたちは元気をだすことができました。どんなことを新たに知らされたからですか。

→イエス様がまた天から来られること。しかも、天に昇って行かれたのと同じ有様で、です。

・イエス様が天に昇られた後、お弟子さんたちはイエス様のどんな言葉に従いましたか。

→使徒言行録1章4節から5節参照。

2-3. わたしたちのことを考えよう。

・聖霊はイエス様と違うのですか。

→もし全く違う霊なら、イエス様の思いと違うことをします。でもイエス様の思いどおりのことをなさる霊です。それはイエス様が私たちに命じたことをできるようにしてくださる霊ですから、イエス様と一つです。

・聖霊もいいけどやっぱり見える仕方でイエス様と一緒にいたい……という人のために。

→私たちの思う仕方でイエス様と一緒にいようとしても、それは一緒にいることにはなるとは限りません。（場合によっては偶像礼拝かもしれない）大事なことは、イエス様の思う仕方で私たちが一緒にいることが、本当の意味でイエス様と一緒にいることになります。今、イエス様は、聖霊によって私たちと共にいるということをお望みになられました。

・イエス様は私たちをどのようになさろうとしているのですか。

→「わたしの証人となる」と言われたように、イエス様の証人にし、いつもイエス様が共にいることを教えてくださいます。

6月8日　新しいイスラエル・教会の出発　教理説教のための聖書黙想

テキスト　使徒言行録 2章1〜5節
参照教理問答　子どもカテキズム　問34
ハイデルベルク信仰問答　問54
ウェストミンスター大教理問答　問58，83

〈聖書テキストの解説と黙想〉

五旬祭（ペンテコステ）とは、五十日目という意味です。五旬祭の前に主の過越と主の除酵祭が一週間、行われます。この一週間の中での安息日（土曜日）の翌日（日曜日）から五十日目の週の第一日（日曜日）が五旬祭として祝われます。もともとは、小麦の収穫の祝いで、刈り入れの祭り（出エジプト23:16)、七週祭（出エジプト34:22、レビ23:15、民数記28:26、申命記16:10）とも言われます。新約では、ほかに使徒言行録20:16、コリントー16:8にも記されています。新約時代、神殿があるエルサレムに、さまざまな地域に散らされているユダヤ人が主の過越と主の除酵祭が行われる時期とこの五旬祭の時期に多く集まってきました。使徒言行録に記されている五旬祭（ペンテコステ）の出来事は、普段、さまざまな地域に散らされているユダヤ人が多く集まっている中で起こりました。

復活され今や天へと上げられた主イエスと出会った使徒をはじめ一同が、この五旬祭の日にある家に集まっていました。使徒言行録1:15には、ペトロをはじめ120人ほどが一つに集まっていることが記されているので、五旬祭の時も同じくらいの人数が集まっていたと考えられます。この時、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえて、一同がいた家中に響きました。使徒言行録4章31節には、「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした」と記されています。ここで記されている聖霊に満たされることとその場所が揺れ動くこと、また、使徒言行録2:2での激しい風が吹いてくるような音が家中に響いたことは、旧約における神の臨在との類似性を思い起こさせます。例えば、出エジプト19章18節では、神がモーセに現れた時、モーセのいたシナイ山全体が揺れ動きました。使徒をはじめ一同が体験した激しい風が吹いてくるような音が家中に響いたという現象は、まさに神の霊が降る現象であったということです。

また、炎のような舌が分かれ分かれに現れて、そこに集まっている一人一人の上にとどまったという現象も旧約における神の臨在を思い起こさせます。先程確認した出エジプト19:18には、「シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである」と記されています。このように、炎、火は、神の臨在を思い起こさせます。洗礼者ヨハネは、ルカ3:16で民衆に、「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と語っています。ここで、聖霊と火は、並べられて語られます。

この炎のような舌が分かれ分かれに現れて、そこに集まる一人一人の上にとどまると、一同は聖霊に満たされました。この「聖霊に満たされる」という言葉は、新約において、ルカによる福音書と使徒言行録にしか出てきません。

洗礼者ヨハネは、母の胎にいるときから聖霊に満たされていました（ルカ1:15)。洗礼者ヨハネの母、エリサベトは、マリアの挨拶を聞いたとき、聖霊に満たされて、声高らかに話し始めました(ルカ1:41)。洗礼者ヨハネの父、ザカリアは、聖霊に満たされて預言しました（ルカ1:67)。ペトロは、大祭司に尋問されたとき、聖霊に満たされて語りました(使徒4:8)。エルサレム教会の人々は、祈りが終わった後に、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語り出しました（使徒4:31)。ダマスコのアナニアは、サウロが聖霊で満たされるようにと、主イエスによって遣わされました（使徒9:17)。サウロは、聖霊に満たされて魔術師をに

らみつけました（使徒13:9）。神から与えられた重要な働きを行うとき、また、神の言葉を語るとき、重要な言葉を語るとき、聖霊に満たされて行います。

五旬祭の日に集まった一同は、聖霊に満たされて、聖霊に促されるままに、ほかの国々の言葉で話し出しました。激しい風が吹いてくるような音と一同がほかの国々の言葉で話しているのを聞いて、エルサレムにいる大勢の人が集まってきました。集まってきた人々は、自分の故郷の言葉が話されていたのであっけにとられてしまいました。一同は、聖霊に満たされて、さまざまな言葉で神の偉大な業を語っていました。五旬祭の時期に普段はさまざまな地域に散らされているユダヤ人が多くエルサレムに集まってきており、このユダヤ人たちが自分たちが住んでいる土地の言葉で神の偉大な業が語られているのを聞きました。

主イエスは、天に上げられる前、弟子たちに「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使徒1:8）と約束してくださいました。この地の果てまで福音が告げ知らされるという約束は、まさに五旬祭の日に起こった聖霊降臨の出来事をもって開始されました。

〈カテキズムの解説〉

ウ大教理問58では、キリストが十字架の死と復活によって、私たちのために獲得してくださった利益にどのようにあずかれるのかについて次のように答えています。「わたしたちは、キリストが獲得された利益を、わたしたちに適用されることによって、それにあずかる者とされる、それは特に聖霊なる神のみわざである」。イエス・キリストが行った業は、聖霊の働きによって、私たちに適用されます。聖霊は、イエス・キリストと私たちを結びつけてくださいます。この聖霊の働きによって、教会は、誕生しました。使徒言行録に記されている聖霊降臨の出来事とは、まさに教会の誕生を意味していました。

ウ大教理問83では、旧約の神の民イスラエルから新約の神の民である新しいイスラエル、教会までの選びの民全体（見えない教会）がこの世で享受するキリストと共にもつ栄光における交わりとは何かと問い、次のように答えます。「見えない教会の会員は、首なるキリストの肢体であり、それゆえ彼にあって、彼が完全に所有しておられる栄光に関与しているので、この世で、キリストと共なる栄光の初穂を分有している。またその保証として、神の愛の自覚、良心の平和・聖霊による喜び・栄光の望みを享受する」。

聖霊の働きによって、私たちは、イエス・キリストに結びつけられ、キリストの体である教会の一員とされます。教会全体は、聖霊に満たされて、聖霊による喜びを共に味わうことができます。

ハイデルベルク問54は、「『聖なる公同の教会』についてあなたは何を信じていますか」と問い、次のように答えています。「神の御子が全人類の中から、御自身のために永遠の命へと選ばれた一つの群れを、御自身の御霊と御言葉とにより、まことの信仰の一致において、世の初めから終わりまで集め、守り、保たれる、ということ。そしてまた、わたしがその群れの生きた部分であり、永遠にそうあり続ける、ということです」。御子イエス・キリストが聖霊の働きによって教会を導いてくださいます。

私たちは、イエス・キリストが聖霊によって働いてくださる教会において、信仰が養われ、励まされて人生を歩んでいきます。私たちは、教会をとおして、救われた者としての本当の喜びに生きていくことができます。子どもカテキズム問34は、私たちが聖化の歩みをだれと歩むのかと問い、「私はひとりぼっちではありません。私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます」と答えています。子どもたちに、教会にこそキリストと共に生きていく喜び、信仰の仲間と共に生きていく喜びがあることを伝えたい。この本当の喜びを聖霊は実現してくださいます。

（浅野正紀）

6月8日　　新しいイスラエル・教会の出発　説教展開例

テキスト　　使徒言行録 2章1〜5節
子どもカテキズム　問34

〔単元のねらい〕

ペンテコステの出来事とは、いったいどのような出来事だったのかを語る。そして、ペンテコステの出来事をとおして、聖霊は、何をしてくださったのか、聖霊の働きによって誕生した教会とは何かを教える。そして、聖霊が働いてくださる教会をとおして、救い主イエス・キリストが伝えられ、本当の喜びが全世界の人々にもたらされることを語りたい。

イエスさまを全世界に伝えよう

今日は、ペンテコステです。ペンテコステとは、もともとは、小麦の収穫をお祝いする日でした。今は、教会の誕生をお祝いする日になっています。それでは、ペンテコステとは、いったいどんな出来事だったのでしょうか。

イエスさまが捕らえられて十字架にかかるとき、いつもイエスさまのそばにいた弟子たちは、怖くなって逃げ出してしまいました。

しかし、イエスさまは、十字架にかかって死んだ後に、三日目に死から復活されました。復活したイエスさまは、ご自分が生きていることを弟子たちに示されました。イエスさまは、40日にわたって弟子たちに現れて、神の国の福音について再び語り、弟子たちを教育されました。復活されたイエスさまは、弟子たちといっしょに食事までされました。食事の席で、イエスさまは、弟子たちにこう言われました。「エルサレムを離れないで、前から私が教えている父なる神さまがくださると約束したものを待ちなさい」。弟子たちは、イエスさまにこう尋ねました。「イエスさま、イスラエルの国を建て直してくださるのはこの時ですか」。イエスさまは、こう答えられました。「父なる神さまが御自分の権威でその時を定めておられるので、あなたがたがその時を気にしないでいいのですよ。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受けます。そして、このエルサレムだけではなくて、ユダヤとサマリアの全体、それだけではなくて、地の果てに至るまでわたしを証する人になりますよ」。こう弟子たちに話されてからイエスさまは、天に上げられました。イエスさまは、聖霊が一人一人に降ること、聖霊が降ることで救い主イエス・キリストを全世界の人々に証しすることができるようになると約束してくださいました。

それから、何日かたってペンテコステの日がやってきました。ペンテコステの日は、日曜日です。復活したイエスさまに出会った弟子たちがある家に集まっていました。

その時、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえて、一同が集まっていた家中に響きました。それだけではなく、今度は、炎のような舌が分かれ分かれに現れて、そこに集まった一人一人の上にとどまりました。すると不思議な出来事が起こりました。そこに集まっていた人々が聖霊に満たされて、聖霊に促されるままにさまざまな国の言葉を話しだしました。

ところで、このペンテコステの時期には、普段、さまざまな地域に住んでいるユダヤ人が神殿のあるエルサレムに集まってきていました。そのため、エルサレムの町は、多くの人々でにぎわっていました。多くの人でごったがえしていたこのエルサレムの町の中のある家から激しい風が吹いてくるような地響きがしました。その後、エルサレムの町を歩いている人たちは、自分たちが住んでいる地域の言葉が聞こえてきたので、たくさんの人がこの地響きがした家に集まってきました。この家

に集まって来た人たちは、確かに自分たちの言葉で神さまの偉大な業について語られているのを聞きました。

この家に集まってきた人たちは、びっくりしてこう言いました。「ここにいるのは、みんなガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、それぞれが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラム、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、リビア、ローマ、クレタ、アラビアから来たものがいる。それなのにわたしたちの言葉で神の偉大な業について語られている」。

ペンテコステの日に、イエスさまの弟子たちに聖霊が降ることで、教会が誕生しました。こうして全世界にイエスさまのことを伝える働きが始まりました。弟子たちが聖霊の働きによって、さまざまな国の言葉で神の偉大な業を語ったのは、まさにこの日から全世界にイエスさまが伝えられることを意味していました。

今、教会は、全世界にあります。教会は、このペンテコステの出来事によって、全世界へと広がっていきました。だから、わたしたちは、このペンテコステを教会の誕生日としてお祝いします。

ところで、聖霊は、イエスさまが十字架にかかって死に、三日目に復活することで獲得してくださった、たくさんの恵みを私たちにもたらしてくださいます。聖霊は、わたしたち一人一人に与えられます。そして、わたしたちそれぞれの信仰生活を守ってくださいます。聖霊は、なによりも救い主イエスさまとわたしをかたく結びつけていてくださいます。それだけではなく、イエスさまを救い主と信じる一人一人が聖霊によってかたく結びつけられます。これが教会です。教会とは、イエスさまを中心にしてイエスさまを救い主と信じる人々がしっかりと結び合わされた集まりです。

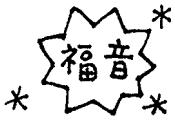
イエスさまは、聖霊が働く教会をとおして、本当の喜びをわたしたちにもたらしてくださいます。

だから、わたしたちは、決してひとりぼっちの人生を歩んでいるわけではありません。わたしたちは、聖霊の働きによって、教会につながることで、イエスさまといっしょに人生を歩んでいきます。だから、ぜひ、これからも教会に行くようにして、救われる喜びをいっしょに味わいましょう。そして、わたしたちも、わたしの救い主であるイエスさまを人々に伝えていきましょう。

（浅野正紀）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、
ほかの国々の言葉で話し出した。



6月8日　新しいイスラエル・教会の出発　幼稚科

〈ねらい〉

ペンテコステの日に、聖霊が降り、教会が誕生したことを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

今日はペンテコステ、聖霊降臨をお祝いする日です。「教会の誕生日」と言われることもあります。イエスさまがお生まれになったクリスマスやイエスさまがよみがえられたイースターと並んで、祝われる大切な日です。しかし、クリスマスやイースターのお祝いに比べると、ペンテコステは少し控えめなところがあるかもしれません。私たちはこの日をもっと喜び祝ってもよいのではないでしょうか。

今から約2千年前、エルサレムの地に聖霊が降り、弟子たちが「神の偉大な業」を語り出しました（使徒2:11)。そして、弟子たちが語るキリストの福音を聞いて信じた者たちが多く起こされたのです。その群れが教会です。あれから時を経て、エルサレムの地から各地に教会が広がっていきました。そして、今、私たちが住んでいる日本の国にもキリストの福音が伝わり多くの教会が生まれ、イエスさまを信じたのです。

ところで、聖書では、聖霊のことを「風」に譬えて語られることがあります（ヨハネ3:8)。ペンテコステの日も、突然激しい風が吹いてきました。風そのものは目で見ることができませんが、木の葉が揺れ動いている様子を見ると風が吹いていることが分かります。だからイエスさまを信じている人たちを見ると、そこに聖霊が働いていることが分かります。聖霊の風が吹くと、イエスさまのことがよく分かり、信じることができるようになるのです。

教会は、イエスさまを信じている人たちが集まっている場所です。皆、最初はイエスのことを知りませんでした。イエスさまなんかいなくても生きていけると言っていた人たちもいるかもしれません。でも、ある時、その人たちは、イエスさまのことを知って教会に通うようになりました。どうやって生きて行けばよいのか分からなくなって教会に通うようになりました。自分では解決できない罪の問題に苦しんで教会に通うようになりました。最初は、牧師が語るイエスさまのことがよく分かりませんでした。でも、イエスさまを信じている教会の人たちと一緒に過ごしているうちに、ずっと礼拝に出ているうちに、イエスさまが私のために十字架についてくださったのだということが分かるようになったのです。それはまるで新しい風が私の心に突然吹きつけたかのようでした。私の心に重くのしかかる罪をふっーと吹き飛ばしてくれるイエスさまの霊、聖霊の力によって、心は軽くなり、イエスさまを信じて生きていこうと決心することができるようになったのです。

2千年前に遠いエルサレムの地に吹いた聖霊の風が、時と場所を超えて、ここにいる私の所にまで届いて、このようにイエスさまを知ることができました。だから毎年ペンテコステをお祝いする度に、嬉しくなるのです。そして教会をとおしてもっとたくさんの人にイエスさまの福音を届けたいと思うのです。

〈祈り〉

教会をとおして、イエスさまのことが、世界中に広がりました。もっとたくさんの国や人が、イエスさまのことを知ることができますように。私もイエスさまを信じることができるように、聖霊をお与えください。

6月8日　　新しいイスラエル・教会の出発　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した。」使徒言行録2:4

・一同とはだれですか。
→お弟子さんたち。
・お弟子さんたちがほかの国々の言葉で話し出した、とはどういう意味ですか。
→お弟子さんたちは、周りにいた外国出身の人たちのその外国の言葉で神様の業を話し出したということ。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・聖霊が降ることを、イエス様が前もって使徒言行録1:4〜5でお話ししていました。そこを一緒に読んでみましょう。
・聖霊が降ったら、お弟子さんたちはほかの国々の言葉で神の偉大な業を話し始めました。このことから聖霊はどんな働きをなさることがわかりますか。
→神の業を証しする事。特にキリストを証しする事。
・今、みんなのいる世界でキリストを証しする所は何と呼ばれていますか。
→教会。(キリスト教会)
・ペンテコステは何の誕生日ですか。
→教会の誕生日。イエス様はこの日に教会を誕生させてくださいました。イエス様の業は、2000年経った今もこれからも続きます。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・イエス様が昇天した後、お弟子さんたちはどこにいましたか。
→遠くへでかけずに、イエス様に命じたとおり、エルサレムに留まっていました。イエス様の復活や昇天を見たので、本当はいろんな所に出かけて多くの人に伝えたかったかもしれません。
・聖霊が降った時にお弟子さんはどんな気持ちになったでしょうか。
→最初は驚いたでしょうけども、イエス様が神様のことをお話しするように、自分たちの口が語り始めるのを経験して、イエス様の言っていたとおりになった！と、喜んだことでしょう。
・9節の地名を地図で確認してみよう。
→パルティア、メディア、エラム……。

2-3. わたしたちのことを考えよう。

・イエス様を心から自分の救い主だと信じている人はいますか。
→それは聖霊の働きによるものです。
・お祈りするときに、神様に、聖霊の導きを与えてください、とか、聖霊を豊かに注いでください、とか、祈ることができます。祈ってみましょう。
・イエス様のことをますます知りたいとき、またイエス様のことをますます人に伝えたいときには、聖霊の導きを祈りましょう。

3. ゲーム

これまで覚えてきた暗唱聖句で、覚えているものを言いあってみよう。

6月15日　聖霊によって説教する教会　教理説教のための聖書黙想

テキスト　使徒言行録 2章14〜36節
参照教理問答　子どもカテキズム　問69，70
ウェストミンスター小教理問答　問89，90
ハイデルベルク信仰問答　問84，115

〈聖書テキストの解説と黙想〉

・14〜21節　誤解を解く

聖霊の注ぎを受けた使徒たちは、聖霊によっていろいろな外国語で、「神の偉大な業」(2:11) を語りました。それを聞いた人々の中には『あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、あざける者もいたのです (2:13)。この誤解を受けて、使徒ペトロがキリスト教会最初の説教をおこなったと言われております。

伝道は人々の誤解を解くことから始まると言われますが、伝道説教の一つの良き模範がこのペトロの説教でしょう。

ところで、キリスト教会最初の説教の聴衆は、聖書を経典とするユダヤ人ですから、ペトロは、彼らが幼い頃から慣れ親しんでいる聖書の一巻ヨエル書を自由に引用します (ヨエル3:1〜5)。そして、彼らが見聞きしている出来事は、ヨエル書に書き留められている神さまの約束の実現であると語ります。ペトロがこの箇所を引用することで聴衆に何よりも伝えたかったことは、神さまの約束の実現として聖霊が注がれたことは「終わりの時」が始まっていることの何よりのしるしであり、この時代は「主の名を呼び求める者は皆、救われる」(21節) ということです。

・22，23節　ナザレのイエスとは誰か

続いて、ペトロは、罪から救われるために呼び求めるべき主こそ「ナザレのイエス」(22節) であることを証言します。この時の聴衆は、およそ二ヶ月前に十字架刑に処せられたナザレのイエスのことを知っていたのです。もしかしたら、聴衆の中には、実際に『十字架につけろ、十字架につけろ』(ルカ23:21) と叫んだ人もいたことでしょう。ペトロは、その十字架で殺されたナザレのイエスこそ「神から遣わされた方」、つまり、メシアであると証言します。

ナザレのイエスが十字架刑に処せられたのは、実は、人類を罪から救うための神さまのご計画だったのですが、それでも、神からのメシアを殺したことの罪の責任は、「あなたがた」(23節)、つまり、聴衆にあるとはっきり告げて、罪の自覚を促します。

・24〜36節　イエスの復活・高挙・聖霊の注ぎ

しかし、憐れみ豊かな神さまは、このナザレのイエスを「命に至る道」(28節) とするために、死の力から解放なさり復活させられたと証言します。やはり、この証言にも、聴衆が幼い頃から慣れ親しんでいる詩編の箇所が引用されました (詩編16:8〜11)。そして、自分たちは、キリストの復活の証人であると告げます (32節)。

さらにナザレのイエスは、神さまの右の王座に挙げられ、主メシアとされて、御父から受けた聖霊を注がれていることを証言するのです (33節)。その際も詩編から引用されました (詩編110:1)。

「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」(36節)。

ペトロの説教の聴衆は、このようにして主メシア (＝主キリスト) とされたナザレのイエスを十字架につけて殺してしまったのでした。この説教を聴いた結果、多くの人々がその罪の自覚に至り、ペトロの勧めどおりに、罪を悔い改め、主イエス・キリストを信じて洗礼を受けたのでした (2:37〜42)。

この終わりの時代にあたって、罪から救われるために信じるべきは、十字架につけられて殺され

たけれども、復活させられ、御父の右の座に挙げられ、今も、聖霊を注いで下さる主イエス・キリストです。
〔参照：『実用聖書註解』，いのちのことば社，1170ページ〕

〈カテキズムによる黙想〉

御父の右の座に挙げられた御子イエスさまは、使徒たちに御父から受けた聖霊を注がれて、その代表のペトロをとおして語られたように、今日、地上のキリスト教会にも聖霊を注がれて、教会によって立てられた人（説教者）を通して語ってくださいます。

今回の聖書テキストに関連する子どもカテキズム問69です。

問69　御言葉とは何ですか。
答　生ける神の言葉、イエス・キリストです。
書かれた神の御言葉である聖書と、
聖霊なる神さまが語られる神の御言葉としての教会の説教を通して、
私たちは、イエスさまと一つに結び合わせられます。

キリスト教会最初の説教を先に読みました。この時、ペトロは、ユダヤ人の聴衆に対して、彼らの経典であるヨエル書や詩編をテキストとしてナザレのイエスこそ主メシア（主キリスト）であると証言しました。今日の旧約聖書をテキストとして、ペトロなりの言葉で主イエス・キリストを証言したのでした。そのような聖書テキストに基づく説教の言葉を聖霊なる神さまは用いてくださり、多くの人々をイエスさまと結び合わせて、一つの教会としてくださったのです。

今日も、聖霊なる神さまは、こどもの教会（日曜学校）の礼拝式における聖書朗読と説教を用いて子どもたちをイエスさまと結び合わせて、一つの教会としてくださいます。教会によって立てられて（参照：日本キリスト改革派教会の場合、『政治規準』76.2.9,『礼拝指針』114)、礼拝式における聖書朗読と説教によって子どもたちに主イエス・キリストを伝える務めを託されている場合は、ぜひ、このことをおぼえましょう。そして、何よりも、聖霊のお働きを願い求めながら、礼拝式で子どもたちに向かいましょう。

ちなみにウェストミンスター小教理問答ですと問89です。

問89　御言葉は、どのようにして救いに有効とされますか。
答　神の御霊が、御言葉を読むこと、特に説教を、罪人に罪を自覚させて回心させるため、また信仰によってきよめと慰めのうちに救いに至るまで建て上げるために、有効な手段とされます。

イエスさまの最初の説教は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:15）です。使徒ペトロの説教も、このイエスさまの説教の言葉が中核です。そして、今日、私たちが子どもたちに語る説教も同様です。与えられている聖書テキストに基づく説教が聖霊の恵み深い御臨在の中で用いられるとき、子どもたちにも罪の自覚が生じて悔い改めること、そして、イエスさまを信じることが起こるのです。罪人の回心という現代の奇跡がこどもの教会(日曜学校)で起こるためにも、子どもたちにも届く説教の言葉の獲得に努めたいと願います。

〈子どもたちに対して〉

この単元の目標は「聖霊を受けた使徒たちは、迫害を恐れず大胆に説教した。聖霊を祈り求めよう」です。

この与えられている聖書テキストをどのように語れば、子どもたちに届くのでしょうか、そして、子どもたちが聖霊を祈り求めるようになるのでしょうか。

祈りつつ、この聖書テキストを黙想する中で自らに与えられる悔い改めと信仰の恵みを子どもたちへの説教として言葉化できればと願います。

（長谷川潤）

6月15日　聖霊によって説教する教会　説教展開例

テキスト　使徒言行録 2章14〜36節
子どもカテキズム　問69，70

〔単元のねらい〕

使徒ペトロは、イエスさまがユダヤ当局によって逮捕された時、イエスさまを見捨てて一目散に逃げてしまい、イエスさまを知らないと三回も言ってうそをついた。また、イエスさまが十字架で処刑された後、自分に災いが及ぶのを恐れて、他の弟子たちと一緒に隠れていた。そんな弱々しいペトロが、十字架につけられ殺されたナザレのイエスこそ、神さまから遣わされた主メシアであると、恐れることなく、大胆に説教できたのは、ひとえに聖霊のお力によることであった。このことを物語として説教するのも一つの手であろう。しかし、事実を物語るだけならば、子どもたちに何が起こるのだろうか？ 聴き手の子どもたちは、昔話の一つ、他人事として片付けてしまうかも知れない。また、この聖書テキストからよく語られるメッセージは、聖霊に満たされてイエスさまのことを伝えましょう！ ではないかと思うが、言葉で伝えることが苦手な子どもは疎外感をおぼえるかもしれない。そこで、説教者がこの使徒ペトロの説教を聴いて与えられた恵みを言葉化することにチャレンジしてみたい。

ぼくがイエスさまを十字架につけてしまった！

こどもの教会（日曜学校）のお友だち、おはようございます。

さあ、先週の日曜日は、ペンテコステ、聖霊降臨記念の日でしたね。エルサレムで祈って待っていた弟子たちに、イエスさまのお約束のとおりに聖霊が降っておいでになって、教会が誕生したこと、教会のお誕生をみんなでお祝いしました。それで、さっき読んだ聖書には、誕生した教会で、最初にペトロさんがしたお話、“説教”というのだけれど、そのお話が書いてありました。

みんな、ちょっと前のペトロさんのこと、おぼえている？ この時よりも、およそ二ヶ月前のペトロさんのこと。どんな人だったかと言うと、イエスさまが祭司長や律法学者たちにつかまると、イエスさまを見捨てて、さっさと逃げてしまいました。そして、「あなたはあのイエスと一緒にいましたね？」と聞かれると、「イエスなんて知らない！」と、何と三回もうそをつきました。そして、イエスさまが十字架で殺されると、自分も、イエスの弟子だから、つかまって十字架で殺されてしまうかもしれないと恐がって、他のお弟子さんたちと一緒に隠れていました。ところが、そんな弱々しいペトロさんが聖霊なる神さまを受けると、祭司長や律法学者たちを恐がることなく、勇気を出して、十字架で殺されたイエスさまこそ、神さまがお遣わしくださった主メシア、罪からの救い主！ と大きな声で言いました。聖霊なる神さまのお力で、弱いペトロさんでしたが、勇気を出して、イエスさまのことを伝えることができたんだね。

ところで、けさは、ペトロさんが言った最後の言葉をみんなと一緒におぼえたいと思います。もう一度、お読みしましょう。

「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」(2:36)。

「イスラエルの全家」というのは、イスラエルの全員、イスラエルの人みんなということ。もちろん、この時、ペトロさんのお話を聴いていた人たちの中には、二ヶ月ぐらい前に、ローマの総督ピラトに向かって、イエスを「十字架につけろ、

十字架につけろ」（ルカ23:21）と叫んだ人がいたことでしょう。でも、この時聴いていた人の全員がそうではなかったと思います。けれども、ペトロさんは、イスラエルの全員、「あなたがた」がイエスさまを十字架にかけて殺したんだと、はっきり知らなくてはならないと言ったのです。イエスさまが十字架につけられた時、その場にいなかった人も、イエスさまを十字架につけて殺したんだということです。

ぼくがはじめて、このペトロさんの言葉を読んだ時のことです。ぼくがイエスさまを十字架につけて殺してしまった！　という思いで、どうしようもなくなりました。ぼくの罪がイエスさまを十字架につけてしまったんだ！　と。ペンテコステの前のお祝い、そう、イエスさまの復活をお祝いするイースターによく歌われる子ども讃美歌なんだけれど、こういう讃美歌があるの知っているよね。

わたしたちの　罪のため
　　十字架にかかった　主イエスさま
（『こどもさんびか』38番，日本基督教団出版局）

一つの意味は、ぼくの罪がイエスさまを十字架につけてしまったということです。ついうそついちゃう罪、友だちの悪口言っちゃう罪、あんな奴いなかったら、もっとぼくが先生や大人の人にかわいがれるのになと思ってしまう罪、何よりも、神さまがおっしゃることなんてぼくには全然関係ないと思ってしまう罪が、イエスさまを十字架につけて殺してしまったということです。ぼく、はじめて、このペトロさんの言葉を読んだ時、イエスさまを十字架につけてしまって、どうしよう！という思いで、心がいっぱいになってしまいました。

だけど、イエスさまが十字架につけられたのは、そればかりではなかったんだね。ペトロさんはお話の中でこうも言っていました。さかのぼって、23節ですが、「このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです」。

神さまのご計画って、何でしょう？　それはね、こういうことです。さっきの子ども讃美歌のもう一つの意味ですが、ぼくの罪の、いや、ぼくの全ての罪の赦しのために、イエスさまが十字架にかかって死んでくださった。イエスさまは、ご自分を十字架につけてしまったぼくの全ての罪の償いのために、何と十字架で償いの死を遂げてくださったということです。この十字架にかかってくださったイエスさまを信じるならば、全ての罪が赦されるんだということをペトロさんは、この時お話を聴いていた人全員に、そして、今も、みんなに伝えてくれているのです。

イエスさまは、私たち、ぼくたちが犯してしまう神さまへの罪によって十字架につけられました。けれども、何と、その罪の全ての償いのために、十字架につけられ死なれたことを今朝はおぼえましょう。イエスさまは、私たち、ぼくたちのことを本当に愛しておられるのです。（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 2章36節

だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。
あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、
神は主とし、またメシアとなさったのです。

6月15日　聖霊によって説教する教会　幼稚科

〈ねらい〉

小さな私でも、聖霊を受けて、イエスさまの恵みを語り伝えることができるということを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

最近、ある牧師からこんな話を聞きました。あるキリスト教系の幼稚園に通う子どもが、風邪をひいて寝込んでしまったそうです。でも熱にうなされながら、幼稚園で教えてもらった賛美歌の一節を、ずっとロずさんでいたというのです。

「よいこになれないわたしでも
あいしてくださる」って
かみさまのおことば

（『讃美歌21』60番）

この歌を看病しながら近くで聞いていたその子のお母さんは思わず涙を流したというのです。

よい母親になりたいと思いながら、目の前でいつもわんぱくにしている自分の子どもを叱りつけることしかできずにイライラしている。でもそのことが、子どもに苦しい思いをさせてしまっていた……。娘はよい子になりたいけれどもなれない葛藤の中で、それでもなお愛してくださる神さまの恵みに思いを寄せながらこの子は毎日を過ごしていたのだ……。我が子が病の中で歌うさんびかを繰り返し聞きながら、お母さんは自分の罪に気付かされていきました。そして「こんな私でも神さまに愛されているのですね、先生」とお母さんは涙ながらに、その牧師に話してくださったそうです。この話を教えてくれた牧師は言います。この小さい子どもは見事な説教をしたのだと。

御言葉を語り伝え、説教するのは、何も牧師や教会学校の教師だけの務めではありません。上に記したエピソードにもあるように、普段、教会学校で御言葉を学んでいる側、聞いている側にいる者も御言葉を語り出すということがあるのではないでしょうか。そもそもキリストの教会が、神さまを礼拝し、賛美していること自体が、広い意味での「説教」と言うことができるでしょう。そのことに大人も子どもも区別はありません。

また誰かに御言葉や神さまの恵みを上手く伝えられなくても、自分で自分に説教をして慰められている子どもたちもいるのではないかと思うのです。毎週の礼拝の中で歌っている賛美歌、毎週覚えている暗唱聖句、毎週聞いている聖書物語など、教会や家庭の中で少しずつ蓄えられていく主の恵みがふとした瞬間に豊かな実を結ぶことがあるのです。どうも私たち大人は教えることに精一杯になってしまいます。理解がわるいとつい叱ってしまうことがあるかもしれません。でも聖霊の実りは、私たちの思いを超えて教会の子どもたちの中で実を結んでいることをもっと強く信じてもよいのです。

今日の分級では、ペトロの説教をおさらいすることも一つの方法ですが、子どもたちが好きな聖書物語や、賛美歌などを一緒に分かち合っても楽しいのではないでしょうか。

〈祈り〉

神さまのおはなしをもっとたくさん知ることができますように。イエスさまのことがもっと大好きになりますように。

6月15日　聖霊によって説教する教会　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」使徒言行録2:36

・イスラエルの全家とは誰ですか。
→イスラエルのすべての人たち。

2. 説教を分かち合いましょう。

2-1. ペトロのことを考えましょう。

・約2カ月前、祭司長や律法学者をおそれ、イエスの仲間ではない、と3回も否定し逃げ出したペトロ。その時と、今のペトロの違いを挙げてみましょう。
→主イエスの十字架と復活を知った。復活の主イエスとあってお話し、3回私を愛するか、私に従いなさいと言われた。昇天した主イエスを見た。ヨエル書で預言されているとおり、聖霊降臨を経験した。聖霊によって、イエス様を証しする勇気が湧き、証しせずにはおれなくなったのです。

2-2. ペトロの説教を聞いていた人々のことを考えましょう。

・彼らはイエス様に対して何をしましたか。
→十字架につけてしまった。メシアとは思わずに、罪のないイエス様に罪をきせて殺してしまった。
・どうしてメシアを十字架につけて殺してしまったと認めたのですか。
→ペトロの説教をきいたから。
・この人々はイエス様から直接話を聞いたかもしれません。そうだとしたら、イエス様から話を聞いても回心しなかったのに、お弟子さんたちから話を聞いたら回心したわけです。不思議ですね。どうしてでしょう。イエス様よりもお弟子さんの方が偉くなったのでしょうか。
→イエス様の説教とお弟子さんの説教の同じ所は、旧約聖書からイエス様ご自分を説明した点ですが、ペトロはそれだけでなく実際に起こった十字架と復活と昇天、そして聖霊降臨も含めて旧約聖書から説明したところにありました。その説明を、聖霊が力強く証しさせました。お弟子さんたちが偉くなったのではありません。聖霊が、主イエスの十字架と復活と昇天の意味をはっきりとお弟子さんたちに語らせたからです。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・人々はイエス様を十字架につけてしまいました。みんなもイエス様を十字架につけてしまったと思いますか。
→みんなもその場にいたと考えてください。ユダヤ人たちが「殺せ殺せ」と叫んでいます。その地域で一番偉いピラトでもユダヤ人をとめられず、殺すことを問いませんでした。私たちもその場にいたら、ユダヤ人をとめられず、殺すのは仕方ないと思ったことでしょう。それで、私たちもイエス様を十字架につけてしまったと言えるのです。みんながイエス様を殺してしまったのです。罪の無い人を守ろうせず、自分を守ろうとした罪です。
・臆病で逃げ出したペトロもイエス様に許され、大胆に堂々とイエス様を語れるようにされました。同じ聖霊が私たちにも注がれています。
→聖霊の力が私たちにも与えられることを信じて祈りましょう。

3. おやつ

食べる前にお友だちに祈ってもらう。

駄菓子やであまり買えない物をつくる、あるいは作っておく。

焼き芋、ゆで卵、たまには高級なお菓子の体験。来週、これまでの暗唱聖句のテストをすると伝える。成績のよい子には特別にお菓子を準備しておく。

6月22日　最初の教会の姿　聖書研究

テキスト　使徒言行録 2章37〜47節

説教者が行う聖書研究は、初めから終わりまで神の前でなされる営みです。神の前にひとりでいること、神が語り出されるのをひとり静まって待つこと、御言葉に耳を傾けて御心に聞き従うことです。何よりもまず、祈りをもって始めねばなりません。祭司見習から神の預言者へと召し出された少年サムエルの祈りこそ、私たちの祈りです。「主よ、お語りください。僕は聞いております」。

〈救済史カリキュラムの文脈〉

6月8日（聖霊降臨日）から、救済史の終わりの時代をたどるカリキュラムが始まっています。新しいイスラエルとしてキリストの教会が出発した出来事は、天の父なる神の霊の注ぎ、すなわち復活・昇天された主イエスの聖霊が降臨したことによる、100％神の業であると言わねばなりません。そして同時に、聖霊に満たされた人々が、聖霊の語らせるままに語り出した、100％人間に起こった現象であるとも言うことができます。とりわけ、復活の主イエスによって立ち直った使徒ペトロが、約束の聖霊とともに力を受け、主の復活の証人として説教を始めた出来事こそ、キリスト教会誕生の産声、教会共同体の生命的営みの始まりにほかなりません。その営みは、教会をどのような姿へと発育させ、歩み出させたのでしょうか。

〈単元の主題と目標について〉

最初の教会の姿。それを見つめることが、今回のテーマです。聖書が伝える初代教会の実像を、霊の眼をもって、しかと見ることが求められます。そして、古代のキリスト信徒たちの姿に、今ここに生きる私たちの姿を重ねながら、信仰と生活の在り方を見つめ直すことが目標となります。

先輩たちは、聖霊と御言葉と祈りに導かれて、力強く歩み出しました。それは、密かな営みではなく、堂々たる出発でした。小さな群れではなく、大いなる集会でした。この現象の要因について、またその特徴について、黙想しましょう。

〈2章38〜40節：神の民として召される〉

聖霊降臨日に、使徒ペトロが神の権威において勧めたのは、罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼を受けること、バプテスマのヨハネが勧めた「水による洗礼」を受けることでした。この礼典に新しい要素が加わります。「イエス・キリストの名によって」「イエスこそ主であるという信仰告白とともに」洗礼を受けることです。

この契約のしるしに新しい約束が加わります。「そうすれば聖霊の賜物を受ける」「聖霊の太鼓判を押され新しい神の民として召される」との約束です。これは、その場に居合わせた人々や、同じ時代に生きる人々だけでなく、子や孫にまで、遠い国の人々にまで及ぼされる約束でした。イエスを主と仰ぐ新しいイスラエルの誕生、その要因は「神の召し（コーリング）」にありました。

「神は御自分の民を一つとするため、御声をもってイスラエルを御前にお召しになったように、遠くにいる者たちも神の新たな布告と命令とによって呼び出され、イスラエルに近づくようになるため、あの同じ御声は到る所に響き渡るであろう」。

J. カルヴァン『聖書注解』

宗教改革者は、このように使徒言行録2章39節を注解し、神の召しの一つの在り方に注目します。その焦点は「神の御声」でした。神は御声をもって、御自分の民をお召しになります。聖書に語り尽くされた神の御言葉によって、キリストの民は召されるのです。

〈2章41〜42節：聖徒の交わりへと召される〉

使徒ペトロの説教を聞き、福音を信じて従った人々は、罪の赦しを得るために悔い改めて洗礼を受けました。ヨルダン川から20キロ西に位置する都エルサレムで、約三千人が水による洗礼を受けたのですから、水の確保だけでも大変だったでしょう。長蛇の列が何時間も続いて、誰の目にも明らかな出来事となったはずです。その人々が、約束どおり聖霊の賜物を受けたのです。

「召しには二種類ある。神が外的な言葉の説教によって万人を等しく招きたもう召しがある。他に、殆ど信仰者のみに与えられる召しがあって、宣べ伝えられた御言葉を聖霊の内的啓明によって彼らの心に根付かせるものがある」。

J. カルヴァン『キリスト教綱要』Ⅲ24：8

「召しは二重である。まず外的な・一般的な召しがある。神はこれによって、善いものも悪いものも等しく婚宴の席へ、葡萄園へと召される。もう一つの召命は、内的な・特別の召し、すなわち「ご計画に従った召し(ローマ8:28)」である。神はこの召命によって、選ばれた者たちだけを、その恩恵により、キリストにおいて、天地創造の前に召し、この世においては、内的にも外的にも有効に召命したもう」。

『エゲル谷市民の信仰告白』

「御自分が命に予定している者たちすべてを、そして彼らだけを、神は御自分の定めたふさわしい時に、御言葉と御霊により、彼らが生まれながらにしてその中にある罪と死の状態から、イエス・キリストによる恵みと救いへと、有効に召命することを善しとされる。すなわち神は、まず御自身に関する事柄を霊的に・救いに役立つものとして理解できるよう彼らの知性を照らし、また彼らの石の心を取り去って・彼らに肉の心を与え、さらに彼らの意志を新たにし・全能の御力によって彼らを善なることへと向かわせ・かくして彼らをイエス・キリストへと有効に結びつけたもう。彼らは神の恵みにより自らすすんでそうするようにされているので、全く自由にキリストのもとへ行く」。

『ウェストミンスター信仰告白』(10章1節)

神はキリストの民を外からも内からもお召しになります。神が永遠の御心のうちに召すとお決めになったキリストの民を、御自分の言と霊によってお召しになるのだから、神の召しが無効になることはありません。有効召命された者は、確かにキリストに結ばれ、贖いの恵みを適用されます。

かくして、主イエスの名による洗礼を受け、聖霊を賜物としていただいたキリストの民の信仰的集中力は、明確な対象「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」へと向かいます。新共同訳では4つの対象がそれぞれ別個のものであるかのように読めますが、原文では「使徒の教えと相互の交わり」「パンを裂くことと祈ること」といった具合に、前半2つと後半2つがそれぞれペアになっています。「使徒の教えに熱心な人々が、相互の交わりに召された」のです。この交わりが「パンを裂くことと祈ることに専念」したのです。

神によって召されたキリストの民は、「聖徒の交わり(コイノニア)」において現われ、「パンを裂くことと祈ること」によって特徴づけられます。「パンを裂くこと」とは、普通の食事を共にすること以上の事柄、疑いもなく「主の晩餐の礼典」を規則的に守ったことに他なりません。彼らが共にした「祈り」も、この礼典が行われる場所での「公同の祈り」を指すものと考えられます。

〈2章43〜47節：教会共同体へと発展する〉

使徒ペトロの説教を用いてキリストの民を召したもうた神は、使徒たちに奇跡としるしを行わせ、キリストの民を一つの共同体へと建て上げます。聖徒の交わりに召されたメンバーは、主イエスに結ばれた一つの体であるという自覚をもって共同生活を始めます。個人の動産・不動産の一切を、共同体のものとして共有し分配するという制度は、彼らの霊的一致の意識が非常に生き生きとしていた時にのみ維持することができました。聖霊降臨に続く幾週もの間、彼らは毎日食事を共にして、パンを裂き、その集会で祈りをささげたのです。こうして、聖徒の交わりは教会共同体へと発展していきます。その共同生活は、神からの恵みを惜しみなく分かち合う「執事活動(ディアコニア)」となってあらわれ出たのです。

〈子どもたちに対する神の召しを信じる〉

教会学校に集まる子どもたちは、安息日ごとに神の御声によって召しを受ける新しいイスラエルです。その召しに応えて、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、イエスこそ主であると信仰を告白するキリストの民です。主イエスに結ばれた兄弟姉妹として、聖餐の食卓に招かれる神の家の子どもたちです。　(二宮　創)

6月22日　最初の教会の姿　説教展開例

テキスト　使徒言行録　2章37～47節
子どもカテキズム　問29
参照教理問答　ウェストミンスター小教理30～32，大教理66～68

〔単元のねらい〕

救済史の文脈において、最初の教会の姿を見つめることが、今回の主題です。聖書が伝える初代教会の実像を、霊の眼をもって、しかと見ることができる説教が求められます。古代のキリスト信徒たちの姿に、今ここに生きる私たちの姿を重ねながら、信仰と生活の在り方を見つめ直すための勧告が求められます。神の召しを受けた新しいイスラエルは、召しに応えて力強く歩み出しました。それは、密かな営みではなく、堂々たる出発でした。小さな群れではなく、大いなる集会でした。人間精神が生み出した結社ではなく、神の言と霊によって召し出された聖徒の交わりでした。教会学校に集まる子どもたちは、安息日ごとに神の御声によって召しを受ける新しいイスラエルです。その召しに応えて、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、イエスこそ主であると信仰を告白するキリストの民です。主イエスに結ばれた兄弟姉妹として、聖餐の食卓に招かれる神の家の子どもたちです。この霊的事実を伝えましょう。

説教展開例は、児童説教の見本ではなく、同労の諸兄姉による説教奉仕に素材を提供するものです。

聖徒の交わりへと召される

「さあ、〇〇くん、ごはんですよ。〇〇ちゃん、起きなさい」。いつものように、お母さんの呼ぶ声がします。「〇〇ちゃん、テーブルにつく前にすることは何ですか。〇〇くん、手を洗いましたか」。めずらしく、お父さんの声も食堂にひびきます。今朝は日曜日、家族そろって朝ごはん。みんなでテーブルをかこみ、お祈りをして、おいしい料理を分け合っていただきます。

これは、今ここにいる誰かさんちの朝ごはんの様子に似ているかもしれません。あるいは、ぜんぜん似てないかもしれません。それでもこれは、日曜日に教会に集まる皆さんと、教会学校の教師である私たちの、毎週の様子をよくあらわしています。なぜなら、教会は「神さまの家」と呼ばれるからです。この家の「主（あるじ）」はイエスさまです。教会学校は「主イエスさまの食堂」のようなもので、私たち教師は、この食堂の主にお仕えする僕（しもべ）として、食卓の準備と給仕の役目を果たします。食卓の上に並ぶのは、聖書にある神さまの言葉、すなわち命のパンです。また、聖霊による養いの恵み、すなわち霊の水です。

このように、日曜日の教会学校は、神の家の食卓で、命のパンと霊の水をいただく、神の子どもたちと主のしもべたちの交わりなのです。教会はまるで母のように、いつも私たちに呼びかけます。「さあ、食事の時間ですよ」。そして、私たちから父と呼ばれることをよしとされた主イエス・キリストの御父が、私たちを呼び出してくださいます。「さあ、食卓につきなさい。その前に、手を洗いなさい」。この様子は、教会が始まった一番初めの時から、今日に至るまで、ずっと変わりません。聖書はその様子を、私たちに伝えています。

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(使徒言行録2:38)。これは、食卓の主であるイエスさまが、使徒ペトロという僕を遣わして、神の家の子どもたちを呼び集めるために語らせた御言葉です。「賜物として聖霊を受けます」「聖霊という神からの贈りものを受けます」という約束は、「神の家の子どもであることのしるしを与えます」

「食卓につくための席が準備できました」という約束を含んでいます。それで、「食卓につくまえに手を洗いなさい」という勧めがなされる訳です。神の家の子どもが食卓の席につくまえになすべきことは、「自分の罪を悔い改めること」「イエス・キリストの名によって洗礼を受けること」「神からの赦しをいただくこと」に他なりません。そうする人には必ず、神からの贈りものとして、聖霊の賜物が約束されています。

「この約束は、あなた方にも、あなた方の子どもにも、遠くにいるすべての人にも、つまり、私たちの神である主が招いてくださる者なら誰にでも、与えられているものなのです」(使徒言行録2:39)。神の家である教会へと呼び出され、聖書にある神の言葉によって召し集められ、洗礼と信仰告白によって罪を赦していただいた人は、聖霊というしるしを受けます。このしるしは、父なる神さまが天地創造の前から召し出すと御心のうちに定めておられた「神の民のしるし」です。御子イエスと聖霊によって召し出した「新しいイスラエルのしるし」です。今ここにいるあなたは、新しいイスラエルとして召し出された民の一人です。永遠の昔から召し出されることが定められていた神の民のメンバーです。教会学校の教師である私は、このことを信じて疑いません。ですから、あなたもどうか、自分が神の民であること、新しいイスラエルであることを信じてください。

「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使徒言行録2:41,42)。神さまの召しに応え、洗礼を受けた人々は、約束どおり聖霊を受けました。この目に見えない霊的な事実は、はっきり目に見える出来事として現われました。神の民に召された人々は、「使徒の教えと相互の交わり」に召されたのです。新しいイスラエルの交わりに召された彼らは、「パンを裂くことと祈ること」に熱心をあらわしたのです。

使徒ペトロの教えを聞き、信じて従う人々は、「相互の交わり（コイノニア)」へと召されます。この交わりは、人と人との間の友情や愛情によって生み出される仲良しグループではありません。あるいは、世の中における仕事や責任において結びつく相互利益集団でもありません。そうではなくて、ただ聖霊によって主イエスに結び付けられた「しもべ・はしための集まり」です。ただ神によってキリストのもとに召し集められた「聖徒の交わり」なのです。

その証拠に、聖徒の交わりへ召された人々は、「パンを裂くこと」と「祈ること」に熱心でした。主イエスのしもべたちが「パンを裂く」。パンを食べると言わないで、わざわざ「パンを裂く」と言いあらわすことには、普通の食事以上の意味が含まれています。もう分かりますね。そうです。聖餐式において「パンを裂く」のです。それは、十字架上でキリストの体が裂かれ、血が流されたことを想い起こすためです。罪深い私たちの受けるべき死刑を代わりに受けてくださった主イエスを仰ぎ見るためです。「主よ、申し訳ありません。罪人のわたしを憐れんでください。あなたを十字架にかけたわたしをお赦しください」。この公同の祈りとともに、主イエス・キリストへの感謝をささげることこそ、「聖徒の交わり」において、なくてはならぬ営みです。

今ここにいるあなたは、この交わりへと召されています。あなたが神さまを知る前から、父なる神はあなたを知っておられます。あなたが主イエスを愛する前から、キリストはあなたを愛しておられます。あなたが聖霊を受け入れる前から、聖霊はあなたを（始めから終わりまで、外側も内側も、裏も表も、光も影も、汚れも清さも）すべて受け入れておられます。憐れみと慈しみに満ち満ちておられる聖三位一体が、あなたとの霊的交わりを求めておられます。どうぞ、神の召しに応えてください。聖徒の交わりへと召される、キリストの民となってください。　　(二宮　創)

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 2章38，39節

賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも……
わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。

6月22日　最初の教会の姿　幼稚科

〈ねらい〉

教会は神さまが招いてくださった人たちの集まりであることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

私たちはどうして教会に来ているのでしょうか。まだ皆は子どもだから、自分で来ようと思って来た人はいないと思います。お父さん、お母さんがイエスさまを信じていたから、赤ちゃんの頃から教会に連れて来られた人も多いでしょう。あるいは、お友だちに誘われて教会学校に来始めた人もいることでしょう。そのように色々と理由があるかもしれません。でも一番の理由は、神さまが私たちのことを招いてくださったから、皆は、今、ここにいるのです（使徒2:38～39)。

最初は「神さまが招いてくださる」ということが、いったいどういうことなのかよく分からないでしょう。「教会に来てください」と直接神さまの声が聞こえてきたわけでもありませんし、神さまからお手紙や招待状が届いたわけでもないのですから。だから、神さまに招かれて、教会に来ているのだとは誰も思わないのです。大人の先生たちも皆、最初はそうでした。

でも、こうして礼拝を捧げているうちに、神さまが「わたしのところにおいで」と言ってくださることが分かるようになりました。聖書が昔のおはなしではなくて、今、自分に語りかけてくる言葉として聞こえてきました。教会に来るまでは、誰も自分のことを愛してくれない。大切にしてくれないとばかり思っていました。自分で自分のことを大好きになることもできませんでした。でも、そんな私を招いてくださる方がいること、愛してくださる方がいることが分かってきました。だから洗礼を受けて、クリスチャンになったのです。私を招いてくださる神さまのところに、「ありがとう」と言って飛び込んで行くことが洗礼を受けるということでもあります。

今から約2千年前、イエスさまの弟子であったペトロの説教を聞いて、多くの人たちが洗礼を受けました。イエスさまの十字架によって、私の罪が赦されていることを知って、皆、神さまのところに帰って行きました。3千人もいたと書かれています。私たちの教会はそこまでたくさんの人はいませんけれども、皆、神さまに招かれた人たちです。神さまに「ありがとう」と言って礼拝を捧げています。3千人もこの教会にはいませんが、ここでしていることは昔も今も同じです。イエスさまのおはなしを聞いて、イエスさまの恵みを皆で分かち合って、聖餐式をして、お祈りをしています（使徒2:42)。今日も、そしてこれからもイエスさまは、私たちを招いてくださいます。イエスさまの声に耳を傾けましょう。

〈祈り〉

今日もイエスさまのもとに招いてくださってありがとうございます。これからも私を招いてくださるイエスさまの声を聞いて喜ぶことができますように。

6月22日　最初の教会の姿　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも……わたしたちの神である主が招いて下さるものなら誰にでも、与えられているものなのです。」使徒言行録2:38～39

・これは誰が誰に言った言葉でしょう。
→ペトロさんが、人々に言った言葉です。
・「賜物」とは何ですか。
→「賜物」とは、神様から頂いた良いもの、すばらしいものということです。
・この約束（賜物として聖霊を受けるという）は、誰に対して与えられているものでしょうか。
→私たちに与えられています。私たちの神である主が、招いてくださる人なら誰にでも与えられています。

2. 説教を分かち合いましょう。

2-1. ペトロさんのことを考えましょう。

・ペトロさんの説教を聞いて感動した人々は、ペトロさんに「わたしたちはどうしたらよいですか」と言いました。それに対してペトロは最初に、なんと言ったでしょうか。
→「悔い改めなさい」そして、続けて、「めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」と言いました。
・「悔い改める」とは、どういうことですか。
→神様に従わない自分の罪を認めて、神様に謝って、神様の喜ぶ生活を始めることです。
・ペトロさんはどうして「悔い改めなさい」と言ったのでしょう。
→イエス・キリストによる救いは誰にでも開かれているからです。どんな人も自分が罪人であると認めることで、本当の救い主であるイエス・キリストを心から求めることができます。

2-2. 最初の教会の姿を見てみましょう。

・ペトロさんの説教を受け入れた人々は洗礼を受け、最初の教会ができていきます。人々は、どういう行いをしましたか。
→人々は、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることを熱心にしていました。
・「相互の交わり」とは何ですか。
→お互いに、聖霊によってイエス様とつながった兄弟姉妹としての交流を持つことです。
・「パンを裂く」とは、どういうことですか。
→ただ食事をするのではなく、聖餐式で「パンを裂く」のです。十字架上でキリストの体が裂かれ、血が流されたことを想い起こすための大切な食事のときなのです。
・信者の人たちは具体的にどんな生活をしましたか。一つ一つ答えて下さい。
→①みんなが一つになって、すべての物を共有しました。財産や持ち物を売り、それぞれの必要に応じて、みんながそれを分け合いました。
→②毎日ひたすら心を一つにして神殿に行きお祈りしました。
→③家ごとに集まって聖餐のときを持ち、喜びと真心を持って一緒に食事をしました。
→④神を賛美しました。

2-3. 私たちのことを考えよう。

最初の教会がどんな様子だったかを今日は見てきました。みんなの教会と比べてどうでしたか。人によって印象はバラバラでも、教会は今も昔も大切なことは変わりません。教会は聖霊によって立っています。そして、聖霊によって、みんなはイエス様とつながることができているのですね。

3. ゲーム

これまで覚えてきた暗唱聖句で、覚えているものを言いあってみよう（ずるさせないように、一人みんなの前にたってもらう）。たくさん言えた子にはお菓子をたくさん、など。

6月29日　ペトロとヨハネの働き　教理説教のための聖書黙想

テキスト　使徒言行録 3章1〜10節
参照教理問答　子どもカテキズム　問30
ウェストミンスター小教理問答　問30

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕聖書本文を読む。

使徒言行録3:1〜10をゆっくり声を出して、数回、読む。

〔STEP2〕この個所のテーマは何か？

イエス・キリストは、ご自身の名によって働く者たちに、ご自身の業を現わされる。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

十二弟子であったペトロとヨハネが神殿に上って行くと、生まれながらに足の不自由な男が彼らに施しを乞うた。ペトロが、イエス・キリストの名によって立ち上がるように言って、手を取ると、彼は躍り上がって立ち、歩き出した。神殿の境内で、彼が歩き回り神を賛美しているので、人々は驚いた。

【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕この個所で神はご自身について何をあらわされたか？

イエスは、天に昇られた後も、ご自身の名によって働く者たちのために、働きを継続し、足の不自由な男を癒された。

神は、イエスの名による癒しのゆえに、賛美を受けられた。

〔STEP2〕前後の章は、神について何と言っているか？

ペンテコステにおいて、エルサレムに留まっていた弟子たちに、目に見える形で聖霊が降った。聖霊に強められたペトロの説教をとおして、多くの人々が回心し、新約の初代教会が形成された。初代教会において、使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていた(2:43)が、今日の個所に記された出来事も、その実例と言えるだろう。足が癒された男を見て驚いた人々に向かって、ペトロは、イエス・キリストを証しし、イエスの名を信じる信仰が彼を癒したことを語る。

〔STEP3〕聖書全体をとおしての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

神は、ご自身の救いの計画を実現するために、約束してこられたキリストをお与えくださった。キリストは、地上での働きを終えて、天に昇られたが、聖霊を通して地上での働きを継続され、ご自身の王国を進展させられている。それは、キリストが再び来られる日まで続けられるお働きである。

【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕この個所に登場する当時の人々の必要は何だったか？

十字架で死なれ、天に昇られたイエスこそ、キリストであり、天に昇られ、目で見ることができなくなった後も、地上でのお働きを継続してくださっていることを知る必要があった。

〔STEP2〕私たちの教会の子ども達に似たような必要があるか？

イエス・キリストは、約2000年も前におられた方であり、目で見ることもできないので、自分たちが生きている現実に関わってくださるという実感がない。本当に困って自分ではどうすることもできない状況にあってなおイエス様が働いてくださることを知る必要がある。

〔STEP3〕この聖書箇所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

主イエスが天に昇られた後、使徒たちは聖霊を与えられて、力強くキリストを証しし始めた。かつて主イエスが病んだ者たちを癒されたのと同じように、イエスの名によって働く使徒たちがイエスの働きを継続する。使徒たちをとおして、天におられる主が、足の不自由な男を癒された。

現在の私たちの生活において、ここに記された出来事のように超自然的な奇跡を見ることは、

めったにないだろう。しかし、主は、ご自身の名のために働く者たちのために、今もなお地上での働きを継続してくださっている。この世で、力を持つと思われている「金や銀」のようなものはなかったとしても、もっと本質的な助けをお与えくださる。

学校でつらい経験をしているとき、あるいは困っている友達がいたとき、家庭で重荷を抱えているとき、私たちに解決する力がなくても、主イエスは生きておられ、お働きを継続してくださっていることを思い起こして、心を高く上げよう。主が祈りに応えてくださることを期待して、私たちは祈り続けることができる。

(テモテ指導者訓練「聖書的説教」モジュールを参考に項目を立てました)。　　(大西良嗣)

6月29日　ペトロとヨハネの働き　説教展開例

テキスト　使徒言行録 3章1〜10節
子どもカテキズム　問30

〔単元のねらい〕

今日の個所は、聖霊が与えられた使徒たちの働きの具体的な例として考えることができます。単に、使徒たちの働きが立派であったとか、不思議な奇跡が起こったということで終わらせず、「ナザレの人イエス・キリストの名によって」行われた働きであることを確認したいと思います。聖霊によって強められた使徒たちは、キリストの働きを継続したのですが、そのキリストは、今も生きて、働きを継続してくださっています。

イエスの名によって立ち上がり、歩きなさい

【序】

イエス様のお弟子さんたちは、ペンテコステのときに聖霊を受けましたね。それによって、力を与えられて、イエス様のことを多くの人に伝えました。そして、多くの人がイエス様を信じて、教会ができました。聖霊なる神様が、力強く働いてくださっている様子がわかります。

【物語り】

ある時、イエス様のお弟子さんだったペトロさんとヨハネさんが、神殿にお祈りをするために行きました。たぶん、エルサレムにいる間、毎日、ユダヤ人の習慣に従って、神殿にお祈りをしに行っていたのだと思います。

この日も、午後3時のお祈りの時間に合わせて、神殿に行きました。

すると、「美しい門」という神殿の門のそばに、足の不自由な人が運ばれてきました。この人は、生まれたときから足が不自由で歩くことができませんでした。毎日、誰かに、家から運んでもらって、「美しい門」のところに置いてもらっていました。まったく歩くことができないので、荷物のように置いてもらっていたのだね。そして、そこで、「お金をください」と通りかかる人に、お願いをして過ごしていました。物乞い、乞食などと呼ばれるような生活をしていました。自分では働くことができないので、こうして通り過ぎる人にお金をもらって生活するしかありません。とても、つらかったことと思います。無視されたり、バカにされたりすることも多かったことでしょう。

この日も、そんなふうにして、つらい思いをしながらも、お金をめぐんでもらうしかないと思っていたのではないでしょうか？　ペトロさんとヨハネさんが神殿の中に入っていくのを見て、「どうぞお金をください！」と声をかけました。

ペトロさんとヨハネさんは、立ち止まって、この人のことをじっと見ました。そして、「わたしたちを見なさい」と言いました。この人は、「よかった、何かもらえそうだ」と思って、二人のことを見つめていました。

すると、ペトロさんが言いました。「わたしには金や銀はない」。

何かもらえると思ったのに、「お金はない」って。

けれども、続けて、ペトロさんはこう言います。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。

こんなことを言われて、「何て無茶なことを言い出すのか！」と思ったかもしれません。けれども、ペトロさんは本気です。この人の右手を取って、立たせようとします。

「ま、まさか、そんなこと」と思ったことでしょう。けれども、ペトロさんになされるがまま、この人は立ち上がりました。すると、これまで、細

くて弱くて、力が入らなかった足が、たちまち、しっかりとして、躍り上がって立ち上がってしまいました。もう、うれしくてたまりません。歩き回ったり、踊ったりして、神様を賛美し始めました。

ペトロさんとヨハネさんも、喜んだでしょうね。三人は一緒に神殿の中に入って行きました。この人は、歩けたことが、うれしくてうれしくて、歩き回って、神様を賛美しました。

それを見た人たちも、驚きました。彼は、毎日、「美しい門」のところに置かれて、施しを乞うていましたから、顔を憶えている人も大勢いたでしょう。「あの人は、『美しい門』のところに、いつも置かれていた人だ！」と気づいて、ビックリしました。歩けるようになるとは、とても思えなかったような人が、今、目の前で歩いているからです。

【結び】

ペトロさんは、「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と言いました。イエス様は、このとき、すでに、天に昇られた後でした。けれども、イエス様は、天で、王様として、今も、この世界を支配されています。ですから、天にいらっしゃっても、この世界でのお働きを続けていらっしゃいます。ペトロさんやヨハネさんのように、イエス様のために働く人たちをとおして、イエス様ご自身が働いてくださっているのだね。ですから、ペトロさんやヨハネさんに特別な力があったわけではなくて、イエス様ご自身が、この人の足を癒してくださいました。

イエス様は、今も、天に生きていらっしゃいます。王様として、この世界を治めていらっしゃいます。私たちは、イエス様のことを目で見ることはできませんが、イエス様のお働きは、この世界でも続けられています。

私たちが、イエス様のために働こうとするとき、イエス様は私たちをとおして、ご自分の働きをしてくださいます。ペトロさんやヨハネさんが、「金や銀」を持っていなかったのと同じように、私たちも、特別な力やお金などは持っていないかも知れません。けれども、イエス様は、私たちを通して、ご自分の働きをしてくださいます。学校や家で、だれかが困っているとき、悲しい思いをしているとき、私たちは、どうしたら良いかわからなくなってしまうかもしれません。そんな時、イエス様に祈ってみてください。どうしたら良いのか教えてくださるように。イエス様が助けてくださるように。イエス様は私たちにも聖霊を与えてくださっていますから、私たちにも知恵を与え、勇気、力を与えてくださいます。そして、私たちにはどうすることもできないことのために、イエス様ご自身が働いてくださいます。　（大西良嗣）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 3章6節

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。
ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

6月29日　ペトロとヨハネの働き　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまは、私たちが求めていること以上に、素晴らしい恵みの中へと、立ち上がらせてくださるお方であることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

「美しい門」と呼ばれる神殿の門に、生まれつき足の不自由な男が座って、施しを乞うています。男は、足が不自由であるがゆえに、自分で立つことも、働くことも、生きていくこともできません。ただ神殿の門を通りすぎる人々からいただくものによって何とか命をつなぎとめることができたのです。男は、美しい門を見ながら、癒されることもない病のゆえに、身も心もボロボロになった自分の姿と見比べていたことでしょう。

そこにペトロとヨハネがやって来ました。彼らは、お医者さんではありません。立派な病院に連れて行って善い治療を受けさせてあげるほどのたくさんのお金を持っていたわけでもありません。そういう意味では、ペトロたちは男の求めに対して、ちゃんと応えることはできなかったのです。男はがっかりしたかもしれません。この人たちに施しを乞うただけ無駄であったと……。

しかしペトロたちには持っているものがありました。それはお金や食べ物よりももっと素晴らしいものです。それは「ナザレの人イエス・キリストの名」です。「名」というのは、その人の名前だけではなく、イエス・キリストの存在そのものをあらわす言葉です。「イエスさまがあなたにしてくださった素晴らしいことがあります。そのことを受け入れてください。信じてください。そのときに、あなたは自分の惨めさを見続けながら生きなくてもよいのです。神さまに愛され、救われた人間として立ち上がることができます」。

男が切に求めていたものは、生まれつき不自由な足が癒され、立ち上がることができるようになるということでした。そうすれば、毎日、物乞いをしなくて済む。自分の力で立ち上がって、働いて収入を得て、何一つ困らない生活をすることができるだろうと考えていたのです。

でも、ペトロたちが、あなたに与えると言ってきたものは、「イエス・キリストの名」であったのです。ペトロは右手を差し出し、この男を立ち上がらせます。そして男は、イエスの名によって、しっかりと地に足を着けて、立ち上がることができました。願いどおり、足が癒され歩くことができるようになったのです。

でもそこで起こったことは、単なる体の癒しだけではありませんでした。「歩き回ったり踊ったりして、神を賛美し」（使徒3:8）とあるように、男はただ歩くことができるようになっただけではなく、イエス・キリストの名のゆえに神を賛美することができる人間として立ち上がることができるようになったのです。ここに体の癒しに勝る本当の奇跡が起こっています。

教会に通い、礼拝を捧げ、イエスさまのことを信じることによって、自分の求めたものがすべて与えられるとは限りません。けれども、イエスさまは、お金やどんな美しさにも勝る素晴らしい恵みをあなたに与えてくださいます。どんな病や困難な壁を前にしても、ずっとしゃがみ込んでしまうことはもうないのです。イエスさまが、あなたの手を取って立ち上がらせてくださいます。

〈祈り〉

体も心も小さい私たちです。自分を強く大きくする力もありません。でも、そんな私たちにイエスさまを与えてくださいました。イエスさまが、しっかりと私の手をつかんでくださるその力に、感謝をしながら歩んでいくことができますように。

6月29日　ペトロとヨハネの働き　小学科下級

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

・これは誰が誰に言った言葉でしょう。
→イエス様の弟子のペトロさんが、足の不自由な男の人に言った言葉です。
・「金や銀はないが」の意味は何ですか。
→お金になる高価な物はないが、ということ。
・「持っているもの」とは何でしょうか。
→「イエス・キリストの名」による聖霊の力。
・「イエス・キリストの名」によると、なぜ立ち上がり、歩けたのですか。
→イエス様はこのとき天に昇られた後でしたが、弟子たちは「イエス・キリストの名」を使うことによって聖霊の力が弟子たちをとおして働きました。イエス様が生きた時と同じ業でした。

2. 説教を分かち合う。

2-1. 弟子のペトロさんとヨハネさんのことを考えよう

・今日のお話で、ペトロさんとヨハネさんはどうして神殿に行きましたか。
→お祈りをするために神殿に行きました。ユダヤ人の習慣に従って、毎日午後三時にお祈りをしていました。
・ペトロは足の不自由な男の人に「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と言いました。その後、その男の人はどうなったでしょう。
→生まれながらにずっと歩けなかったのに、足やくるぶしがしっかりして、歩きだしました。周囲の人も驚きました。
・ペトロさんたちは、金や銀ではなく、「イエスキリストの名」による病気の癒しを与えました。ペトロさんたちが、男の人に一番伝えたかったのは、なんでしょうか。
→イエス・キリスト。イエス様が今も私たちと共にいて、私たちを愛しておられることを一番伝えたかった。

2-2. 足の不自由な男の人のことを考えよう

・足の不自由な男の人は、ペトロさんたちに声をかけました。どういう気持ちで声をかけたのでしょう。
→何か施しがほしい。生きるために少しでも何か物を恵んでもらえないかという気持ち。
・「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と言われて、男の人はどう思ったでしょうか。
→はじめは何か物をもらえると思っていたので、残念に思ったかもしれません、でも次の瞬間に生まれてからずっと歩けなかった足が治って、とても驚き、信じられないぐらい、うれしい気持ちになりました。心から神様に感謝しました。

2-3. 私たちのことを考えよう。

私たちの周りでも困っている人や悩んでいる人がいるときがあると思います。そんな時、その子のために何かしてあげたい、その子に喜んでほしい、と思うことがあるでしょう。でも、自分はお金もないし、その子に役に立つこともできない。そういう時、苦しいですね。

でも、今日のペテロさんたちのように「イエス・キリストの名」によって、祈ってみてください。私たちを愛していてくださるイエス様がきっと助けてくださいます。どうしたら良いのか、聖霊なる力が働いて、その祈りに答えて教えてくださるはずです。

3. 暗唱聖句（敗者復活戦）

先週、暗唱聖句をうまくいえなかった子たちが、全部言えた！　という喜びを体験させて上げる。ご褒美の品々を用意する（品々は教師の本気度が伝わるようなものにする）。

2014年7〜9月カリキュラム（第54号）

―『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム 聖 書 箇 所	参照教理問答 暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月6日	御言葉をめぐって 整えられる奉仕者	使徒言行録6:1－7	
	働きは違っても、「証」という一つの目的に喜んで仕えて励む教会員となろう。		
13日	サウロを回心させる 復活のキリスト	使徒言行録9:1－19	
	目からうろこを落とし、キリストの証人として立てる神の力と愛にあずかろう。		
20日	世界を目指す アンティオキア教会	使徒言行録11:19－30	
	地の果てまで証人とする預言は日本の教会にまで至る。私達も世界を目指そう。		
27日	会議を通し、 聖霊に導かれる教会	使徒言行録15:1－21	
	教会は会議を通し聖霊に導かれ福音の真理を確認した。教会の交わりを大切に。		
8月3日	マケドニア人の幻の 信仰的解釈	使徒言行録16:6－15	
	一人が見た幻を神の召しとして確信したキリスト者たちから信仰的解釈を学ぶ。		
10日	平和主日	イザヤ2:1－5	
	もはや戦うことを学ばない、戦争放棄の憲法を擁護するキリスト者として立つ。		
17日	ローマで伝道するパウロ	使徒言行録28:17－30	
	いかなる壁をも乗り越えさせる御言葉の力が、今も教会を導く。伝道し続けよう。		
24日	聖霊とキリストに 導かれて歩む教会	ローマ8:26－39	
	聖霊とキリストの執り成しに支えられる教会は、勝利の内に成長を続ける。		
31日	天上のキリストの働き	黙示録1:9－20	
	天上にあって教会をご支配しておられるキリストの御姿を仰ごう。		
9月7日	天上の礼拝	黙示録4章	
	地上の礼拝は天上の礼拝に連なっている。礼拝の恵みを喜ぼう。		
14日	天地創造	創世記1章	
	世界を神の作品としてみるまなざしの中で、平安と使命感を持つことに招く。		
21日	人間の創造	創世記2:6－7	
	神に造られた存在として、神を知り、喜び、その栄光をあらわす人間の幸い。		
28日	罪と堕落	創世記3章	
	人間の罪とその恐ろしさを知り、悔い改めと信仰へと招く。		

2014年度 年間カリキュラム（第53～56号）

（2014年4月～2015年3月）

	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2014年	４月６日	レント	ゲツセマネのキリスト	問24, 26, 34, 81
第53号	４月13日	受難週	十字架のキリスト	問24
	４月20日	復活祭	復活されたキリスト	問24, 36
	４月27日		弟子たちを慰めるキリスト	―
	５月４日		弟子たちを立ち上がらせるキリスト	問66, 67
	５月11日		弟子たちを派遣するキリスト	問10
	５月18日		キリストの証人となる	―
	５月25日		教会を建てあげるキリストと聖霊	問39, 40, 65
	６月１日		キリストの昇天	問26
	６月８日	聖霊降臨祭	新しいイスラエル・教会の出発	問34
	６月15日		聖霊によって説教する教会	問69, 70
	６月22日		最初の教会の姿	問29
	６月29日		ペトロとヨハネの働き	問30
第54号	７月６日		御言葉をめぐって整えられる奉仕者	
	７月13日		サウロを回心させる復活のキリスト	
	７月20日		世界を目指すアンティオキア教会	
	７月27日		会議を通し、聖霊に導かれる教会	
	８月３日		マケドニア人の幻の信仰的解釈	
	８月10日		平和主日	
	８月17日		ローマで伝道するパウロ	
	８月24日		聖霊とキリストに導かれて歩む教会	
	８月31日		天上のキリストの働き	
	９月７日		天上の礼拝	
	９月14日		天地創造	
	９月21日		人間の創造	
	９月28日		罪と堕落	

年・号	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第55号	10月５日		アブラハムの召命	
	10月12日		アブラハムへの約束	
	10月19日		イサクの奉献	
	10月26日		エジプトに売られるヨセフ	
	11月２日		主が共におられる幸い	
	11月９日		悪を善に造りかえる主	
	11月16日		神の人モーセ	
	11月23日		主の過ぎ越し	
	11月30日	待降節	出エジプト	
	12月７日	待降節	平和の王イエスさま	
	12月14日	待降節	マリアへの告知	
	12月21日	降誕祭	キリストの降誕	
	12月28日		契約のしるし	
2015年	１月４日		約束の地	
第56号	１月11日		ダビデとゴリアト	
	１月18日		ダビデ契約	
	１月25日		ソロモン王	
	２月１日		ユダの滅亡	
	２月８日		回復の預言	
	２月15日		捕囚からの解放	
	２月22日		礼拝の再建	
	３月１日		異邦人の救い	
	３月８日	受難節	新しい契約	
	３月15日	受難節	苦難の僕	
	３月22日	受難節	受難のキリスト	
	３月29日	受難週	十字架のキリスト	

〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●息切れしながら原稿を何とか執筆できました。祈り励まして下さった方々、感謝します。皆様の益になりますように。(酒井啓介)

●小さな器を用いていただき感謝いたします。子どもたちが、幼い頃からイエスさまの恵みを覚え、その魂にキリストの福音が豊かに宿りますように心からお祈りいたします。(藤井 真)

●カテキズムに基づく2年サイクルが終わります。同じカテキズムの言葉に導かれ、神さまの子どもとして整えられていく礼拝は、本当に幸いだと思います。(安田直人)

〈あとがき〉

●第53号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●分級展開例を、今号より2つに増やすことができました。感謝です。また今号からは、一年間の救済史のカリキュラムとなります。その意図と今後については、前号の編集長執筆の一文をお読みください。

●中部中会信徒神学講座（2013年11月15日）の原稿をお寄せくださった金起泰先生、中部中会ジュニアサマーキャンプ（2013年7月30日～8月1日）の紹介をお書きくださった長谷川はるひ姉に、心から感謝いたします。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。
また、『子どもカテキズム』もぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼い』(800円）のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所　辻幸宏まで
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

2014年度 年間カリキュラム（第53～56号）

（2014年4月～2015年3月）

	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2014年	４月６日	レント	ゲツセマネのキリスト	問24, 26, 34, 81
第53号	４月13日	受難週	十字架のキリスト	問24
	４月20日	復活祭	復活されたキリスト	問24, 36
	４月27日		弟子たちを慰めるキリスト	―
	５月４日		弟子たちを立ち上がらせるキリスト	問66, 67
	５月11日		弟子たちを派遣するキリスト	問10
	５月18日		キリストの証人となる	―
	５月25日		教会を建てあげるキリストと聖霊	問39, 40, 65
	６月１日		キリストの昇天	問26
	６月８日	聖霊降臨祭	新しいイスラエル・教会の出発	問34
	６月15日		聖霊によって説教する教会	問69, 70
	６月22日		最初の教会の姿	問29
	６月29日		ペトロとヨハネの働き	問30
第54号	７月６日		御言葉をめぐって整えられる奉仕者	
	７月13日		サウロを回心させる復活のキリスト	
	７月20日		世界を目指すアンティオキア教会	
	７月27日		会議を通し、聖霊に導かれる教会	
	８月３日		マケドニア人の幻の信仰的解釈	
	８月10日		平和主日	
	８月17日		ローマで伝道するパウロ	
	８月24日		聖霊とキリストに導かれて歩む教会	
	８月31日		天上のキリストの働き	
	９月７日		天上の礼拝	
	９月14日		天地創造	
	９月21日		人間の創造	
	９月28日		罪と堕落	

年・号	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第55号	10月５日		アブラハムの召命	
	10月12日		アブラハムへの約束	
	10月19日		イサクの奉献	
	10月26日		エジプトに売られるヨセフ	
	11月２日		主が共におられる幸い	
	11月９日		悪を善に造りかえる主	
	11月16日		神の人モーセ	
	11月23日		主の過ぎ越し	
	11月30日	待降節	出エジプト	
	12月７日	待降節	平和の王イエスさま	
	12月14日	待降節	マリアへの告知	
	12月21日	降誕祭	キリストの降誕	
	12月28日		契約のしるし	
2015年	１月４日		約束の地	
第56号	１月11日		ダビデとゴリアト	
	１月18日		ダビデ契約	
	１月25日		ソロモン王	
	２月１日		ユダの滅亡	
	２月８日		回復の預言	
	２月15日		捕囚からの解放	
	２月22日		礼拝の再建	
	３月１日		異邦人の救い	
	３月８日	受難節	新しい契約	
	３月15日	受難節	苦難の僕	
	３月22日	受難節	受難のキリスト	
	３月29日	受難週	十字架のキリスト	

〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●息切れしながら原稿を何とか執筆できました。祈り励まして下さった方々、感謝します。皆様の益になりますように。(酒井啓介)

●小さな器を用いていただき感謝いたします。子どもたちが、幼い頃からイエスさまの恵みを覚え、その魂にキリストの福音が豊かに宿りますように心からお祈りいたします。(藤井 真)

●カテキズムに基づく2年サイクルが終わります。同じカテキズムの言葉に導かれ、神さまの子どもとして整えられていく礼拝は、本当に幸いだと思います。(安田直人)

〈あとがき〉

●第53号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●分級展開例を、今号より2つに増やすことができました。感謝です。また今号からは、一年間の救済史のカリキュラムとなります。その意図と今後については、前号の編集長執筆の一文をお読みください。

●中部中会信徒神学講座（2013年11月15日）の原稿をお寄せくださった金起泰先生、中部中会ジュニアサマーキャンプ（2013年7月30日～8月1日）の紹介をお書きくださった長谷川はるひ姉に、心から感謝いたします。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。
また、『子どもカテキズム』もぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼い』(800円）のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所　辻幸宏まで
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき
　長谷川潤（四日市教会牧師）
巻頭説教
　西　牧夫（灘教会牧師）
日曜学校・教会学校訪問
　長谷川はるひ（関キリスト教会信徒）
講演
　金 起 泰（犬山教会牧師）
聖書黙想・説教展開例
　牧野信成（西神教会牧師）
　相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）
　木下裕也（名古屋教会牧師）
　辻　幸宏（大垣伝道所協力牧師）
　小宮山裕一（ひたちなか教会牧師）
　赤石めぐみ（伊丹教会信徒）
　袴田清子（北神戸キリスト教会信徒）
　安田直人（田無教会牧師）
　浅野正紀（せんげん台教会牧師）
　長谷川潤（四日市教会牧師）
　二宮　創（太田伝道所宣教教師）
　大西良嗣（滋賀摂理教会牧師）
分級展開例
　幼稚科　藤井　真（堺みくに教会牧師）
　小学科　酒井啓介（宿毛教会牧師）
イラスト作画
　表紙　長谷川いのり（関キリスト教会信徒）
　本文　岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上教会牧師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻　幸宏	大垣伝道所協力牧師
二宮　創	太田伝道所宣教教師
長谷川潤	四日市教会牧師
安田直人	田無教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』
2014年4・5・6月号（季刊）
第53号
2014年2月25日発行

発行　日本キリスト改革派教会　中部中会 日曜学校委員会
発行所　日本キリスト改革派教会　中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上教会　牧師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座　00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）